
魔法少女リリカルなのは ～ 魔法少女と異能少年が交差したとき ～

Jam

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜魔法少女と異能少年が交差したとき〜

【Nコード】

N5086Q

【作者名】

J a m

【あらすじ】

神は人間に頼みごとをした。世界を救ってほしいと。

少年に与えられたのは、異能、の力

そして少年は世界を救いにいった。

少年と少女達が交差するとき物語は始まる。

初投稿です。その上作者はあまりリリカルなのはを見てません。

誤字脱字、おかしい文章などがあると思いますが優しくご指摘願
いします。

どうか、温かい目で見守ってください。

プロローグ（前書き）

処女作です。駄文だと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ

ある場所、俗に天界と呼ばれる場所。

そこで、神と呼ばれる存在たちが話し合いをしていた。

「まさか、と思ったがよもや本当とはな」

「さて、どうしたものでしょうか」

話し合っている内容は、

「神が離反するとはな」

「我々は手が出せませんぞ」

「やはりあの、人間を利用するべきじゃろ」

しかし、その言葉を聞いた一人の神が声を上げる。

「待つてください！それはいくらなんでも・・・」

だがその声を遮るかのようにまた声上がる。

「それがいいでしょうな。異議なし」

「私も」

「異議なし」

「それじゃあ、この件はお主に任せる」

そう言って出ていく神たち。

残ったのは反対の意見を上げようとした神だけ。

「許して・・・」

その呟きは誰の耳にも入らなかった。

プロローグ（後書き）

どうも、作者です。

興味をもたれた方、どうもありがとうございます。

つまらなかったと思った方、どうもすいません。

不定期になると思いますが気長にお待ちください。

次から本編？です。

感想待ってます。

第一話「神と少年が交差したとき」(前書き)

駄文だと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

第一話「神と少年が交差したとき」

ある世界、俗に天国とよばれる場所

そこに一人の人間がころがっていた。

「あゝ、ひまだゝ」

彼は神ではない。かといって死者でもない。

気が付いたらここにいた、まるでマンガのような状況に彼は喜んで
いたが、

「今何時だよ」

かれこれ数十分何も起こらない。

「これなら死んだほうがましだあゝ」

・・・まあ、死んでいるわけじゃないが。

「すいません。お待たせしてしまつて。」

すると、突然彼の背後から声が聞こえる。

彼はいきなり聞こえた声に、

「どちらさんですか」

・・・いたってやる気のない声で応える。

「なんですか、そのやる気のなさは」

「誰のせいだよ」

「誰のせいですかね」

「・・・てか、お前誰だよ」

彼はやっと今までいなかった存在に興味をもったのか振り返ってみる。するとそこには、

「！？アレイスター？」

男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える。存在、存在、

虚数学区・五行機関の制御の材料を求める。存在、存在、
かみじょう上条 当麻とうまやその周りの人間の人生を狂わせた。存在、存在、

しかし彼が驚いたのはそこではない。

そのことを、知っていた、のが問題なのだ

彼には記憶がない。

この場所に来た時から一般常識は覚えていた。

しかし、逆に言えば一般常識以外は覚えていなかった。

名前、家族、友人、そういったものがわからなかった。

そんな、中で自分が知らないものの名前などが出てきた。

驚かないほうが無理である。

「テメエ、いったい何の用だ」

しかし、驚いている暇もない。

今出てきた記憶が正しいなら、アレイスターは悪。

それが目の前にいる。それだけで警戒に値する。

だが、次の一言にまた驚かされる。

「用と言ったら、あなた世界を救う気はありませんか？」

「はあ？」

第一話「神と少年が交差したとき」(後書き)

次に興味を持っていただけなら幸いです。

感想待ってます。

第二話「神と少年が交差したとき2」(前書き)

目指すは、天国脱出

第二話「神と少年が交差したとき2」

どうも、名無し（仮）です。

今、アレイスター改め神の説明をきいてます。

なんでも、他の神がある世界を乗っ取ろうとしている。

それを止めたいが、これ以上神の力が加わるとその世界が力に耐えられなくて崩壊する。

だが、人間なら何とか送り込める。そこで俺に白羽の矢がたつたらしいのだが・・

「白羽の矢ってなんだっけ？」

「そこですか!？」

ちなみに、白羽の矢を立てるの意味は、
多くの中の人から犠牲者として選び出す。

（明鏡モバイル国語）

「冗談だつて。本当は・・なんで俺なんだ？なんで記憶がないんだ？
なんでとある『魔術の禁書目録』の記憶があつたんだ？」

これだけが理解できない。

一つ目は、俺は普通の人間だ。（たぶん）

俺の体はゴムじゃない。

忍術なんか使えない。

死神でもない。

革新者でもない。

腰にベルトなんかない。

神様の奇跡を打ち消す右手なんかない。

（以下略）

普通の人間だ。（大切なので二度言いました）

二つ目は、神と会った記憶を消すならまだわかる。

なぜ会った前の記憶を消すのか。

三つ目は、なぜ『とある魔術の禁書目録』だけ記憶にあるのか。

確かに他のアニメの知識もある。

しかし、他のアニメより記憶に残っている。

まるでその場にいたような感覚で。

この三つの疑問を神に聞いたところ、

「さあ?」

と返された。って

「おい！『さあ？』じゃないだろ！」

「冗談ですよ。力は私があげました」

なるほど、それならあんし・

「『あげました』？」

「はい、あげました」

「えーと、俺が選べないの？」

「はい」

どうよそれ

「ちなみに何？」

「この姿でわかるでしょ」

つまり『とある魔術の禁書目録』ってわけね。でも

「俺、演算できまいよ」

あんな難しいの無理。

「！？」

「いや『!?!?』じゃないだろ！」

「!?!?!?」

「ふやしてもいみねえよ！」

「冗談ですって」

「もうやめてくれ！」

「ちゃんと、どうにかしてますって」

「そうか。じゃあ他は？」

「他はまた次回」

次回って何？

第二話「神と少年が交差したとき2」(後書き)

天国から出れない。

感想待ってます。

第三話「神と少年が交差したとき」(前書き)

今回で天国脱出したい。

後今回から、とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲を

まとめて、とあるシリーズとしたいと思います。

嫌だと思われた方言ってもらえれば変えます。

あと主人公の名前はまだ名無しです。

では本編どうぞ。

第三話「神と少年が交差したとき3」

前回のあらすじ

「他はまた次回」

「粗すぎる」

名無し side

「ふむ」

唸っているのは俺、名無し。そろそろ名前がほしい。

今俺は、横になって本を読んでいる。

神様はどっかに行っている。

ちなみに読んでいる本は、小説『とある魔術の禁書目録』その22巻で手元にある最後の巻。

なぜ読んでいるか、それは前回俺に、とあるシリーズの記憶だけあると知った神から

「記憶を取り戻すカギになるかもしれない」

と言われたから。

アニメ・漫画はあるシリーズどっちも見た。
ちなみになぜ最終巻じゃないのかとゆうと

「いや、そんなことしたらつまらないでしょう」

……俺の記憶がかかってるんだけど。

そうこうしているうちに最後まで読んだ。

「上条どうなったんだろうか？」

うーん実に興味深い。じゃなかった

「神様、かゝみさゝまー！」

この後のことを話し合おうと呼んでいると

「はいはい、呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん」

「どこの大魔王だよ」

「いえ、神です」

「懐かしいな」

そんなことより

「全部読んだぞ」

そう言っただけ俺は本を指さす。

「そうですか。それで？」

「それでは？」

「進展はありましたか」

「なし」

「それは残念ですね」

しかし、その顔に落胆の色はない。

何があっても感情の変化がないその姿は、まるで正真正銘の

「アレイスター」

「いえ、神です」

「…アレイs「神です」」

早いな

まあ、そんなことより

「話変わるけどさ俺の能力何？」

「話戻しますけど、神です」

「いや戻さなくていいから！！もう終了！」

「戻しますけどk「言わせねーよ！あきらめろ」諦めたらそこで試合終了ですよ。」

「なんの試合だよ」

前言撤回、アレイスターよりたちが悪い。

そして悪役っぽさがない。

まあ、そんなことは置いといて、

「それをとりますが」

「もうやめて、本題に入らせてくれ」（泣）

「そうですね長いだけでつまらない話なんてね」

どこかで泣く声が聞こえる。

あとついでに「感想待ってます」とか聞こえる。

まっいいか。それより

「で、能力何」

「そうですね。原作知らない人用には後で書くとして」（ボソボソ）
「？」

「気にしないでください。簡単に言うと

一つ目は、とあるシリーズの能力全部、原石もです。

二つ目は、とあるシリーズの魔術全部。

三つ目は、とあるシリーズの機械や銃器、霊装など

四つ目は、特別編、世界の全てが分かる世界のh

「ちよつと待てい！それは『二人で一人の』とか『悪魔と相乗り』するやつじゃないのか！？」

……世界の目録《インデックス》

ですかね」

「……ギリギリセーフかな？」

「掛け声は『さあ、お前の罪を数えろ』『おい！』じゃなくて『さあ、検索を始めよう』ですから」

「もう分かるだろう！」

そのうち変身させられたりして……ありそうだなあ。

それは置いといて、能力はだいたい分かった。

「わかります。『世界の破壊者』ですね。」

「……どこが？」

「いや『だいたい分かった』のところですよ。」

「あつそう」

あつなんか落ち込んだ。

それより

「俺うまく戦えないと思う」

だって超能力だぜ。いきなり無理だろ。

「そんなあなたのために最後の能力、原作キャラ呼び出し」
「すごそうだけど？」

だからどうしろと？

「だから呼び出して特訓ですよ。
なるほど」

上条たちに特訓してもらうのか。
そっぴや上条は世界を救っているんだよな。
そっだ

「俺上条当麻に名前しようかな」
「なぜですか？」
「いや世界を救うにはちょうどいいだろ」

本当は上条が気に入ったからなんだけどな

「そろそろ行くか」
「それではこれを」

そいつで差し出されたのは軍用ゴーグル。

「サンキュ」
「名前はミサカです。」

一応、今から行く世界のことば聞いている。
そこでデバイスとやらを作ってもらった。

「じゃあ逝つてらっしゃい」
「舐めるなああああ」

神がつぶやいた瞬間俺は後ろに飛ぶ。
すると足元に穴が開いた

「なぜよけるんですか？」

「いや普通に道作れよ」

「いやです」

「即答かい」

「まあがんばってよけてください」

しゃべってる間も穴が開く

しかも不規則に。

だから俺も勘で飛ぶ。

「あ、いつときますけどあなたの右腕『幻想殺し』宿ってますから。」

「えっ!？」

思い浮かぶのは上条の不幸っぷり。
そして案の定足元に穴がそして俺は…

「あああああああ!?!」

落ちてった。

第三話「神と少年が交差したとき」(後書き)

なんかすいません。

行き当たりばったりすぎますよね。

あと仮面ライダーが頭から離れない(泣)

次回は主人公の説明回です。

感想待ってます。

少年と設定が…やっぱり普通に主人公設定（前書き）

…これで三回目

少年と設定が…やっぱり普通に主人公設定

では主人公野の名無し状態から

・名前……………???

・歳……………15～16歳

・性別……………男

・身長……………約168センチ

・体重……………約58キロ

・髪型……………アクセラレーターを少し長くして首の後ろで結んである感じ

・特徴……赤目・白髪

みたいな感じです。

上条

「名前以外は決まっているんだな」

いちお、名前も決まってる。変わるかもしれないけど。

上条

「どんなの？」

とあるを全部読めばそれっぽいのが載ってる。

上条

「誰かの兄弟みたいな？」

内緒。で次は

上条

「上条バージョンだろ」

まあ、大して変ってないけど。

・名前……………かみじょう上条 とつま当麻

・性別……………男

・身長……………約125センチ

・体重……………約28キロ

・髪型……………アクセラレーター+ラストオーダー（つまりアクセラレーターにアホ毛）

・特徴……………赤目・白髪・アホ毛

上条

「…何で身長と体重減った？」

お約束とゆうやつだ

上条

「まあ、いいや。で次は？」

デバイス

上条

「本編でしゃべってないのに？」

いいの。どうせ簡単なのしか書けないから

上条

「そうか。ではどうぞ」

デバイス

・名前……………ミサカ

・種類……………インテリジェントデバイス

・人格……………女性

・性格……………シスターズ妹達のミサカと同じ。ただし感情豊か（原因不明）

・形状……………待機状態・チョーカー
起動状態・軍用ゴーグル

・備考

デバイスとなっているが実際は、超能力を使う際の補助が目的
そのため、演算能力が高い

ミサカを介してみると様々なデータが数値で表示される
とあるシリーズの銃器、霊装を呼び出すことができる。

ミサカネットワークに接続可能

詳しく書きすぎたかな？

上条

「いいだろ別に」

そだね。

ちよつと長くなりそうなので能力説明はまた次回。

上条

「終わる前に、どうしてミサカはあるシリーズの道具を呼び出せるんだ？」

それは、ノリで？

上条

「ノリかい！そしてなぜ疑問形」

冗談だよ。それもまた次回。

上条

「それじゃあ、また次回」

・

少年と設定が…やっぱり普通に主人公設定（後書き）

わかりにくかったらすいません。

エラーが出たり、切断されたりで疲れた。

ちよつこと能力解説（前書き）

思ったんですが、これ原作知ってる人はいないんじゃないかと思ひ

原作との違ひや独自解釈を書こうと思ひます。

ちよつこと能力解説

『幻想殺し』について

- ・効果範囲は手首から指先まで
- ・異能が効くのは右肩から残りの体の部分
- ・自身に有益な能力は消さない（原因不明）
- ・バリアジャケット、デバイスは異能ではない

『一方通行』について

- ・効果範囲は体や、触れている部分一（右手以外）
- ・あらゆるものを操作可能一（その物質を知っているなら）
- ・微調整可能

『超電磁砲』および『発電能力』について

- ・全身から放出可能（右手以外）
- ・レールガンは飛ばすものを変えることで威力増減可能

これから変更の可能性あり

魔術はあまり変わっていません。

要望があれば詳しいのも書きます。

後、皆さんに質問です。

主人公の名前を上条当麻にしましたが、よろしかったでしょうか？

原作と同じで分かりづらいかもしれませんがどうでしょう？

分かりずらいと思われた方言ってください。

がんばって変えます。

それではじかいから本編のはずですー（おい！

第四話「異世界と少年が交差するとき」(前書き)

前前回の失敗にきずく当麻達

第四話「異世界と少年が交差するとき」

当麻 side

はい、前回神の野郎に落とされた俺、上条当麻（仮）現在は

「いつか殺してやる。いや、死よりも恐ろしいことをしてやる」

神に復讐を誓ってました。

右手で触れば倒せるかな？

そんなことより

「いつまで続くの、この穴？」

そう、落とされて結構経つのだがまったくつかない。

神はとことん俺を待たせたいようだ。

そうこうしていると足元に光が、ただ

「あやしい」

まあ、あやしくとも落ちていくしかないのだが。

そして、ついに落ちきる。そこには

「・・・やっぱり」

周りには、何もなし。あえて言うなら青い空そして白い雲。
上、上に同じ

下、はるかかなた、青い海

陸地なし、翼なし、このことから分るとうり

「俺落ちるうううう！てか、落ちてるうううううう！」

どうよこれ、転生直後にもう死亡？

ヤバイ、やばいどうしょこれ

《おはようございます。マスター》

「うん、おはよう。て言うとか思ったか！状況考えろ！！」

いや、もう頼むからどうにかしてくれよ。

《私は、ミサカと申します。以後お見知りおきを》

「この状況で名乗らなくてもいいよ！！！！」

いや、もう最初から分ったから。

《ってなんで落ちてるんですか！ってミサカはあわててみたり！！》

「今さらなのか！今さらなのか！」

もう、俺おちついて助かる方法おもいついたよ。

周りは、なにもない。とゆうことは、何してもいい。

「ミサカ、演算の補助を頼む！」

今の俺じゃ演算をちゃんとできない。だからミサカに頼む。

《えっあ、ちょっと待ってください・・・はい、いつでもいいです!》

「使うのは、『アクセラレータ一方通行』、反射を全身に」

そうこうしてるうちに、海面が近づく。

《演算、完了しました》

3人称 side

ズシャアアアアアン

その直後、高波が巻き起こる。

そして、

「危なかった」

《もうこんな真似したくないとミサカは愚痴ってます》

そこには2人(?)の姿が、どうやら何かをを反射して海面に立っているようだ。

「ついでだ、能力の確認でもするか」

どうやら、ここで能力を発動させるようだ。確かにだれもないのでいいだろう。

そして、どこからかカードを取り出し炎の剣を作り出す

その直後、

「ゴホッ、ガハ」

血を噴き出す。

第四話「異世界と少年が交差するとき」(後書き)

はい、自分のミスをそのまま話にしてみました。

ミサカは時々他の妹達シスターズの口調になります。

そして、次回から原作上条を、上条

本作上条を、当麻とします。

評価、感想待ってます。

第五話「少年が特に交差しないとき」(前書き)

少ない文才を振り絞ってがんばります。

「そうだな、じゃあ演算頼む」

まだ演算など、うまくできないため頼むのだが、

《いやです、自分で頑張ってください》

……何このデバイス

「いや、できないから」

《あなたはやればできる子なんです》

「いや、なにそのほめて伸ばそうとする感じ」

《気合と根性で計算ぐらいできますよ》

「そんな簡単にできるかよ！」

《不可能を可能にしてください。努力すればなんとかできますよ》

「…分かった。やってみるよ」

確かにに挑戦も大事だ。うん、何か試してみよう。

《努力してもどうにもならないこともありますよ》

「お前は俺にどうしてほしいんだよ！」

まさか新手の褒めて突き落とす育て方？

そうこうして、結局ミサカに演算してもらったのだが

「何で『^{ダークマター}未元物質』なんだ？」

今白い翼で空を飛んでる。普通に『^{アクセラレータ}一方通行』で海面走ればいいだろくに。

《いやまあ、あれですよ》

「あれとは？」

《……………》

「……………」

《今日もいい天気ですね》

「…それは記憶がない俺に喧嘩売ってるのか？」

昨日とか一昨日とかどんな天気だったのかの記憶にないし。というかこれは理由がないな。なんとなくわかる。

まあ風が気持ちいいし、別にいいのだが。そうこうしてると、

《あっ！マスター神からです》

「…何が？」

《ちゃんと私を見てください》

それは勘違いしそうそうだぞ。

まあ、ちゃんとゴーグルをかけろということだと理解したけど。
そこでミサカをちゃんとかけてみると、

<どうもー>

神が手を振っていた。

「殺す」

思わず殺る気、で右手をのばすが、

《マスターそれは映像です。殴れませんよ》

とミサカから制止の声が聞こえたためやめた。

どうやら、映像というのは本当らしく、神は一方的にしゃべっていた。

<忘れてましたがあとひとつ能力があります。聖人の力それと『聖母の慈悲』の全対応版です。

以上、神様からでした>

とりあえず、

「それだけかよおおおおお！」

聖人はまだわかる。聖母、聖母・・・？どんな能力だ？

確か、あらゆる約束・束縛・魔術的な条件を緩める能力だったはず。
その全対応版、つまりあらゆる条件を緩める。

なら、

「なら、能力者も魔術が使える？」

確証はない。ただそれでもやるしかない。

どうしようかと迷ってついた瞬間まだかけっぱなしのミサカから、
神の映像がまた流れ、

<あと、普通に魔術は使えますよ>

そして、また切れた。

「・・・・・・・・」

《・・・・・・・・》

「・・・・・・・・」

《た、大変ですね》

ミサカの同情が逆につらい。何であんなのが神なんだろう。

そうこうしてるうちにどこかの町にたどり着く。

「なあ」

《はい？》

「こんなのみられてもいいのか？」

そう言って俺は自分の背中から生えた白い翼を指さす。

《・・・・・・・・》

「おい？」

《さ、さあもうすぐ降りますよ》

「なんなんだその反応！？ダメなのか！ダメなんだな！！」

こうゆうのが普通の世界だったのかと思ったじゃないか！
ちなみに実はデバイスなどの話以外は神からは聞いてない。いわゆる原作知識なしというやつだ。

そして公園のようなところに降りる。

今空は少し暗めだろうか。そんな中出会った。

「ん？」

一人の少女に。

第五話「少年が特に交差しないとき」(後書き)

だいぶ無理やりな感じがしますが、こんなのしかできないんです。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第六話「少女と少年が交差するとき」(前書き)

若干久しぶりですが、どうも。

テストは終わりました。いろんな意味で。

これからもがんばっていくので応援してください。

第六話「少女と少年が交差するとき」

三人称 side

ある世界、その公園。何の変哲もない場所。
そこまでは普通だった。普通すぎるくらい普通だった。
まだ普通だった。

当麻 side

さて、ついたはいいが

「これからどうしよう」

まあ、敵と戦うのは決定してる。だがそれ以前の問題に、

「住む場所だろ、あと戸籍もいるかな？」

《他にお金でもないでしょうかとミサカは他のを挙げてみます》
必要なものがまだ多い。こうなったら錬金術でもするか？と悩んで
いると

《神様に聞いてきましようか？》

と提案してきた。確かにこのまま路頭に迷うよりいいだろう。

「うん、頼む」

そして、うんともすんとも言わなくなるのだが、

「おれ……何してよう?」

やることがない。正直暇だ。すると公園に少女がいる事にきずいた。ちよっとおしゃべりに付き合ってもらおうかな。そして俺はその少女のほうに歩いて行った。

??? side

お父さんがけがをして大変なのも分かってる。

お父さんを看病してあげてお母さんが大変なのも分かってる。

二人がいなくてお兄ちゃんもお姉ちゃん大変なのも分かってる。

それでも… それでも…

「……さびしいよ」

ただのつぶやき。誰も何も言ってくれない、そう思ってた。

「なんいだ君もさみしいのか」

そんな言葉が聞こえ、顔を上げてみると

「じゃあ、ちょっと話でもしないか？」

真っ白な髪をした男の子が立っていた。

「俺の名前は、上条当麻。君は？」

そう言って右手を差し出してくる。

私はその手を取りながら名乗る。

「わたしは、なのは。たかまちなのは」

そうして男の子、当麻君は言う。

「よろしくな。なのは。」

当麻 side

結局ミサカが帰ってくるまで（？）なのはと話していたがどうやらいろいろと大変なようだ。

まずなのはのお父さんが何かで重傷を負ったらしい。

それで、他の家族が忙しくあまりかまってくれないようだ。
なんというか

「大変だよな」

「なにが？」

となりで俺のつぶやきを聞いたのはが首をかしげる。

「いや別に。何でもないよ」

ひどい話だこれぐらいの子に気を遣わせるとは。まだ親に甘えたいだろうに。

いや案外もう親離れなのか？とくだらないことを考えているとなのはが急にそわそわし始める。

「どうしたなの？」

「えーとね、もうそろそろ帰らないといけないの」

なるほど確かにもう暗い。

「じゃあなんで帰らないんだ？」

「…当麻君また会える？」

どうやら俺と会えなくなるかもしれないから心配をしているようだ。

「どうだろうか」

まあこれからのことはまだ決めてないしな。

「そうなの」

と少し悲しそうに言ってくる。

「落ち込むな。なら会えるような未来をつかみ取ればいいんだ。うまくすればまた会えるさ」

そう言っただのは頭をなでる。

「うん」

「分かったらもう帰れ。お母さんが心配してるぞ」

そういうとなのは歩いて去ってゆく。

「じゃあな」

「うん、バイバイ」

そう言っただけの姿が見えなくなるまで手を振る。

するとまるでタイミングを見計らったようにミサカの声がする。

《もう、友達ができたんですか？》

「まあな。それは置いといてどうだった？」

《では言っただけに行ってください》

ミサカの言うとうりに行くとそこにはマンションがあった。

「どうするわけ？」

《いいから言っただけに行ってください》

そしてある部屋の前まで来た。

「で？」

《開けてください》

そして扉をあけるとそこには

「どうも」

神と

「邪魔してます」

上条と

「邪魔してるわよ」

御坂と

「……………」

アクセラレータ

がいた。

「……………なんでだよ」

第六話「少女と少年が交差するとき」(後書き)

やっと原作キャラ登場。

あと、天照大神様いつも感想ありがとうございます。

読んだだけという方もありがとうございます。

できればまた読んでください

第七話「悪党（+α）と少年が交差するとき」（前書き）

今回上条さんたちがすぐ空気化します。
ただアクセラレータは生き残ります。

アクセラレータの口調難しい。

第七話「悪党（+α）と少年が交差するとき」

当麻side

今居間に居ます。アクセラレータと二人で。

他の人？ミサカと神はなんかミサカの調整らしくてどっかに行った。
上条と御坂はキッチンで……

「御坂、ちょっとそこにとって」

「ん、これ？」

「ああ、それぞれ」

「はい、てそれ焦げてない？」

「え、てうわ！ヤバい、御坂水、水！」

「ちょっと待つてよ！はいみ、きゃあ！」

「何で何もなくてここでこける！？てあちい！これお湯じゃん！」

「ゴ、ゴメン」

……何やってんだろ。途中までは普通だったのに。
すると突然アクセラレータが立ち上がる。

「ん？どうした」

「デメエはできねエメシ待つのか」

答えは否、断じて否だ。なんかここにピッタリのセリフがある気がする。え」と

「あれー？台所はそっちじゃないと思うんだけど、ってミサ、ゴホン正しい台所方向へ指をさしてみたり」

「なんで俺がメシ作らなきゃなんねんだ。ってか俺がそんな事をする人間に見えんのかよ」

「えー、そこで意外性を出すためにエプロン装備の家庭的アクセラレータに期待してたのに、

ってミサ力はぶーたれてみたり。あ、ミスった。」

「なんか聞こえたがまあいい。いちお聞いておく、それはどこのクソガキの真似だ？」

「クソガキ行ってる時点で分かっていると思うけどあなたの妹さんです」

「あいつを妹にした覚えはねえんだが」

「え、まさか恋人？」

「どこのロリコンだよ」

「え、まさか妹で恋人？」

「どこのシスコンだよ」

「えー、そこで意外性をみせたシスコン宣言をしてほしかったのに」

「いるかそんな奴」

「いるよ、土御門とか…土御門とか土御門とか」

「土御門しかいねエじゃねえか！」

「そうだ！」

「開き直るンじゃねエ！」

「おとなしくシスコンとみ…あ、ごめんなさい。すいませんでした。だからそのチョカーにある手を　下して、いや拳銃も下げて、つて何で持つてるの！？」

その後ふつうに外に出た。

出る直前に「御坂、ストップあぶな、ぎゃああ上条さんの腕がまた切れる！」とか聞こえた。

俺はなにも起こってない見てない聞いてないと自分に言い聞かせながら家（仮）を出た。

三人称 side

そこには、二人の人がいた。一人は皆に怪物とおそれられ何人も人を殺した。

一人は記憶をなくし自分が人かどうか
も分からなかった。
その二人は戦っていた。

「デメエ、ひとの肉とるンじゃねエ！」

「甘い、こいつはもうおれの胃袋へ一方通行だ」

「人のセリフ、下らねエことで使ってるンじゃねエ！」

「じゃあ、たとえ相手の肉でも、どんな理由を並べても、その肉を
食ったらダメな理由にはなんねえんだよ」

「どんな理屈だよ！」

肉をかけて。

周りからみられているのにもきずかず。

こんな様子を伝えても意味がないため割愛させていただく。

無駄な戦いから数分。今、当麻は十杯目のドリンクバーを飲んでい
る。

「で、なんで俺についてきた」

アクセラレータがそう聞く。それに当麻は

「いやあそこに居ても殺人現場に立ち会いそうだし」

と苦笑いしながら答える。しかしアクセラレータは

「嘘だな」

とすぐ見破る。

「……どこで気がついた？」

「さアな、で何なんだ」

「……俺を強くしてほしい」

「……最強になっても孤独があるだけだぞ」

この言葉はかつて最強だったことがるアクセラレータだからこそ響く。しかしそれでも

「俺は戦うためにこの世界に来たんだ。なら強くないと」

当麻はおれない。

「ならいい、覚悟はあるんだな」

「ある」

「ならまずは……」

そついつてどこからか紙の束を出す。そして告げる、人皆が嫌がる言葉を

「勉強だ」

「はあ??」

「俺の力はオートで反射にしているがそれで攻撃を受ける場合もある」
木原との戦い。能力の範囲内で手首を返す。それが反射され反射の壁を超える。

それによってアクセラレータは痛手を負わされた。

「だからその場、その場に応じて反射の対処を変えるようにお前はしろ」

「で、なんで勉強？」

「演算の速度を上げんだよ」

「はあ」

「だからお前はこれから勉強すけだ」

「はあ、てそんなことしたくねえ！」

そう言っただけで逃げ出そうとする当麻。しかし

「逃げたら俺と死の鬼ごっここの始まりだ」

その一言で当麻は帰ってくる。

「くそ！いつか呪ってやる」

とアクセラレータを当麻は恨みのこもった目で見る。

がんばれ当麻、原作が始まるその日まで

「間違えたら銃弾が眉間をぶち抜くぞ」

「何その罰ゲーム！」

その頃上条たちは

「死ぬかと思った」

「ホントゴメン」

「まあいいかな御坂の作った飯食えるし」

「ええと、たぶんおいしいと思う」

「大丈夫、だって御坂の作った飯だろ。うまいに決まってる」

「@¥^・」（ボンッ）

「おい、ミサカ大丈夫か。湯気でてるぞ」

何かしていた。

第七話「悪党（+α）と少年が交差するとき」（後書き）

はい軽くアクセラレータが壊れました。

あと口調はこれでよかったでしょうか？

感想待てます。

第八話「少女達と少年が交差するとき」(前書き)

地震、津波大変ですね。

私の家はどちらも来なかったです。

油断大敵といえますのでいちお用心しておきます。

第八話「少女達と少年が交差するとき」

当麻 side

どうも、当麻です。現在小学二年生です。

前回から二年ぐらい、経ちました。変わったことは、まあ色々あります。

能力のレベルがほとんど4→5になったとか、魔術をタイムラグなしで発動できたり、一人で演算全部できるようになったり。まあ他にも色々。

その中で一番変わったのは上条達が帰ったこと。何でもこれ以上いと世界の歪みが大きくなって修復不可能になるらしい。しかし、また会うことはできるそうだ。

いや、正直そんなことになるなら別に来なくてよかったと言ったらかこのCMぽく「あなたのためだから」とかぬかしてきやがった。確かに強くなったがどちらかと言ったら邪魔だった。

もう朝からビリビリしたり、寝ぼけて殺されかけたり、賞味期限切れの野菜炒め食わされたり。

そのおかげで鋼の胃袋を手に入れたりした。

と、大切なのはそこじゃない。要するに一人になったのだ。一人とというのは厄介事を押しつける相手がいないということだ。つまり

「なによ、あんた達？」

「アリサ・バニングスと月村すずかだな」

「はい、そうですけど」

「手荒なまねはしたくない。おとなしくついてきてくれないだろうか」

「あんだ、まさか誘拐!？」

「「えっ!？」」

「ほらおとなしく車に乗れ。さもないとその無関係なお嬢ちゃんが怪我するぞ」

「なのはちゃん…ゴメン、巻き込んだじゃって」

「ううん、大丈夫」

「ほら早くしろ」

下校途中の少女が誘拐されていたら、それを自分で助けなきゃいけない訳だ。

そうこうしてるうちに車は走り去ってゆく。俺にはきずいてなかったようだ。

よし、

「帰って、インデックス読も」

《そこは助けに行きましょうよ》

「え〜」

新章1巻まだ読んでないし

《ほら助けて彼女たちにモテモテになりたく……》

「ない」

《犯人逮捕で賞状貰いたく……》

「ない」

《もしかしたら、彼女達を助けたら何か奢ってくれるかもしれないよ》

「いない」

《もしかしたら、翠屋のケーキとか》

「よっしゃ、何か急に犯人逮捕したくなった」

《ホントに急ですね》

いや、食べたいじゃん。あそこのケーキおいしいし。そっいや、小学生の娘がいるって土郎さん言ってたな。どんな子だ？

「とりあえずケーキのためいざ出陣！」

《…はあ》

ついでに買い物してかえろ。

三人称 side

周りは暗くお世辞にもきれいとは言えない場所
そこに、3人の少女が捕まっていた

「なのは、ゴメン巻き込んだじゃって」

「ゴメンね、なのはちゃん」

「私は大丈夫」

少女の一人、高町なのはは普通の少女だ。他の少女、アリサ・バニング、月村すずかは家がお金持ちだからという理由で誘拐されたが彼女には何もない。あえて言うならその二人えの人質だろうか。

「さて、あの場にいたからさらってきたがどうする？」

「ばれなきゃいいんだろ。殺して埋めるか？」

「いや、どうせならそうゆう趣味のやつに売るか」

と3人を先ほど、さらった男たちがいう。人数は6人ほどで武装は小型の拳銃だけのようだ。

「それでいいか。じゃあつれてこい」

「はいはい」

そういつて男の一人がなのはに近寄ってくる。

「何よ、こっちに来ないで!!」

「やめてください!」

二人は止めようと必死でいうが男はとまらない。

そして、男の手が自分に触れようとしたときおもいうかんだのは、寂しくって独りぼっちの時に出会った少年の名前。

(助けて、当麻君)

そう念じた瞬間、

「お、ギリギリセーフかな」

と白髪の少年がいつの間にかいた。

「ん?おいガキどっから入ってきた」

となのはに近寄っていた男がそちらを向く。

「……………」

「なんだ?まあいい捕まえてやる」

と少年が黙っていると男は捕まえようと動き出す。
しかし、

「くそ、ちょこまかしやがって」

「たく、何やってんだよ」

まったく捕まらない。途中から二人に増えたがそれでも捕まらない。すると少年がしゃべりだす。

「うわゝ二人がかりでも捕まえないだなんて」

「くそコケにしゃがって」

「ゼツタイ捕まえてやる」

そして一気に男達が近よった瞬間

「隙あり!!」

キイイイン

「ウグウ!!」

少年が男達のまた下を通り抜けていく。どこから出したのかヘルメットをかつぶて。

そして通った直後に男達がうめき声を上げながら倒れる。

男性ならわかるだろう何があったか。そしてそのつらさも。なのであえて言及しない。

「おい、そのガキ何やってんだ!」

「おい、あいつら大丈夫なのか」

残っている4人の男達も子供に仲間がやられたため驚いている。

しかし、その直後違うことで驚くことになる。
それは、

「頭上にご注意ください」

「は？なにいつて…」

「いいからつかま…」

ガン

「」「」「グホッ」「」「」

頭上からのタライだった。

相当痛かったのか全員気絶している。

「その子たち無事？」

そういつて近寄り助ける。

「はい、ありがとうございます」

「大丈夫、なのは？」

すずかが少年にお礼を言う横でアリサはなのはの心配をする。
するとなのは

「ありがとう…当麻君」

「ん、どういたしましてなのは」

これが少年と少女の2度目の出会いだった

第八話「少女達と少年が交差するとき」（後書き）

作者「なあ」

当麻「なんだ？」

作者「何でわざわざあんなひどいことをしたんだ！」

当麻「永遠の5歳児の映画見たんだよ」

作者「くだらねえ理由だなおい。素直に能力使えよ」

当麻「使ったよ。タライレポート」

作者「何でタライあんの？」

当麻「ご都合主義だよ」

作者「なんか普通会話の内容逆な気がする」

当麻「また次回も見てください」

作者「感想も待ってます」

第九話「少女達と少年が交差するとき2」(前書き)

最近忙しかった中での三連休ゲットだぜ！

第九話「少女達と少年が交差するとき2」

あらすじ

当麻が永遠の五歳児や昔のコントみたいな方法で誘拐犯を撃破

当麻 side

ついさつき三人を救って今は翠屋に居る。
ちなみにタライは偶然とごまかしていた。
今は、

「今までどこに居たの？」

「どこに居たのと言われたら地球」

「そのくらい分かるの！もっと具体的にお願いなの」

なんか筆問攻めにあってる。どうやらあれから公園に来なかったのがお気に召さなかったようだ。 ほかの二人はコソコソ話してる。

「ねえ、聞いているの」

「ああ、なんだっけ？」

「だから、今までどこに居たの？」

「日本」

「だ〜から」

「なのは、当麻君にも言えないことぐらいあるさ」

と誰か助けてくれる。ん？この声は

「士郎さん／お父さん」

と俺となのはの声が重なる。
てかお父さん？

「当麻君知ってるの？」

となのはが俺に聞いてくる。それに士郎さんが代わりに答える。

「なのはがいないときに、時々当麻君が来るんだよ」

俺は噂でこのことを知ってちよくちよく食べに来ていた。

「士郎さん、前に言ってた娘って…」

「ああ、なのはのことさ」

くそ、俺はただの嘘だと思っていたのに。こんなに若い人間なんて
いるわけ……いたな。

と俺が一人考えていると

「当麻君、またなのはを助けてくれたようだね。ありがとう」

そう言ってシュークリームを持ってきてくれた。

それをありがたく貰いながら

「いえいえ、このくらいお安いご用ですって」

人間の百や二百どおってことない。この世の理を無視した存在じゃなきゃ全部壊せる。

「じゃあとは若い者同士で」

といいながら土郎さんは中に戻っていく。あなたも見た目十分若いですってという一言を飲み込んで、

「で、何か言いたいことがあるんじゃない？」

と空気になりかけていた少女二人に問う。

「さっきは本当にありがとうございました」

と少女…確かすずかがいう。

「ホント助かったわ」

と少女…アリサがいう。

だが俺がきずいたのはそれじゃない。

「お礼はいいけど、聞きたいことあるんじゃないの？」

二人は少し驚いた表情になりながらもアリサが訪ねてくる。

「あんだなんで分かったの？」

「さっきから目が俺の髪と目にはかりいつてるぞ」

前アクセラレータだったか人に人の目を見て動きをよめだったか言われたから実践している。

どうせ何でそんな色なのかだろ。

「何でそんな色なんですか？」

当たりかよ。

「さあ、何でだろ。俺も分からないな」

記憶がないし。

「あと敬語はいいよ」

なんかむず痒い。

「はい、じゃなかったうん」

「そうだ自己紹介まだだったろ。俺は上条当麻」

そういつて手を差し出す。

「わたしは月村すずか。よろしくね」

手が柔らかいな。次は

「聞こえてたと思うけど上条当麻だ。よろしく」

アリサに手を出すと握り返してきて

「あたしはアリサ・バニングス。よろしく」

うん、やっぱり柔らかい。

「ねえねえ当麻君、私は？」

「なのはは、もういいだろ」

「ええ！ヒドイー!!」

こうして俺は友達ができた。
まあ、他にもいるけど。

第九話「少女達と少年が交差するとき2」(後書き)

作者「俺も他の作者様みたいにあとがきでなんかしたい!」

当麻「軟化?」

作者「いや柔らかくなつてどうするんだよ」

当麻「南下?」

作者「別に南に行きたいんじゃないんだけど」

当麻「じゃあ北?」

作者「具体的にはお前に何かしたい」↑無視

当麻「例えば?」

作者「じょそ^uいたたた!」

当麻「なんて?」↑手首ひねってる

作者「ギブギブ!」

当麻「では皆様また次回」

作者「感想評価、当麻を倒せるもの待ってます」

グチュ

作者「ぎゃあああああ!」

第十話「少年達と少女達が交差するとき」(前書き)

今回オリキャラ登場

あらすじは時々します。

第十話「少年達と少女達が交差するとき」

当麻side

今年で俺も三年になった。

えっ？飛びすぎ？もう十話なんです分かって！え〜と今は屋上で飯食ってる。

なのは、アリサ、すずかはベンチで俺は、

「春樹おいてめえ、俺のから揚げ返せ！」

「この、卵焼き（生物兵器）あげるから」

「おい、何か不穏な言葉が…てか動いてるぞそれ！」

「ぎゃあ！当麻パス！！」

「アタック！！！」

「ダメダメストップ！！」

床で春樹と戦っていた。てか戦う率高いな。

えっ？春樹って誰かって？え〜と宿敵？冗談はさておき春樹は俺の親友…

「僕の弁当（汚染物質）を食らえ！」

だったようだ。今はただの敵だ。

「てか、やっぱりその弁当は？」

「…姉さんの手づくりの弁当…らしきもの」

「…俺の食つか？」

「…ありがとう」

大変だな。一年のころからの付き合いだがこいつの弁当は進化しているな。前は動かなかったはずだ。

今までのやり取りで分かったかもしれないがこいつは俺の学校での友達だ。

名前は吉井 春樹 よしい はるき。それで他のやつからハルと呼ばれてる。

色々あって俺の秘密（転生のこと以外）を知っている。記憶喪失のこととか。

代わりに春樹の秘密も知っている。出会いやその秘密何かはまた今度機会があったら。

「将来の夢かあ」

ん？確かさっきの授業がそんな内容だったはず。

「アリサちゃんとすずかちゃんは今結構決まってるんだよねえ」

アリサとすずかは答えるのだが要約するところだ

「親の会社を継ぐ」

これがアリサ。すずかは

「工学系の専門職」

でなのはは決まってるないようだ。

「当麻君とハル君は夢あるの？」

となのはが俺とハルに話をふってくる。

「うゝん、僕も親の仕事を継ぐ、とゆうか同じのにつくかな」

ハル（俺の弁当装備）が答える。

「ふゝん、じゃあ当麻あんたのは？」

今度はアリサが聞いてくる。

「夢か…」

俺には記憶がない。だから夢もない、いや分からない。だが言わずに逃げられる雰囲気じゃない。

なのは、アリサ、さすがが完璧にこつちを見ている。男の夢なんかは何の興味があるんだか。

唯一の春樹は俺の弁当ガツガツ食っている。くそなんて答えるかな。

「ねえ、当麻君の夢は何？」

ついにはすずかまで聞いてきた。

「そうだな、んゝ」

何かないか、何か…そうだ

「平和」

「それって夢なの？」

「さあ？」

「さあ、てあんた」

「これしかないんだから仕方ないだろ」

「でも当麻君らしいね」

「すずか、いちお褒め言葉として受け取っておくよ」

三人称 side

そして場面は変わる。

一人の少女が力を手に入れ異形と戦っているときに一人の少年も戦っていた。

「さてと、やるか」

《がんばってください》

「はいはい、てかミサカ少し久しぶりだな」

《何のことでしょう?》

「いいや何でもない」

まるで日常のような会話。しかし少年…当麻の前にあるのは…

「アアアア」 「ウバアア」 「グガアア」

黒い影のような集団。しかしその数は分からない。なぜなら

「見えないな」

《見えませんねえ》

先ほどから当麻はここにいるのだがどんどん増え続けついに向こう側が見えなくなってしまった。そしてついに囲まれてしまう。

「あゝあ囲まれた」

《囲まれてしまいましたねえ》

「こいつらの名前何にしよう?」

《今考える事ですか?》

「そつだ! 影っぱいからシャドウにするか」

《無視ですか》

そしてついに影の集団が「シャドウだ、死にたいのか」

「シャ、シャドウがついに自分達から動かしたとき「よしいいだろ」
『誰と話してるんですか？』」

「さてまあとりあえず…」

そう言つて首のチョーカーに手を伸ばす。そしてスイッチを入れる。
戦闘用のモードに。

《演算補助開始》

ただでさえ常人を凌駕する頭脳をデバイス（ミサカ）で補助する。

そして、ついに始まりを告げる

戦闘とゆうなの殺戮の始まりを。

「殺^やるか」

第十話「少年達と少女達が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナーわ〜パチパチ

春樹「何で僕までここに来なきゃいけないんだ？」

当麻「さあ、でもその前に言うことがあるだろ」

天照大神様、龍賀様感想ありがとうございます。

んで次はオリキャラ説明

吉井（よしい） 春樹（はるき）

見た目はバカテスの明久、以上。

当麻「もう終わりかい！」

春樹「僕はこれでいいけど」

では次は女装k「絶望タイムだ」ぎゃあああああ！

春樹「あゝあ、ちなみに当麻は少し女顔です。

とゆうわけでまた次回。」

当麻「感想、贈り物（攻撃可）まっています！」

特に当麻を倒せるぶkぎゃあああ指はそっちに曲がらない！！

春樹「とにかくなんでも待ってます」

第十一話「敵（ザコ）と少年が交差するとき」（前書き）

珍しく二話目投稿

第十一話「敵（ザコ）と少年が交差するとき」

三人称 side

目の前にあったのは敵だったもの。

しかし腕がなかったり足がなかったりひどいと顔がなかったりしている。

しかしこんな惨状を起こしたのはのはひとりの少年である。

その少年はとゆくと

「……………」

《物足りないって顔してますね》

「興ざめもいいところだ」

起こしたといっても、やったことはひとつ。先頭を殴る、ただそれだけ。

もちろん少年の力は強い。しかし異常である。まるで…

「戦う気がないみたいだった」

《話し合いはあり得ませんよ》

それを聞いて少年…当麻は考えるしぐさをする。

「そうだな。前のは普通の強さだった。あるとすれば…まさか陽動！」

しかし、当麻はすぐにその考えを捨てる。

「そんなことしてなんになる。今日は春樹は家にいるはずだ。だって何が？」

春樹とは当麻の力を知る一人である。それならば狙われるのも分かるがあいにく

春樹の家には、特殊な仕掛け、がある。何度もそれで撃退したため無駄だと敵もきずいてるはずだ。そう当麻が考えていると

《これは！？魔力反応感知！！それとシャドウもいます》

とミサカが告げる。

「赤の他人のところかよ！！」

《どうしますか？》

「どうするって決まってる。職務を果たすさ！」

そう言っただけ当麻は『未元物質』（ダークマター）を発動する。

しかし、普通の『未元物質』（ダークマター）の白い翼とは違いその翼はダークマターの名のとうり漆黒だった。

「…何で俺が演算すると色が変わるんだ？」

《さあ？》

そして当麻は飛ぶ。今から行く場所に知り合いがいるとも知らない

で。

なのはside

私はフレットさんに言われたとつりにジュエルシード？とゆう物を封印したの。

そしたら服が元に戻ったの。だから

「終わったの？」

てつぶやいたらフレットさんが

「はい、あなたのおかげで。ありがとう」

と言って倒れちゃったの。それでどうしようかと思ってたら

「・・・・・・・・・・」

さっきの怪物にそっくりなのが出てきたの。

必死にさっきの真似をしようとしたけど間に合わなくてもう駄目っ
と思っ て目をつぶったけど

なにも起こらなくてどうしたんだろうと思っ て目を開けてみたらそ
こには

「たくよう、なんだって俺のところに来ないんだ」

《まあ運がなかったとゆうことで》

「久しぶりの不幸ってか？」

白い髪で

「まあ、昔に比べたらこのくらいどつってことないけどな」

《最近、運が良くなりましたね》

目のところには見覚えのあるゴーグルをかけて

「けど、俺の後ろの女の子がなあ」

《それはこちらで何とかしておきます》

そんな特徴の中でひととき目立つのが

「できるんだ」

《できます》

背中の中 真つ 黒な

「じゃあさつさとかたずけて」

《帰りましょう》

真つ 黒な翼

そして今の状況を思い出しあわてて怪物を見たらそこには

「ふえええええ！？」

道路に怪物が埋まっていた。

当麻 side

いやはや、反応のあったところにきてみればなのはがいてびっくりした。

正体はミサカがどうにかするらしいから任せるとしてとりあえずてか『表層融解』（フラックスコート）面白いな。

などと思っているとまだ埋まっていなところから触手を出し攻撃してきた。

狙いは俺と、なのはか。だが…

「甘いな」

俺に来たものは反射し、なのはに行こうとしたものは『未元物質』（ダークマター）で切り裂く。

あと少しで全部埋まるところで

グシャアアア

なんとか飛び出してきた。だが

「それも甘い」

その飛び出してあとわずかで俺に届く時に

スシャン

砂鉄の刃が化け物を切り裂いた。

三人称 s i d e

怪物は倒されどこかに消えた残ってるのは当麻となのはだけだ。

「あ、あの助けてくださってどうもありがとうございました」

なのはが当麻にお礼を言う。

どうやら当麻だとゆうことはきずいてないようだ。

「いや、別に気にしなくていいさ」

当麻もきずかれたくないのか少し話し方が変わっている。

「あ、あの、お名前を教えてください」

「ん？俺の名前か。俺の名前は・・・」

名前をなのはが聞いてきたため当麻は答えようとするがわざわざ隠しているのにここで当麻と名乗るわけにもいかないので少し悩む。
そして名乗った

「アクセラレータだ」

これから自分の二つ目の顔として使う名を。

第十一話「敵（ザコ）と少年が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナーはじまるよ！

当麻「特にすることはないけどな」

えーと途中出てきた『表層融解』とゆうのは

当麻「アスファルトを操る能力、以上」

超電磁砲のアニメに出ています

当麻「俺の『末元物質』が黒いわけは」

当麻の『自分だけの現実』が特殊だからです。
バーソナルリアリティ

当麻「やろうと思えば赤くもできるし青くもできる」

カラフルだね

当麻「ただ白くならない」

何でだろう

そんなわけで感想、贈り物待ってまーす。

当麻「あと攻撃もだろ」（ニヤ）

じ、次回もお楽しみに

第十二話「フェレットと少年が交差するとき」(前書き)

今回は別に読まなくてもいいと思います。
自分で言うのもなんですがくだらない

第十二話「フェレットと少年が交差するとき」

三人称 side

先ほどまでここでは少女と少年が異形の怪物と戦闘をしていた。
幸い近くに人はおらず直接見られるとゆうことはなかったのだが、

ウーウー　　ウーウー　　ウーウー

ピポピポ　　ピポ　　ピポ　　ピポ

ファン　ファン　ファン　ファン

どうやら住民が何か異常に気がついたようで警察が近づいてきているようだ。

「も、もしかしたら私ここにいると大変あれなのでは…」

それに少女・・・なのはは反応する。

「あれがどれだか分らんが大変なのは確かだな」

なのはの言葉に少年・・・当麻、否アクセラレータも同意する。

「仕方ない、送ってやる」

そう言っただけなのはに手を差し出すアクセラレータ。

「ほへ？」

「ほらなのは、早くつかまれ」

しかし、なのはは意図が伝わらず首をかしげるばかり。そこで当麻は強引に手を取り、

「なにを…」

「黙ってる。ミサカ」

《空間転移》
レポート

そして、なのはとアクセラレータは消えた。

場所は変わって、先ほどの場所からそう遠くない公園

「ここでいいか」

「え？え？て、ええええええ！？」

そこに突如アクセラレータとなのはが現れる。

「おい、なのは。近所迷惑だぞ」

「あ、ゴメンなさい…じゃなくて今のなんなんですか？」

「何かと言われたら…なんだろうな？」

「ごまかさないで！」

「シ——」

「あ、ゴメンなさい…じゃなくて」

（以下ループ）

なのはとアクセラレータが漫才のようなことをしていると

「すみません」

とフレットがしゃべりだした。

「あ、起しちゃった？ゴメンね乱暴で。ケガ痛くない？」

「ケガは平気です。もうほとんど治っているから」

そっいつて自分で包帯を外すフレット。

「利口なフレットだな」

「利口じゃ済まないと思うの」

そうしている間にフレットは包帯を外し終わる。

「ホントだ、ケガの痕がほとんど消えてる。すごい」

「助けてくれたおかげで残った魔力を治療に回せました」

「よくわかんないけどそうなんだ。ねえ、自己紹介していい？」

「あ、うん」

「私、高町なのは。小学校三年生。家族とか仲良しの友達なのは、て呼ぶよ」

「僕は、ユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノ君か。かわいい名前だね」

「ユーノね。よし覚えた」

するとフェレット改めユーノが、アクセラレータのほうを向いていた。

「…なんだよ」

「いや、あなたの名前を覚えてもらおうと」

「ん、そういやおまえには名乗ってなかったな。俺の名前はアクセラレータだよろしくな」

「アクセラレータ？変わった名前ですね」

「それはバカにしているのか」

「いえ、そんな」

「ねえねえ、アクセラレータさん」

とそこで先ほどから黙っていたのはが口を開く。

「ん？どうしたなのは」

「なんで私が名乗る前から私の名前を知ってるんですか？」

「あつ」

確かにアクセラレータはなのはが名乗る前から名前を呼んでいた。

「それにどこかで会った気がするんですけど」

「あゝそれはだな」

とそこでアクセラレータは視線をさまよわせる。

（くそドジった。まさかなのはがここまで勘がいいとはおもわなかった。ユーノに話をそらさせ

くそユーノは寝てやがる。どうやって話をそらす？）

「ハル君のことも知ってるんじゃないですか？」

なのはにこう言われ思わず答えたのがアクセラレータの運のつきだった

「春樹なんか知らない！」

「春樹とは言っていないよ当麻君」

「……………」

「このときの当麻はとても泣きそうな顔をしていたらしい。

「くそおおおお!!」

<次回予告>

「なのはは、だれにもやらん!」

「いや貰う気ありませんが…」

「問答無用!」

「そこは、問答して!!」

第十二話「フェレットと少年が交差するとき」(後書き)

やったああああ当麻が負けた!!

当麻「なんで、なのはあんなに勘がよかったんだろう?」(作者の足踏み)

そ、それも一種の不幸ってことで(足踏まれ)

当麻「なんで春樹て呼び方ではれたんだろう?」(関節決め)

お前しかそう呼ばないんじゃないやああああ! (関節決められ)

当麻「何で俺負けたんだよ!!」

くそただの負けず嫌いめ!

当麻「ま、それは置いといて最後の次回予告なんだ?」

ただの気まぐれ

当麻「まあいいや。それではまた次回」

感想、評価待ってます。

第十三話「青年（シスコン）と少年が交差するとき」

あらすじ

当麻の正体がばれた

「俺は負けたんじゃ…（以下略）」

当麻 side

は～～あ何でなのはにばれたんだろ？

「当麻君、その羽なんなの？それも魔法？てゆうやつなの？」

ほら、こうなるってわかってたのに。とりあえず『ダークマター未元物質』を消して。

「え～とだな、魔法だよ魔法。」

ユーノが寝てるのをいいことに嘘を「待ってください」ん？

「そんな魔法ありません」

なぜ起きている！くそ、おのれユーノ！！

「らしいけど当麻君、さっきのなんなの？」

まだ聞くなのは。ついでにユーノまで興味持ちやがった。

「そんなことよりなのは、お前帰らなくていいのか？」

これで話がそれてくれれば、と期待しながら言ってみたら

「あ、そうだった！急いでで帰らなきゃ！！」

よしそれた。このまま忘れさせる！

「なら、急げ。送って行ってやる。」

「う、うん。でも今度お話を…」

「はいはいまた今度な」

そして俺はなのはの手を握ってひっぱって行く。

少しでも早くなのはから逃げるために。

え？じゃあ、なんでおくるのかって？いや夜の一人歩きは危ないでしょう。

この後も……とめんどくさいことになるかも知らずに。

《また一時出番がなくなるんですね》

……なんかごめん。

そんでなのはの家に着いたのだが。

「お帰りなのは…その男はなんなんだ！」

「あ、お兄ちゃん」

なのはの兄貴が、初めて見るな。とりあえず挨拶して帰ろうかな。

「こんばんは、なのはのお兄さん」

「なのはは、誰にもやらん！」

「はじめまして、上条当麻と言います」

「なのはは、誰にもやらん！」

…なんなんだこの人は。話が通じない。

「なのはとは、いつも仲良くさせていただいてます」

「なのはは、誰にもやらん！」

「……シスコンめ」

「シスコンじゃない!!」

「話が通じた！」

「なのはは、だれにもやらん！」

「ダメだバグってる」

たたけば治るかな？などと考えていると

「どうしたの恭ちゃん、騒いで？」

美由紀さん登場。

「あ、美由紀さん」

「あ、当麻君どうしたの？」

いちお、美由紀さんと面識はある。

「いえ、なのはのお兄さんが壊れちゃって」

「あゝなるほど。それじゃエイ！」

事情を説明すると、美由紀さんはなのはの兄貴を叩いていた。やっぱり叩けば治るんだ。

「ハッ！？、俺はいつたい何を」

「お、治ったみたいだな」

「ん？君は誰だ？」

「お兄ちゃん。当麻君だよ」

「なのは？そうだ、思い出した！いつもなのはがいつている子か」

どうやら向こうは俺のこと知ってるらしい。でもいちお名乗っとくか。

「はじめまして、上条当麻といます」

「話は聞いている。俺はなのはの兄の高町恭也だ。いつもなのはと仲良くしてくれてるらしいな」

「いえいえ仲良くしていただいてるのはこちらです」

どうやらまともに戻ったようだな。

「そうだなのは。今までどこに行ってたんだ？」

「えつとそれは…」

なのはが言葉に詰まってる。そりやそうだ。しゃべるフェレットに頼まれて怪物と魔法で戦ったなんて言えるわけがない。言ったとしても信じてもらえないだろう。もしかしたら病院に連れてかれるかも。

「あら、かわいい！なのははこの子のことが心配で様子を見に行っただのね。」

と、そこで美由紀さんがフォローを入れる。

「そうなんですよ。それでさっき俺が見つけて送ってきたとゆうしだいです」

それでついでに俺も偶然を装っとく。その後なのはが謝り一件落着

かと思ったらいきなり恭也さんがちかずいてきた。

「上条、なのはやらんぞ」

なんて言い始めた。

「はい？」

「お、お兄ちゃん！」

「いきなりどうしたの恭ちゃん？」

「誰が何と言おうとなのははやらんぞ！」

「いや貰う気はありませんが」

そんななのはをものみたいに扱うわけにはいかない。

後どこかで「がんばってなのは！いつかきつと振り向いてもらえるわ」とか「うん、私がんばる！」

とか聞こえたが何のことだろう？

とそこで恭也さんが木刀を振りかぶって…え！？

「てっ、おい！危ないですよ！」

「問答無用！」

「問答して！！」

そして、なんとか避けて相手が大勢を崩したところで今までアクセラレータのおかげで鍛えられた俺の脚力が唸る。具体的にゆくと

「逃げるが勝ち！」

全力で逃げた。俺は誓った。もうあの人に近寄らない。

第十三話「青年（シスコン）と少年が交差するとき」（後書き）

なのはは好意を寄せている。

アリサ、すずかは少し他の男子より好きみたいな感じですよ。

今回は特にないのでこの辺で。

感想、評価待ってます。

番外編？「恐怖と少年が交差するとき」（前書き）

第十三話少し変更しました。

今回は最初が少しシリアスです。まあこの小説にシリアスほど似合わないものはないと思いますが。

番外編？「恐怖と少年が交差するとき」

当麻side

《記憶を消します》

それがなのはを送った後にミサカから告げられた言葉だった。
もちろん俺は驚いた。

「ハア！？なにいいだすんだ。何で消されなきゃいけないんだよ！」
もちろん俺が頼むわけない。ただでさえ記憶がなくなつて困つて
るのに何で消されなきゃならないんだ。しかし、ミサカの次の一言
で驚きではないちがう感情が出た。

《なにとは、マスターが言い出したんじゃないですか》

出てきたのは、困惑。

先ほども言ったが俺はそんなこと頼んでいない。頼む理由がない。
頼んだことと言えばせいぜいなのはに正体がばれないようにしてほ
しいといったことぐらいだ。

そしてそこで一つの可能性にたどり着く。

もしも

「おいおい……」

記憶を消してくれと頼んだとゆう記憶も消してあつたら。

「嘘……」

今度出てきたのは恐怖。
もしかしたら他にも記憶を消されてるかもしれない。あるいは、いじってあるのかもしれない。神と出会ったのも嘘、アクセラレータ達と会ったのも嘘、なのは達と遊んだのも嘘、果ては先ほどの会話だって嘘かも知れない。

「嘘なのか……」

しかしまた一つの謎ができる。俺が記憶を消すのを頼んだとしても、なぜ頼んだ？
なにが理由で記憶を消した？しかし考えようにもその事実すら消えてしまっている。
でも、

「もうどうでもいい……」

たとえ知ってもいいことではないだろう。
もしかしたらこの感情すら操作されたものかもしれない。
それならば、

「好きにしろ……」

流されたほうが楽だ。

そう考えて呟いた一言にまた驚きの答えが返ってくる。

《好きも何もどうするんですか。なのはさんがマスターに出会ったとゆう記憶消さないんですか？》

「ハ？」

今何て・・・

《だから、頼んだでしょう。なのはさんにはれないようにしてほし
いて。だからなのはさんから、マスターに出会ったとゆう記憶を
消そうと提案したんですよ》

「え〜とつまり。俺の記憶は消さないとゆうこと？」

《はい？》

「つまり・・・」

それからミサカに俺が考えていたことを話した。そしたら、

《アハハハハ！誰がそんなことして得するんですか！考えすぎで
すよ！》

爆笑された。ゴーグル（型デバイス）に爆笑される俺って…

「そんなに笑うなよ…」

《私や神様だってそんな事するほど暇じゃないんですよ！》

「そんなことって…けっこう怖かったんだぞ」

《まあいいです。で、なのはさんの記憶どうします？》

確かそんな話してたな。

「もういいや、てか記憶操作とかは勘弁」

《じゃなのはさんにははなすんですか？本当のこと》

「適当にごまかすさ」

そんな夜の二コマ

番外編？「恐怖と少年が交差するとき」(後書き)

今回も特になし。

ついでに、当麻は精神面が少し弱いです。

感想、評価まっけます。

第十四話「困ったフェレットと少女が交差するとき」(前書き)

もつそろそろタイトルが思いつかない。

第十四話「困ったフェレットと少女が交差するとき」

当麻side

今、学校にいる。ちなみになのは達とはクラスが違う。

いやはや昨日はホント驚いた。もうホント死にたいって思ったし。ちなみにその話を春樹にしたら

「へー、当麻が怖がるなんてすごいね。この前は六年とも喧嘩してたじゃないか」

「実際はたぶん中一だぞ」

時々絡んで来るやつがいるんだよねー、なんでだろ？

「へー、でも怖がらなかったよね」

「まあ、あのくらい当然だな」

「それはそうと頼まれたもの調べ終わったよ」

「お！さんきゅー」

「青い石、正式名称ジュエルシード。能力は・・・」

「人や動物の願いをかなえる、か」

「そうそう」

もうここまでのことで分かったと思うが春樹は管理局の魔導師だ。
正確には未来のだが。

何でも父親、母親、姉が管理局で働いてるらしい。そのおかげで調べ物などがやりやすいらしい。

「でもよくデータあったな。俺が聞いた話だと事故かなんかで輸送船がバン、だって・・・」

これは、先ほどからすぐ近くで念話してる、なのはとユーノの会話をすこしかせてもらって手に入れた情報だ。もちろん春樹も聞こえてただろう。

「ああそれ？それは輸送船に乗せるまでに少し調べてあったから」

キン、コン、カコン、コン

「もう授業か」

「それじゃね」

「ああ」

チャイムが鳴ったので席に戻る俺と春樹。
さて盗み聞きでもしようかな？

なのはside

今、ユーノ君と念話？とかゆうのを使ってお話してるの。
今は理科の時間。ユーノ君が言葉を詰まらせながら話してる。

『ええと、昨夜は巻き込んだじゃって、助けてもらって本当に申し訳ないんだけど。この後僕の魔力が戻るまでの間ほんの少し休ませて貰いたいだけなんだ』

まだだまって耳を傾ける。

『一週間、いや五日もあれば力が戻るから、それまで』

『戻ったらどうするの？』

そこで私は疑問を聞く。

『また一人で、ジュエルシードを探しに出るよ』

『それはダメ』

私がダメとゆうとユーノ君はあわてたような困ったような声で言うてくる。

『ダ、ダメって』

『私、学校と塾の時間は無理だけどそれ以外の時間なら手伝えるから』

『だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ』

思い出すのは、怪物。一体目を倒した後に出てきた怪物は危なかった。

た。

『そうだね。だけでもう知り会っちゃったし、それに私は大丈夫』

『どうして大丈夫なの？』

『昨日、ユーノ君が倒れちゃったとき危なかったんだよ』

『それならなぜ』

『でもね当麻君が助けてくれたんだよ』

諦めていたそのとき颯爽と現れ、助けてくれた。

『いつもそうなの…』

さみしいとき、悲しいとき、つらいとき、困ったとき。

『いつもそばにいてくれる』

いつも助けてくれる。

『だから、大丈夫なの』

『なのは…』

『だから私にもお手伝いさせて』

困ってる人がいたら助ける。そうだよね当麻君！

春樹 side

『だから私にもお手伝いさせて』

まったく、信頼しているとゆうかなんとゆうか。すごいなあ。
そして、信頼されてる方は

「ぐうううう…ZZZ」

寝てるもんな。もっともこれを聞いてなくても彼女を助けるんだろ
うけど。
それじゃあ僕はみんなをたすける彼が寂しくないようにそばにいよ
うかな？

当麻 side

今、なのは、アリサ、すずかと下校中。と言ってももうなのはしか
いないけど。

そんで今なのはに

「とゆうわけであれば俺の『稀少^{レアスキル}能力』とゆうやつだ」

「へっ」

絶賛嘘を教え中。
そこで

ゾク

「「!?!」」

今の悪寒のようなのは

「ジュエルシード!」

「行くぞなのは!」

「うん!」

『ユーノ、お前も来い』

『分かった!』

今は俺が念話を使える事はもう知ってる。

そして神社へ着くと

そこには犬のような生物とともに

「シャドウもか」

《この前のより、人の形をしますよ》

たしかに黒いが人の体や顔をしている。あとミサカのこととは普通のデバイスと言っておいた。

「ねえ当麻君シャドウって?」

「あゝなんてゆうかな、一種の偽物のような奴らだ」

「?」

「つまり倒していいんだよ」

「なるほど!」

すると犬がなのはの方に、シャドウ達が俺のほうに集まってきた。
数多いな。

「当麻君!」

「大丈夫だ。おいユーノ」

「何だい当麻?」

… 本名は名乗ってないはずだが、まあいい。

「なのは頼むぞ」

「任せて!」

そうして俺はシャドウに囲まれた。

「そうそう、俺思っただよ。ゲームで最初から強い敵キャラは出さないだろ。なら俺も本気出さないからさ…」

今回はミサカの手を借りずに

「楽しませてくれよ！」

第十四話「困ったフェレットと少女が交差するとき」(後書き)

天照大神さん龍賀さん感想ありがとうございました。

当麻「何か春樹、かつこよくなかったか？」

いいところ取りって感じだったな。

つぎはやつとまともな戦闘シーンになるはず。

なのは「全力全壊がんばります！」

春樹「まだすこしはやい！」

当麻「テメエのくだらねエ幻想は俺がぶち壊す！」

幻想どころか何も考えてないんだけど。

それでは

当麻「感想、評価それ以外でもいろいろ待ってます」

作当春な「ではまたじかい！」

第十五話「敵（ザコ）と少年がえ！？もう使っている・・・」（前書き）

もう普通にタイトルコールしていいですかね…

当麻「さあ？」

疲れたよ、当ラッシュ…

当麻「そのまま消えろ」

ヒドイ〜

当麻「では本編へどうぞ」
どうぞ

第十五話「敵（ザコ）と少年がえ！？もう使っている・・・」

あらすじ

シャドウが現れた！

当麻はどうする？（ポケモン風）

「叩き潰す！（作者ごと）」

……なんかいやな予感が。

春樹side

どうやらジュエルシードが発動したらしい。

どうやら当麻もかわる気なので、僕も手伝おうと発動場所の神社に向かったら…

犬っばい怪物と戦う高町さんとフェレットと

「普通ここは一对一だろ、て痛い！痛い！ギブギブ！！」

「……………」

何か黒い人？に囲まれて集団リンチを受けている当麻がいた。
なんか、ドラマなんかでありそうなシーンだなあ。
とりあえず、

「日ごろの恨み、今ここで晴らす、いつ晴らすか！」

「ぺっぺっ！誰だ砂投げるなんて嫌がらせしてるやつは！」

「おまけだ！こいつもくらえ！」

「うおっ！？今度は石か！てか春樹いるだろそこに！」

「吉井春樹なんかここにはいない！」

「誰も吉井とは言ってない！」

「くそ、人のあげ足ばかりとりやがって」

「素直に墓穴を掘ったことを認めろ！そして俺を助けやがれ！」

「仕方がない……」

そして僕は当麻が集団リンチにあつのをずっと見てました。

「助けるや！」

~~~~~  
数十分後~~~~~

~~~~~

高町さんに適当に嘘をついて帰らせた後、軽く死にかけの当麻を見るのも飽きてきたので、

「忍法煙隠れの術」

とスモークグレネード（入手方法はヒミツ）を使って当麻を救出。とりあえず、黒いのから見えないとこまで来て

「大丈夫？生きてる？もしかして死んじゃった？」

と尋ねるが返事がない。ただの屍のようだ。さすがに心配になったので

「どうした？ホントに死んじゃった？どこか問題ある？」

すると

「……ああ、問題ない……」

「ホントよかった！」

「あの川を渡ればいいんだろ……」

いけない。たぶんそれは三途の川だ。

「ダメだ！戻ってくるんだ！その川は渡っちゃちゃいけない！」

渡ったらたぶん帰ってこれないだろう。

「おお、よう、明久に雄二じゃないか」

ずいぶん親しそうだが、この世界の知り合いだろうか？
もっともその川の前で会ってはいけないだろうが。

「ん？ムツツリー二に秀吉もか。お前らもってことは、姫路の料理か？」

「バカテスか！バカテスなのか！？」

まさか、三途の川の前でそのメンバーに知り合ってるとは。

「一緒に行くか？」

確かにそのメンバーはいつも生き返ってるから一緒にいたほうがいいかもしれない。

「お、どうや集団サービスで安く船に乗れるようだ」

「いけない！そこまで逝ったら帰ってこれない！」

三途の川にもサービスとかあるんだ。

「お、ごひいきにしているとかでどうやら無料のようだ」

「いったい何があったんだ！？」

三途の川をごひいきにつてなんだ？とゆうかいつも当麻の身に何が起きてるんだ？

「さすがだな。明久、雄二」

訂正、その二人はどのくらい死にかけているんだ。

「ほら、早く行くぞ」

「ダメだ！帰ってこい！」

さすがに死なれたら困る！

「逝くなああああ！！」

必死のミゾ攻撃。

「グフツ！・・・あっちにある、へりに乗ってくか」

いけない、加速させてしまった。

《どうしたんですか、春樹さん？》

「あつ、ミサカ！当麻に電気を流すんだ！」

《はい？・・・分かりました》

と少し疑問げに了承するミサカ。

そして、

「アガガガガガガガガ！！！！！」

「よしこの調子」

《分かりました》

そして

「・・・なんで人の体に電気流してるのかな？春樹クウウウウウ
ウン！」（アクセラレータ風）

「よかった。生き返った」

「最初らへんは俺を殺そうとしてなかったけ？」

「どうして、集団リンチにあったの？」

《どうしてですか？》

「見事なスルーだな。そしてミサカ、お前が武器を出さないからだ
！」

話を聞くと、カッコを付けたはいいが囲まれて、ミサカが寝てて武
器を出さなくてあぁなってたらしい。

「デバイスって寝るのかな？」

「知るか！ともかく武器だ武器。あいつら始末して俺は帰る！」

「ガンバレ！」

そして、当麻の手にとても大きな剣が出される。

「さて化け物どもこれで狩ってやる！」

《調子に乗らざがなばってくださいね》

「はいはい」

そして当麻は黒いのに向かって駆け抜けて逝った。

「字が違う!」

第十五話「敵（ザコ）と少年がえ！？もう使ってある・・・」（後書き）

こんなことばっかしてるから話が進まないんですね。

仮面ライダーディケイドさん、天照大神さん感想ありがとうございました。

誰か当麻をいじめたい、使いたいとゆう方がいたらどうぞ自由に。

それではまた次回もお楽しみに！

第十六話「敵（ザコ）と少年がえ！？もう使っている・・・」₂（前書き）

いや、仮面ライダーの映画見ました。面白かったです。
サブライダーがほとんど動かなかったのが残念でした。
当麻「軽くネタばれじゃね？」

・・・セーフ

第十六話「敵（ザコ）と少年がえ！？もう使ってある・・・2」

当麻 side

たく、目と体中が痛い。
それもこれも全部

「シャドウのせいだ」

《何どうと八つ当たり・・・とゆうわけでもありませんね》

「お前のせいでもあるけどな」

分からない人は感想版をチェック。

ついでに感想書いてもらえとうれしいです。 by 作者

なんか電波が。まあいいや。

とりあえず俺は仕返しするために出した大剣＜聖剣アスカロン＞をかまえ・・・られない。

「重い」

《まあ、横も縦もアスカロンのほうが大きいですし》

今がんばって引きずり中。

え？なんで聖人の力を使わないのかだって？それは

「神裂とかアツクアとかから術式教えてもらっただけど体に合わなくて」

《なに説明口調になってるんですか》

おっと、声に出てたか。まあでも、一瞬とか体の一部だけとかなら
いける。

それに、カッコよくない？剣を引きずってさこれに赤の革ジャンき
たら

「さあ、振り切るぜ！」

《さっきから、どうしたんですか！？》

そうこうしてるうちにシャドウの近くに来た。

向こうもこちらに気づいたようで少しずつ近づいて来てる。

「ん〜どうやら走ったり出来ないみたいだな」

《ゾンビみたいですね》

「走るゾンビもいるぞ」

そして囲まれた。

しかし、俺はは気にした風もなく言う

「それじゃあ」

戦いのは始まりを伝える言葉を。

「^{ショー}殺戮タイムだ」

《前もそんなこと言ってませんでしたっけ》

「・・・・・・・・」

三人称 side

シャドウは当麻を取り囲もうとする。

しかし、当麻はそれに対してなにも行動を起こさない。

そして、囲み終わったらつぎは四方八方から寄ってくる。

確かに退路を断ち、なおかつ全方位から囲むのは動きが遅いシャドウ達にとっていい行動だろう。

ただそれをして無駄な相手がいる。例えば相手が“普通の”ヒトではないなど。

当麻に手が届こうかとしているシャドウに起こったことは簡単だった。

トン トン トン トン トン トン

「お、当たり」

体中に針を『座標[↑]転移

』

されただけだった。

そして、ヒトに似せて作られたシャドウは顔が苦痛にゆがむ。それを見ても当麻は何も感じない。

「痛覚はあるみたいだな」

トン トン トン トン トン トン

ただ冷静に確かめていくだけ。
まるで感情がないように。

そして足と地面まで丁寧に縫い付けられ、動けないシャドウをどこかそうと後ろのシャドウが前のシャドウの肩に手をかける。
そして

トン トン トン トン トン

「春樹が逃げ切れたってことは視覚に頼ってるのか」

その手も縫いつけられる。

他のシャドウも仲間同士で縫いつけられる。

そして、シャドウはバランスを崩し倒れそうになる。
しかし

トン トン トン トン トン トンがトン

「フム、知能は低いようだ」

《ちょっと待ってください！なんか最後のリズムがずいぶんよかつた気がするんですが！》

「いや、感情がないよふりするのちょっと飽きてきたんだよ」

《飽きたからってあんなリズムにできるんですか！？》

「何か出来ちゃった」

どうやら感情がないようにしていたのは演技のようだ。誰にかは、わからないが。

しかしこの間にもシャドウは針だらけにされている。
当麻の周りにはもう姿が見えない、針しか見えないシャドウが数十
体いる。

残り僅かのシャドウは、少しでもよけようと不規則に動き回ってい
る。

「無駄なのにな」

スカ スカ スカ

《だいぶ、避けられてますが》

「冗談、冗談」

トン トン トン

そして、シャドウが残り五体になったときシャドウの動きが変わっ
た。

「ん？早くなつたな」

動きが素早くなった。そしてそのうち一体が接近してくる。だが

「でも動きが直線すぎる」

その前方にまた針が転移され串刺しになる。

しかしその背後から、ちがうシャドウが飛び出してくる。それも

「ダメだ」

飛び出してきたシャドウの後ろの針だらけのシャドウが転移させられる。

そして、また一体減る。残り三体。しかし

「・・・残りはどこだ」

いつの間にか姿が消えていた。

「逃げたとか勘弁してくれよ」

そう当麻がつぶやいた瞬間、当麻の背後から二体のシャドウが躍り出た。

そしてつぎの瞬間には、

「あらよつと」

聖人の力を使ってふるったアスカロンによってシャドウが上下に切り裂かれた後だった。

それを見た残り一体のシャドウは剣の範囲に入らないようにしたいのだろうか、後ろに下がりはじめていた。だが

ガン

「ほつと」

ガン

「よつと」

足に聖人の力を使い二段蹴りの要領で蹴られ、飛んできたアスカロンによって切断された。

「これでおしまい」

そう当麻がつぶやいた瞬間アスカロンも針もシャドウも消えていった。

「さてと、春樹は？」

《もう帰りましたよ》

「薄情もんめ」

《いいから私達も帰りましょう》

「そうだな」

そして帰って行った。この戦いを見ているものがいるとも知らないで。

第十六話「敵（ザコ）と少年がえ！？もう使っている・・・」₂（後書き）

龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました。

感想待ってます。

では次回もお楽しみに。

なんか、戦闘シーンをうまく書けない。

それに長ったらしい。

第十七話「転生者と少年が交差するとき」(前書き)

ちよつと時間がないので

今回・・状況説明？

次回・・ギャグ回？

次次回・バトル回？

にしたいと思います。

ですが、えらい人は言った。

予定は未定！

レイジングハート達は普通にしゃべる時は日本語です。

第十七話「転生者と少年が交差するとき」

当麻 side

最近なのはは、ジュエルシード集めをがんばってる。
だが俺は、

「シャドウ来ないな」

《ですな》

空に『アクセラレータ一方通行』で浮きながらなのはを見守ってるだけ。
なぜなら、この世界は俺の世界じゃないからだ。

もちろん危なくなったら助けるが、この物語の主役はあくまでもなのはだ。

その話の流れを崩すとなのはが、さらに危険な目にあう可能性もある。

ただ物語のイレギュラー、シャドウと神は別だ。

そいつらは俺が手を出してもいいはずだ。もったもここまでは俺一人の考えだから確証はないが。

もったもここまでは建前で本当は

「何で魔力ないんだろう？」

《あるじゃないですか》

「この世界のだよ」

そう、ここまでで分かるように俺には魔力がほとんどない。（少しだけならある）

そのため魔法とやらもほとんど使えない。だからなのはに、まかせつきりなのである。

なんなら超能力や魔術で相手をしてもいいが、何が起こるか分からない。

俺の力には、非殺傷設定なんて便利なものはない。

そんなもので生物に攻撃なんぞしたくない。手加減すれば何とかなるかもしれないが試す気もない。

そうこうしてるうちに封印が済んだようだ。

「おーい、無事かなのは？」

「なんとか、ハアハア・・・なの」

「ておいおい、倒れそうだぞ。仕方ない」

「ほら、乗れ」

「へ？だ、大丈夫」

「とりあえず、背負おうかと思ったのだが、なのはが乗り気じゃない。こうなったら」

「そんな、俺の背中に乗れないなんて・・・」

「と少し泣きそうな声で言ってみた。そしたら」

「そ、そうじゃなくて」

思ったとおり動揺中。ここでたたみかける！

「じゃあ、おとなしく乗ってくれる？」

「で、でも「嫌なんだね」「嫌じゃないよ！・・・むしろうれしいし」
（ボソボソ）

最後のほうは聞こえなかったけどとりあえずは計画どおり。

「じゃあ乗って」

「う、うん」

はあ、泣きそうな子の真似って疲れる。
と少し歩くと

「寝てやがる」

「……………」（スヤスヤ）

「まあ、なのはは疲れてたから仕方ないと思うよ」
隣を歩くユーノがしゃべる。

まあ、もっとも

「寝顔が可愛いからいいけど」

《変態ですか》

《マスターに近寄らないでくださいこの変態》

「ただ褒めただけで何でもそこまで罵倒されなきゃならない!？」

《レイジングハートさん、ご協力ありがとうございました》

《いえいえこの程度、お役にたてて幸いです》

「なんか、知らない間にデバイスが仲良くなってる・・・」

「アハハ・・・」

結局、この後『ムーブポイント座標移動』でなのはの部屋に侵入、そして同じ方法で脱出した。

当麻は知る由もなかったが、「寝顔可愛い」と言った時はなのは起きていたらしい。

(可愛い、可愛いなあ・・・／／／)

その日の夜

「さて、交渉開始だ神様」

「またですか、何度やっても意味がないんですがね」

「俺はあきらめが悪いんでね」

「そうですか。まあいいです」

灰色の少年は独りの神と対話し

「なんで僕には力がないんだ！なんであいつは！」

「くそ、何で僕がこんな目に。ん？これは、ジュエルシード！？」

「やった！これで僕も・・・の仲間に」

「アイツを、あの・・・を倒せる」

新しい少年は過ぎた力を手に入れ

「ふん、あの人間が手ごろかな」

「さてお前はどこまで・・・にかなうかな」

「さてさて、せいぜいがんばりたまえ」

黒き神はヒトある仕掛けをする

第十七話「転生者と少年が交差するとき」(後書き)

あとがきコーナー――

当麻「何だ最後の?」

名物作者の気まぐれだよ

春樹「あえてゆうと僕じゃないからね」

きみも活躍するかもよ

春樹「敵側で?」

いや、おいおい

当麻「そんなことより

天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました」

春樹「最後のところ、点にはあいつの名前が入るんだよね?」
そうだね

当麻「まえがきどつりなら次回は・・・」

君達のサッカー回だよ

当麻「ふゝん」

春樹「それではみなさん」

作当春「」「次回もお楽しみに!!!!」「」

なんかあとがきでやる面白い企画ありませんかね?

第十八話「転生者と少年が交差するとき2」(前書き)

今回はギャグ!

当麻「とゆうことは、見てくださる方を笑わせれるんだな」

日常編?です。

春樹「変えちゃったよ・・・」

それではどうぞ。

これから

普通の会話

念話、テレパス念話能力

デバイス

思考

機械などを介しての会話

にしたいと思います。能力、魔術は『』で囲みます。

第十八話「転生者と少年が交差するとき2」

春樹side

今日の朝は最近、当麻の頼みで調べ物をして、あんまり寝てなく今日はゆっくりしようかな？なんて考えてたはずなのに

「・・・どうしてこうなったんだろう？」

「知るか」

「当麻のせいだと思っただけだなあ」

「人のせいにすんな」

「・・・・・・・・」

「ダメだから！殴っちゃ駄目だから！！」

「離すんだ！今ここでこいつを殴らないと後で絶対後悔する！！」

くそ、キーパの子に抑えられてるせいで殴れない！
とゆつか僕の平和な日常はどこに行ったんだろう？

~~~~~数時間前~~~~~

朝起きて今日はどうしようかな？なんて考えていたら当麻から電話が来た。

用件を聞くと

「へ？サッカー？」

<そう、士郎さんがオーナーのチームの試合をなのはたちが観に行くから、ついてこいだってさ>

「それって当麻だけじゃなくて？」

<さあ？>

それは、君と一緒に行きたいって思ったから彼女達が誘ったんだと思っただけだな。

鈍感も罪だな。・・・うらやましいとは思ってないんだからね！

「別に僕達がするんじゃないんだろ？」

<観に行くだけだろ。俺もしんどいのは嫌だしな>

「ならいいよ。場所は？・・・うん、分かった。じゃ後でね」

さてと、ついでに例の計画も聞いてもらおうかな？

~~~~それから数時間後~~~~

高町さん達と試合を見に来ていた。
すると当麻と僕が士郎さんに話があると言われ聞きに行くと

「え！僕（俺）達が試合に！？」

「選手が二人休んでしまつてね」

完全にしんどいじゃないか！

（そんなに僕のことを嫌いなのか君は！）

（俺も知らねえよ！俺だつてビックリだ！）

当麻と目で会話するけど、どうやら向こうも想定外のようなのだ。

「もちろんタダとは言わない。終わったら翠屋で何か奢ろう」

「うん」

確かにいい話だ。それにいつもお世話になっている恩も返せるし。見た感じ当麻も悩んでるようだ。当麻の場合恭也さんから逃げる手助けもしてもらってるみたいだし。

・・・家族公認の付き合いか。なんかすごいな。

「頼めるかい？」

「・・・いいですよ」

「なら僕も」

「そうか。ありがとう」

すると、チームのヒトだろうか？1人近づいてきた。
見た感じキーパーだろうか？

「ホントゴメンね。試合しないと相手にも迷惑だから」

「ああ、大丈夫。僕達どうせ暇だし」

「試合ぐらい出てやるよ」

「ありがとう」

さてとまずは

「サッカーってなんだっけ？」

「そこからなんだ！？」

「ハハ、まったく馬鹿だなお前は・・・説明頼む」

「君もかい！？」

「冗談だよ」

一割ほど。

「知っちゃいるが細かいルールがな。後ろからスライディングが効果的としか」

「やっちゃダメだからね！」

・・・駄目だったのかとは言わないでおう。

「そつだ青い石つてみたことないか？」

「え、持つてるけど。君の？」

「ああまあな」

当麻はいい感じに探し物を見つけ出したようだ。・・・都合主義
つてやつかな？

だがこの試合負ける気はしない。何故なら

「それじゃ、がんばろうか当麻」

「ああ、しつかりついてこいよ」

当麻が味方にいるから。

~~~~そして現在~~~~

「一発殴らせろ！」

「だからダメだつて！」

この野郎、人の背中にボールぶつけやがって。

「あんな、俺ちゃんとパスって言ったぞ」

「蹴ってから言っても遅いんだよ！」

「それに、お前だつてぶつけただろ」

「・・・否定はしない」

たしかに、ちよくと失敗してぶつけちゃったけど。

「君達のこと呼んでる子がいるけどいいの？」

キーパーが教えてくれる。あれは、高町さん達かな。

「ほら当麻、行かなくていいの？」

「ん？ああ。お前も来るだろ？」

「僕はいいよ。なんかいやな予感がするし」

お邪魔しちゃ悪いし。

「そうか。なら今度家行くからそのときに、ケーキかなんか持って来るよ」

「頼んだよ」

三人称 side

そして、ここで春樹は別れる。

(なんかとっても嫌な予感がするしね)

その予感が本当のことになるとも知らず。

??? side

ジュエルシード。こいつと

「本当に力をくれるのか？」

「ああ、神の私を信じろ」

神とやらの力で

「でそいつを倒したら？」

「自由にしてもらって構わない」

僕から彼女達を奪ったアイツを

「分かった」

「健闘を祈ろう」

上条当麻と名乗るあいつを

「絶対に殺してやる」

第十八話「転生者と少年が交差するとき2」(後書き)

あとがきコーナー！

当麻「今回の出番は春樹のほうが多かったな」

ま、たまにはね。

当麻「で春樹の計画ってなんだ？」

秘密

当麻「最後の完全に俺を狙ってるやつは誰だ？」

秘密

当麻「だよな」

天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました。

当麻「それではみなさん」

作麻「次回もお楽しみに！！」

第十九話「転生者と少年が交差するとき」(前書き)

作者「長らくお待たせして申し訳ありません」

当麻「こんな駄文、待ってくれる方はいるのか？」

作者「PCが壊れてしまって・・・」

当麻「日頃の使い方が荒いからだ。このダメ作者」

作者「あと、申し訳ないのですが、ちょっと矛盾ができてしまったので『未現物質』<sup>ダークマター</sup>の特殊設定もなしの方向で。あと、前回の前書きで言った書き方も変更したいと思います。ただし少しずつ変えていく気なのでどうなるかわかりません」

当麻「先を考えずに書くからだこのダメボケ作者」

作者「では本編どうぞ」

当麻「期待せずどうぞ」

作者「・・・なんか悪いことしたっけ？」

当麻「さあな」

作者「あと、途中魔術のオリジナル設定が出ます」

## 第十九話「転生者と少年が交差するとき」

当麻 side

さつきまで、サッカーをさせられたのだが、今は

「早く早く！急いで当麻君！！」

「まさかここまで本気にしてくるとは・・・」

《口は災いのもとといえますからねえ》

「完璧に他人事だな」

《他人事ですもん》

「早く！！」

「あ！ちよ、ちよっと引つ張るな！」

なのはに引きずり回されていた。

いやね、最初は普通にアリサとすずかとしゃべってたわけよ。

そしたら、なんでも家族と出かけるらしくてね、「なら俺たちも」  
て軽くなのはを誘ったら

「え！？ほ、ほんと！？嘘じゃない！？」

「ああ、嫌ならいいんだが」

「い、嫌なんかじゃないの！」

みたいな感じでした承。いやすごい勢いだった。  
そんで買い物に来たわけだが。

「ん？あれは・・・」

「へ？どうしたの？」

「いや、キーパーの奴があそこに」

今いるところから遠くもなく近くもないところに先ほど知り合いに  
なった少年と少女が見えた。  
女連れ・・・やるな。彼女か？  
そっぴいあいつの名前聞いてないな。  
するとそいつの後ろに怪しいやつが。

（なんか嫌な予感がある）

「ちよつとなのは待っててくれ」

「え？と、当麻君！」

「すぐ戻る！」

『テレポート空間転移』を使えばすぐだが人前でするわけにはいかない。  
そこで走って行こうとするのだが・・・遅かった。

一瞬、何かが光った。そして三人がいた場所には怪しげな人物と、

「木？」

大樹があつた。いや、なにこれ。

「当麻君、これって・・・」

「おいミサカ。これはやっぱり・・・」

《十中八九、ジュエルシードです》

「だよな」

まさか、あいつが持つてるなんてな。嘘をつかれたか？  
そう考えていると、怪しげな人物が話しかけてきた。

「面白いだろ」

三人称 side

「面白いだろ」

大樹のそばにいた人物。当麻たちと同じくらいの背格好の人物は大樹にあわてることもなく当麻に言う。

「お前が上条当麻だな」

「当麻君、知り合い？」

「知らない」

まったく知らないのだろう。その顔には困惑がうかんでいる。そしてその人物は今度はなのはに向かってしゃべりかける。

「なのはちゃんを返してもらいに来た」

「なのは、知り合い？」

「ううん。知らない」

なのはの顔にも困惑がうかんでいる。  
すると当麻となのはの二人はお互いうなずきながら

「じゃあ」

「うん」

「人違いみたいなんで失礼します」

と通り過ぎようとした。

謎の人物あわてながらそれを止める。

「ちょっと待て！そこはほら、「なぜ知ってるんだ！」とかそうゆう展開になるんじゃないのか！！」

「うん。で用事があるのはどちら」

「上条当麻、貴様だ」

「あっそ。じゃあなのは、ジュエルシード頼む。あ、その前にユーノを探しとけよ。たぶん、そこら辺にいるだろうから」

「うん！」

そう言って走っていくのは。そして見えなくなたところで当麻は切り出す。

「目的は？神様の手ごまのかわいそうな子羊さん」

「手ごま？違う。僕は神に頼まれたから来たんだ」

「ん？」

当麻はまるで話が違つというような風に首をかしげる。

「おまえを倒したらなんでもするからと」

「ああ、なるほど。ギブアンドテイクってやつですな。俺はてっきり脅されたからとか思っちまった」

「そんな、僕は選ばれしものなんだ。そんな僕を神が脅したりするはずないじゃないか」

謎の人物はまるで見下したようにいう。

それを聞いた当麻は憐れむような目で見つめながら言う。

「散々持ち上げて、自分は特別な使命を持った選ばれしものなんだと錯覚させいように使う。最低なやり方だな」

「何言ってるんだ」

「まあいいさ。じゃあ俺に立ち向かって来るんだろ。止めてもな」

「そうだ、そして僕は願いをかなえてもらう」

「じゃあ、先制はこつちな」

そう言つて、どこからともなくメダルを取り出す。

そして、放つ。常人では耐え切れないであろう攻撃を。

「いけえええええ！」

肉眼ではとらえるのが難しい速度で当麻の『超電磁砲』レールガンが飛ぶ。  
このままでは、死ぬであろう攻撃。だが

「無駄だよ。僕の能力の前じゃ」

ただしそれが常人ならだ。

当麻が放った『超電磁砲』レールガンは敵である人物に当たる直前に方向が変わる。

百八十度、つまり元来た方向に返っていく。そしてその先にいた当麻に・・・当たらない。

「いや自慢げに言われても困るんだが」

まるで逆再生でもしてるかのようにそれも元来た方向に帰っていく。

それが、何度も続く。その間も会話が続けられる。

「所詮俺と同じ『アクセラレータ一方通行』だろ」

「同じにしないでほしいな。僕のは君のと違って完璧なんだよ」

「へえ、完璧なのに俺と互角ねえ」

「君の出来損ないでも『アクセラレータ一方通行』は強力だからね。だから・・・」

それと同時に白い翼が背中に見える。

「こうでもしないとね」

「くっ！『ダークマター未現物質』か！」

（当然無害のフィルターから攻めてくるだろう。なら！）

いうが早いか当麻も背中から『ダークマター未現物質』をだし、体を抱くように包む。

それと同時に殺人光線が当麻に放たれる。

それを耐えている当麻だが敵は待つてくれない。

「ふーん。じゃあこれは？いけ、『イノケンティウス魔女狩りの王』」

「な、無詠唱だと!？」

詠唱とは、ようは力が間違った方向にいかないようにするための手順である。

省略することはできるが使う力が無駄に大きくなるうえに威力も詠唱がある場合より数段劣るため使われることはめったにないと言っている。

「君にはこの程度で済むだろう」

そして、いつの間にか敷き詰められたルーンのカードの上を『魔女<sup>イ</sup>狩りの王』が当麻に向かって駆ける。そして

「がああああああああ!!」

「あれ? 『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>は発動してないんだ。まあいいさ」

当麻が叫び声をあげるそばでも敵はしゃべり続ける。

「ふふ、さっきのジュエルシールド。発動させたのは僕なんだ。男の目の前で女の子を連れて行こうとしてそれを見た男が女の子を守りたいと願ってジュエルシールドが発動した。ね、面白いだろ」

そう当麻に語りかける。しかし、当麻の絶叫が消えたのに気付かない。

「そうそう、僕の願いを教えてあげる」

楽しそうに言う。

「僕の願いはね、この世界をもらつことなんだ」

まるで夢が叶うような、そんな顔で言う。

「それでね、なのはちゃん、ありさちゃん、すずかちゃん。もう少ししたらフェイトちゃんにはやてちゃん。ほかにもたくさんの女の子を集めて楽しく過ごすんだ。でも君がいたこの世界だとなのはちゃん達は君のことを知ってたぶん言うことを聞いてくれないから・・・。そうだ、記憶を変えよう」

まるでいいことを思いついた子供のように言う。

「なのはちゃん達の記憶から君の記憶を消して僕の記憶を植え付ける。どうだい、いい考えだろ」

本当に楽しそうにそんなことをいう。そして次の瞬間

「グアアア！」

殴り飛ばされていた。

「ちょっとキレたわ」

先ほどまでの叫びなど嘘のような声で言う。

「なあ、楽に死ねると思うなよ」

第十九話「転生者と少年が交差するとき」(後書き)

あとがきコーナ

当麻「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました」

作者「というわけで今回はゲストがいます」

当麻「どういうわけだ」

作者「ゲストは天照大神さんの作品、

『魔法少女リリカルなのは 転生せし物語』

から主人公の津川 優星君です！」

優星「どうも、はじめまして」

作者「早速ですが・・・何すればいいのかわからないorz」

優星「ノープランなんだね・・・」

当麻「それがうちの作者ですから」

作者「何をすればいいのかな？ネタバレ？」

優星「してどうするの・・・」

当麻「今回は軽く挨拶ということで」

優星「うん、それじゃあね」

作者「またよければ来てください」

そして優星は去った。

当麻「それではまた次回」

作者「感想、評価待ってます。・・・当麻使います？」

第二十話「転生者と少年が交差するとき4」(前書き)

作者「今回は転生者の・・・」

当麻「抹殺日だ!」

作者「・・・元気がいいな」

当麻「ちゃんと言われた通り地獄も見せる」

作者「・・・針千本?」

当麻「本編へどうぞ」

作者「何する気?」

## 第二十話「転生者と少年が交差するとき4」

当麻 side

いやはや、こんなクソツタレがこの世にいるとは思わなかった。  
まったく、こんなやつにわざわざ“手加減”しなけりゃよかった。

「な、なんで！？なんでさっきまで・・・」

「黙れカスが。せつかくやられたふりでもしてやろうかと思ったけどな、止めた」

神様にいいように使われたのかと思ったから、適当にやられてやるうかと思った。  
けど、こんな奴に

「慈悲なんかくれてやるもんか・・・」

「くっ！レッ、『レールガン超電磁砲』！！」

正面からメダルが飛んでくる。だが

「お前バカか？」

「な！？」

次の瞬間には俺はクソ野郎の目の前に『テレポート空間移動』していた。  
そのまま、右手を振りかぶる。

「アツ、『アクセレレータ一方通行』！！」

どうせ反射する気だろ。俺の右手、出来るもんなら

「反射してみやがれ！」

「ガフッ！」

「ほら、何もできないのか？」

俺の右手、『幻想殺し（イマジンブレイカー）』で殴る。

「『ダークマター未元物質』！」

「ダルイな。そろそろあきらめろ」

白い翼が来る。だが

「な！？グアッ！」

「おいおい、お前の垣根提督と同じじゃねえか。反射しやすくて助かるぜ」

まるで逆再生のようにクソ野郎の『<sup>ダークマター</sup>未元物質』が戻って発動した本人を貫く。

「くそ！くそ！！」

「おいおいネタ切れか？この程度で？」

「僕は選ばれたもののはずだ！なのになぜ！？」

「まだそんなこと言う元気があるのか」

「こんなはずじゃ、こんなはずじゃ！」

「はいはい、いいからあきらめな」

すると、先ほどまであった大樹が消える。  
そして

「当麻君！」

「当麻！」

「おう、なのはとユーノか。もう終わったのか？」

「これだ！」

「キヤア！」

「なのは！」

さっきまで倒れていたクソ野郎が『ダークマター未元物質』でなのはを狙う。  
が、しかしだ

「俺がそんなことをさせるわけないだろ」

「な！？」

「いや、砂鉄の剣で切れちゃうなんてモロイんだな」

まったく、『ダークマター未元物質』が砂鉄で斬れるなんて。・・・弱くね？  
この程度で俺に勝てるわけないだろうに。

「くそ！確かあの神は今なら勝てると言っていたのに！！」

「ん？あそつだ。なのは先に帰っていいぞ」

「え？あ、うん」

神という単語が出たからにはなのはに隠さないと。  
それより、

「はて、なんかあつたっけ？」

「力がどうか言ったらしいじゃないか！」

「ん？と？ああ、力がでかすぎるから弱くしてほしいてやつか？」

「はい？」

そうそう確か

「だから、駄目ですって」

「いや頼むよ！威力でかすぎて本気が出せないだ！」

「じゃあ、本気を出さないで下さいよ」

「えっ！」

「はい駄目なものはダメです」

「そんな」

みたいな。てか

「なんで知ってるんだ」

「くそ、僕は騙されたのか！」

「まあ、残念だったな。だが・・・」

そういつて俺は肩に手を置く。そして清々しい笑顔で言い放つ。

「俺は許さねえ」

ザクザクザク

「があああああ!!」

「今ので針十本だからな。あと990本ある。それとどうする？目でもくりぬくか？あるいは血流操作？炎で体を焼く？生きたまま脳でもくりぬくか？生き埋め？窒息？感電死？絞殺？圧殺？水死？呪殺？」

どれも捨てがたいな。さてどうしよう。なんて考えた直後。

「始末は私がしよう」

「は？」

クソ野郎の頭がはじけ飛んだ。

三人称 side

突然の出来事に当麻は

「デメエ！」

誰かわからない、マントを付けたさして身長が変わらない人物に叫ぶ。

「もっと、地獄を見せなきゃダメだろ！」

「・・・主人公がそれでいいのか？」

「でどちらさん？」

「貴様の敵だな」

「あつそ。なんでもいいけどさ、今回寄越したやつ、あんなの今度俺の前に出してみろ」

「どうなるのだ？」

「さてどうなるでしょう。まあ・・・」

笑いながら言う。

「死ねたらラッキーということだ」

「フッフッフ、怖いな」

「で、何？もうラスボス戦ってわけじゃないだろ」

「今回はそうだな・・・遊びに来た」

「はい？」

「ゴホン、ゴホン。えゝ・・・」

ワザとらしく咳をすると語り始める。

「数日前、高町なのはに自分の正体を隠して接近しかし簡単に見破られ手玉に取られた」

「グサツ！なぜそれを・・・！？」

「その夜デバイス、ミサカの場合で高町なのはの記憶を改ざんしようということになった。が自分の記憶を改ざんされていると勘違いした」

「言わないで！思い出させないで！」

「アッハハッハッハ！」

「いやゝ！馬鹿にしないで！！」

「まあ、この程度で勘弁しておこう。それではさらばだ」

すると、突然消える。もっとも当麻は気にしていないようだが。

「ぎゃあああ！あの時の俺の馬鹿！」

《何してるんですか？》

「・・・ミサカまさかお前が話したんじゃないよな」

《・・・さっきの人には》

「うん、じゃあ誰に教えたのか教えてもらおうか」

《え〜と・・・》

「時間はある、ゆっくり聞かせてもらおう」

その日、当麻とミサカはだれの前にも表れなかったとか

## 第二十話「転生者と少年が交差するとき4」(後書き)

作者「龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございます!」

当麻「誰あれ?」

作者「中ボス?」

当麻「まあいいやそれじゃ、また次回」

作者「感想評価待ってます」

第二十一話「覚悟と少年が交差するとき」(前書き)

最近気づいた・・・これ原作の話あんまし載せてない・・・。

本編へどうぞ。

## 第二十一話「覚悟と少年が交差するとき」

当麻 side

今日はなのはが、すずかの家に行くらしいのでついて行ってやることにした。

俺の用事はもつと違うところなんだか・・・まあいつか。

「・・・ねえ、当麻君・・・」

「ん？なんだ？」

「町の人にいっぱい迷惑かけちゃったね・・・」

「そんな！なのはのせいじゃ・・・！」

なにになに？どうした？ごみでもポイ捨てしたのか？そりゃあ

「迷惑だな」

「当麻！？」

「そうだよね・・・」

「ただ、誰にも失敗はある。俺としては反省してやり直せばいいと思うぞ」

そうだ。なのはは、ワザとポイ捨てなんかするはずないからな。反省して、ゴミを拾えばみんな許してくれるさ。

「やり直しなんてできないよ！私が本気でしなかったから・・・私はあの人が持つてゐるって気づいてたのに！」

「なのは・・・」

なんだ？あつ！もしかしてポイ捨てした人を注意できなかったとかなるほど・・・

「そりゃ確かにやり直しなんかできないな。ただ、反省はできるだろ。人は間違いに気づいたら、後悔して、反省して、そして次同じことをしないよう努力する。そんな事が出来るんだ」

そうそう。今回駄目だったら次注意すればいい。

「完璧な人間なんかこの世にそうそういない。みんな何度も間違えて、それで出来るようになるんだ。俺だって最初はできないさ」

そりゃ、今は余裕で注意できるが、初めてするっていうのはちょっと怖いもんだしな。

「だから落ち込むな。お前がだめなら今度は俺がしてやる」

注意を。

「・・・うん」

やっとなのはが軽くだが笑った。いや、話は軽くても重い空気だったしな。

「そうそう、なのはは笑っていればいいんだ」

そこで思い出すのは神の手先だった男。あんな奴はなのはたちに合わせちゃいけない。  
あんな奴は

「お前に害を及ぼす奴は、俺が叩き潰す」

そう言っただけ俺はなのはに笑いかける。

「うん！」

そしてなのも笑いかけてくる。いや、子供は笑顔が一番だ。．．．俺も子供だが。

なのはside

私が思い出すのはジュエルシードが発動した時の町の惨状。

当麻君と出かけなかったから気づかないふりをしてたけど男の子が持つてゐるのを知っていた。

そのせいでたくさんの人に迷惑をかけてしまった。

私はどうしたらいいのだろう．．．。私のせいでたくさんの人が怪我をしてしまった。

どうしたらいいのか分からない。

ユーノ君は私のせいじゃないって言うてくれるけど．．．。

そこで一緒にいてくれる当麻君に聞いてみようと思った。

当麻君なら何をすればいいのかわかるかもと思って。

「．．．ねえ、当麻君．．．」

「ん？なんだ？」

いつも通りの声。まるで何も起こってなかったかのような声。

「町の人にいつぱい迷惑かけちゃったね・・・」

「そんな！なのはのせいじゃ・・・」

ユーノ君が何か言おうとするけどその前に当麻君が話す。

「迷惑だな」

「当麻!？」

「そうだよね・・・」

「ただ誰にでも失敗はある。俺としては反省しててやり直せばいいと思うぞ」

最初、迷惑だと言われた時は辛かった。でも仕方ないかな、本当のことだし、と思った。

けど、やり直し?そんなこと・・・やり直しなんて

「やり直しなんてできないよ!私が本気でしなかったから・・・私  
はあの人が持つてゐるって気づいたのに!」

当麻君は悪くないのに怒鳴ってしまった。それでも当麻君は話をしてくれる。

「そりや確かにやり直しなんてできないな。ただ、反省はできるだろ。人は間違いに気づいたら後悔して、反省して、そして次同じことをしないように努力する。そんな事が出来るんだ」

私はどこまでしたんだろう？後悔はした。じゃあ反省は？でも絶対に努力はしてない。  
なら、これからしなくちゃ！

「完璧な人間なんかこの世にそうそういない。みんな何度も間違えて、それで出来るようになるんだ。  
俺だって最初はできないさ」

私は完璧な人間じゃない。欠点だらけだろう。なら私はこれからは間違えないように、あんなことにならないように本気で頑張る。

「だから落ち込むな。お前がダメなら今度は俺がしてやる」

「……っん」

当麻君も一緒に頑張ってくれる。そう思うと自然と笑えた。

「そうそう、なのはは笑ってればいいんだ」

そして一瞬何か考えた後当麻君は言ってくれる。

「お前以外を及ぼす奴は、俺が叩き潰す」

「うん！」

当麻君が笑ってこっちを見てくる。

私も笑いかえす。

もしかしたら顔が赤くなってるかもしれない。  
そして思う。

当麻君を好きになってよかったと。

## 第二十一話「覚悟と少年が交差するとき」（後書き）

なんとなくフラグ強化したいと思ったら、なんか変な感じに……。当麻は素直に励ましたりしません。たぶんユーノにでも言わせるでしょう。

龍賀さん、感想ありがとうございました！

それではみなさんまた次回。

**第二十二話「少年と少年が交差するとき」(前書き)**

今回も戦闘は無しです。

## 第二十二話「少年と少年が交差するとき」

当麻 side

現在俺は、なのはをすずかの家に送っている。  
というかもう着いた。いや、何度か来てるけどでかいな。

「じゃあ当麻君行こう!」

「ああ、言って無いっけ?俺はこれから用事があるからいけないんだ」

「え!?!」

「じゃあな!」

「と、当麻君!?!」

そうして、俺はすずかの家を通り過ぎる。なのはがなんか言ってるが、まあいいだろう。

俺が用があるのはこの先、春樹の家だ。ちなみに俺しか知らない。  
そして、なのはがいなくなって身軽になった体を『空間移動<sup>テレポート</sup>』で一気に移動させる。

そして、着いたのは見た目は普通の家。ただ

「入りたくねえ」

《じゃあ、なんで来たんですか》

「いや、あいつが来いつてうるさいし」

《じゃあ頑張ってください》

「でもなあ」

ドアの前でミサカと話す。

どんなに嫌でも結局俺が頼んだことだから俺が行かないといけないし。

仕方ない、そう思いながら『ダークマター未元物質』を発動させドアを勝手に開け入る。もちろん、本人に許可をもらってる。そして次の瞬間……

ズガガガガガガガガ！！！

「うお！危な！！」

《いったい、こんなものどこから集めてくるんでしょうか？》

出迎えてきたのは銃弾の雨だった。

良かった、『ダークマター未元物質』発動させて。

俺は、『ダークマター未元物質』で体を抱くようにして防ぐ。

そして、銃弾の雨が止むのを待つて能力を消す。その途端に上で何かが開く音がする。そして

↑ 屋根が開く音

↑ 金属がこすれあう音

↑ 何か<sup>が</sup>落ちる音

トストストスト  
↑刃物が落ちて床に刺さる音

ポタ、ポタ、ポタ  
↑ 血が垂れる音

「つておい！あぶねええええええ！！！」

《まるで漫画みたいに刃物が追いかけてきますよ!》

刃物が軽やかな音とともに床に落ちてきた。

「ヤバイヤバイ!!どっしょいれ!!」

そしてそのまま近くの扉を開けて中に入る。  
そこは

「なあ、ミサカ」

《はい？》

「なんか床の感覚がないんだけど」

《下を見たらいいじゃないですか》

「知らないのか！こういう時、下を見たら落ちちまうんだぞ！！」

《・・・もう落ちてますよ》

床がなかった。

「ギヤアアアアアアア！！」

春樹 side

今、僕は自分で作った地下室にいる。そして目の前には

「無事？」

「どう見える・・・」

《聞くくらいならあんな仕掛けしないほうがいいのでは？》

「そしたら、つまらないじゃないか」

「今ほどお前を殺したいと思った時はないよ・・・」

「応援してるよ」

死にかけの当麻がいる。誰がこんな目に合わせたんだ。

「テメエだろ・・・」 《貴方でしょう》

「で、話を変えるけど前頼まれた物が数体出来たよ」

「あからさまだな」

《ですね》

「でどんな感じだ・・・」

僕が当麻に頼まれていたもの、それは

「俺の『パワードスーツ駆動鎧』」

「自分で見なよ」

そして、僕は当麻を伴って歩く。  
僕は自慢じゃないが勉強は全く駄目だ。ただ、人に言わせるとある  
一点がずば抜けてすごいらしい。  
それが、機械系だった。そういうのの勉強はなぜかできた。それに  
作るのが楽しく感じた。

そこで今は当麻の力を借りて当麻の力になるものを作っている。  
そして僕と当麻はカーテンで仕切られた場所に行く。  
そこには僕のとっておきが並んでる。  
さて、当麻はどんなふうに驚いてくれるだろうか？

三人称 s i d e

「じゃ、見せてくれよ」

「それじゃまず一体目」

そう言つて春樹は布をはがす。  
そこにあつたのは赤と金のカラーリング。  
丸みを帯びた人型の形。  
そして胸の位置には、白く輝く丸いパーツ。  
それはまるで

「・・・どこかの社長がこれで戦っていそうだな」

「昨日、ゲ○で借りて観たんだ」

「影響受けやすいな。この金属どこで手に入れたんだ？」

「ヒミツ」

「胸の何だ？」

「LED電球」

「何の意味があるんだよ！」

「偉い人には飾りということがわからんのですよ」

「結局飾りかい！」

「ただ、それなりの銃火器を搭載してあるから強いよ」

「ホントそれどこから手に入れてるんだよ」

「ヒミツ」

「ハア」

「それじゃ次ね」

「ああ頼む」

そして二人は次の布のところに行く。

そして春樹がその布を剥ぐ。

そこにあつたのは白と青が主体のカラーリング。

先ほどの機体よりも角張っているが人型の形

右手の実体剣に左肩の盾のようなもの。

胸と左肩の緑色のパーツ。

それは

「・・・今度はアニメでも見たか？」

「オオにはなかったけどね」

「念のため聞くけどあの胸と肩のはLED電球か？」

「太陽炉です」

「本物！？どうやって手に入れたんだ！？」

「ヒミツ」

「・・・次行くぞ」

そして次の布もめくる。

そこに、『白』が、いた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。

それが操縦者を待つように装甲を開けている。

「なあ」

「ん？」

「作品間違えてないか？」

「さあ」

「・・・武器は？」

「近接特化ブレード・《雪片ゆきひら式型》」

「よし！涼介のところに送れ」

《「？」》

「気にするな独り言だ」

「ならいいけど」

そしてまた移動。

それから春樹が布を外す

そこには白い機体があつた。

ユニコン  
一角獣を連想させる角。

右手の大型のライフルと左手の盾。

「からの」

春樹がそういうとその機体が変形する。

一本の角はわかれ二本のアンテナのようになる。

そして、体中の装甲が動いて隙間から赤い光が漏れ始める。

「・・・よし春樹、お前は何者だ？」

「さあ」

「もうお前ひとりで世界征服できるんじゃない？」

「無理だと思う」

疲れ果てた顔で言う当麻に、春樹は特に何も考えてないような顔で言う。

そこに

《マスター、魔力反応です》

「どこで〜」

《すずかさんの家です》

「何!？」

いきなりの反応で当麻は驚く。

「悪い春樹！続きはまた今度な！」

「どれか持っていったら？」

「・・・さすがにそれはダメじゃね」

「そう。じゃあね」

「おう！」

そして、当麻は『空間移動テレポートで春樹の家から消えた。

「次は、変身ベルトでも作ろうかな」

ついでに春樹から一般人という要素が消えた。

## 第二十二話「少年と少年が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー

作者「基本春樹は機械なら何でも作れます」

当麻「さすがにあんなの使ったらなんにでも勝てるだろ」

作者「残念ながら勝てない人もいるけどね」

当麻「やっぱりか」

作者「今回出たパワードスーツ？が何なのか全部わかる人はいますかね？」

当麻「わかる人は感想にでもどうぞ」

作者「龍賀さん感想ありがとうございます！」

当麻「ではまた次回！」

作者「感想など待ってます」

第二十三話「少女（+α）と少年が交差するとき」（前書き）

似たようなタイトルばかりではないです。

今回とても短いです。

## 第二十三話「少女（+α）と少年が交差するとき」

当麻 side

「空を自由に飛びたいな！はい、『テレポート空間移動』〜！」

《飛んでる訳ではないんですが》

現在魔力反応があつたところに向かっている。

こつ『テレポート空間移動』たかーい所に飛んでそのまま地面に落ちる前にそれを繰り返している。

いま俺はなんとなくミサカに疑問を話していた。

「なあ、ミサカ」

《はい？》

「今までシャドウが出たとき魔力反応つてあつたっけ？」

《・・・ありませんでした》

「ならば、今回俺来なくてよかったんじゃない？」

《いまさら何を》

「いやかえろうかも」「なんだいアンタは！」・・・と？」

《もう目的地ですよ》

俺の出番じゃないのかと思って帰ろうとしたら目の前に犬と金髪の少女がいた。

・・・もう少しで帰ったんだがな。仕方がないので『ダークマター未元物質』を発動しながらしゃべりかける。

「そこのカワイイ少女。君は何者だ？」

もつともこれに返事は期待してない。俺の予感ではこんなセリフ無視して・・・

「カ、カワイイ・・・／＼／」

もう二度と直感には信じねえ。気を取り直して。

「ここで会ったのも何かの縁。よかったら名前でも教えてくれないか？」

今度は俺の論理的思考が名前は言わないと・・・

「フェイト！そんな奴に名前なんか教える必要ないよ」

「ご苦労ワンちゃん」

「・・・アルフ」

「・・・ごめんよフェイト・・・」

「フェイトとアルフか、よし覚えた」

え？名前は言わないんじゃないかって？言っただけでしょフェイトは。・・・すいません許してください

俺の直感も論理的思考もダメダメです。

フェイト・・・はて、なんか聞いたことがある気がするけどムカつく野郎の顔と運命の少女って誰かが言ってたのしか思い出せないな。運命・・・今度春樹に「デスティニー」作って・・・駄目かな。

今はそんな場合じゃないか。

「そんじゃフェイト、君はここで何をしていた？」

「フェイト、言う必要なんかない！逃げろよ！」

「逃がしはしないけどな」

「な！？」

俺は手に持った糸を使っただけで逃げられないようにフェイトとアルフを？ま

えてみた。

ふむ、バインドの代わりにはなるかな？

名前は・・・どうしようやっぱり『七閃』の応用だし、

「改良型七閃『縛<sup>はく</sup>』的な？ありきたりすぎるな。なあ、どう思う？  
サカ？」

《とりあえず今言うことじゃないと思います》

とにかく名前は置いて、これでゆっくり話せるかな？  
そして話そうと思った次の瞬間・・・

《マスター、シャドウです》

「ふむ、どうやらとことん俺の邪魔がしたいらしい」

すると、目の前の空間が歪み、シャドウが出てきた。  
俺はフェイトと話がしたいんだがな・・・こうなったら

「フェイト」

「は、はい！」

どうやらいきなり目の前にシャドウが出てきてびっくりしたらしい。

「ちょっと手伝ってくれない？」

「え？」

「報酬はそうだな、何かおこるから」

「何言ってるんだい！誰が手伝いなんか・・・」

「肉でもいいよ」

「フェイト、なんだかよくわからないけど手伝ってあげたらどうだい？」

変わり身早！まあそのほうが都合はいいけど

「アルフが言うなら・・・」

「ごめんな」

本当は俺一人でも倒せるがその間に逃げられても面倒だし。  
まあもつとも

「すぐに全部つぶしてやるよ」



第二十三話「少女（+α）と少年が交差するとき」（後書き）

龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございます。

当「なあ、作者」

どしたのそんな怖い顔して？

当「ミサカにくだらない命令した？」

・・・は何のことだろう？

当「そうか違うのか・・・でも死ね！」

そんな！？私は何もギャアアアア！

ミ《何があつたのかは龍賀さんの作品

『テンプレな転生 強き信念持ちし者』のあとがきをご覧ください》

春「紹介しなくても皆さん知ってると思うけど」

当春ミ「《それではまた次回！》」「」

春（本当は僕がミサカに頼んだんだけど）

第二十四話「少女（+α）と少年が交差するとき2」（前書き）

実際こんな簡単に事が進みますかね〜と思いながら書いた話。

## 第二十四話「少女（+α）と少年が交差するとき2」

あらずじ

野生のフェイト、野生のアルフ、野生のシャドウが現れた。

「野生つてなんだよ」

三人称 side

現在、当麻、フェイト、アルフの三人？は多数のシャドウと交戦していた。

初の空中戦で当麻は意外と

「たく、数が多い」

「ねえ、アンタ」

「あんたじゃないぞ。そーいや名乗ってなかったな。俺は今上条当麻だ。改めてよろしくなフェイト、アルフ」

そう言ってフェイトの頭を笑いかけながらなでる当麻。

「えっ、あっ、うん。よろしく当麻／＼」

「よろし・・・じゃなくて!」

・・・余裕のようだ。少なくとも自己紹介をするくらいには。

「アンタ!その手に持つてるの質量兵器じゃないのかい?」

「まあ、確かにそうだな。安心しろ、背中に当てはしないから」

現在当麻が手に持っているもの、それはメタルイータM5。

対戦車ライフルにフルオート機能をつけそれをさらに改造した品。

それを当麻は右手に持ちながら近づいてきたシャドウを撃つ。

ドン!ドン!ドン!

「習ってよかった衝撃を受け流す方法」

「?」  
「?」  
「?」

「気にするな。独り言だ」

今度は逆側から数体が同時に来たそれを、左手に持った銃、F2000R トイソルジャーで迎撃する。

トイソルジャーとは、

最も効率良く弾丸を充てるようにリアルタイムで弾道を調節する機能がついている銃。

それでまとめて薙ぎ払う。

「よし、この程度でもやれるな」

「十分だと思うんだけど・・・」

「アタシもそう思うよ・・・」

しかし、十分なのは当麻だけではない。フェイトも鎌状にしたデバイスで戦い、アルフもバインドでフェイトを手伝ってる。それに、向かってくるシャドウは動きは速いものの攻撃は近づいて殴るしかないため遠距離から攻撃する当麻、シャドウより素早く動き続けるフェイトとアルフになすべくもなくやられていく。そしてフェイトが最後のシャドウを切り裂く。

「これで最後かな？」

「たぶんな」

「当麻、なんだいあれ？人みたいな感じだけど」

「んゝなんて言うかな？俺もよくわからないけど人間じゃないのは確かだぞ」

当麻は思い出したように言う。

「そうだ！手伝ったお礼、何奢ってほしい？」

「えゝと、いいよ。別にそんなことしなくても」

「いやでもお連れさんが」

そこでアルフを指さす当麻。フェイトもつられてみると

「・・・アルフ」

「アタシは肉が食べたいよ！」

「肉か、久しぶりにいいな」

目を輝かせていうアルフがいた。

「そんじゃいい時間だし晩飯でも作るから食べさせてくれよ」

「いや、けど」

「良いつて。どうせ家に俺しかないんだし」

「・・・うん、じゃあお言葉に甘えて」

「じゃあホイ」

そう言つてフェイトとアルフの手――（と前足）をつかむ当麻。

「え、どうしたの？」

「なんだい？」

「帰るんだよ」

そしてその場から三人？の姿は消えた。

当麻 side

『レポート空間移動』でいま俺が住んでるマンションまで来たんだが・・・

「魔法陣もなしに転送魔法を使うなんて・・・」

「アンタ、何者なんだい・・・？」

そんな、俺を凄いものを見るような目で見ないでほしい。

「もしかしてレアスキル？」

「ああ、それぞれ」

「なんだか適当だね」

そのまま俺の部屋にまで連れて行く。

途中、驚いた表情をしたが何だ？

sonde、冷蔵庫の中にあつた肉やら野菜――（ちゃんと賞味期限内）を刻んで炒める。

sonde、調味料で味をつける。今は材料がないからこの程度が限界だ。

で飯の用意をして戻ったら、アルフが人型になっていた。・・・うん、ちょっとびっくり。

「ほら、お待たせ。出来たぞ」

「待ってたよ！」

「アルフ・・・ハア」

「ハハハ」

そこで簡単に話しながら飯を食べる。

フェイト・テストロッサがフルネームだって。いい名前だなんて言ったら赤くなつたが・・・なんでだ？

そして食後、帰るって言ったから送るって言ったらいいって言われた。

「別に遠慮しなくてもいいけど」

「いや大丈夫だよ。すぐそこだし」

ほう、近いのか。そういう会話をしながら隣の部屋の前に行く。すると、

「もういいよ」

「いや送るって」

「送ってもらったもん」

「ん？」

「ここだよ、私とアルフの家」

「近!？」

何その偶然? ああ、だから驚いた表情してたのか。

「じゃあね、当麻」

「ああ、晩飯また食いに来いよ」

「うん」

そして、部屋に入っていた。アルフ? 今、こいぬフォームとやらで爆睡中。・・・使い魔って便利。  
俺も自分の部屋に帰った。

「さて寝るか」

《やることあるのでは》

「なんだっけ?」

《ずいぶん惚けていますね》

「ああ、思い出した。なあ、掛け声ってホントにあれ?」

《あれです》

「ハア、仕方がない。言うか」

俺は両腕を広げながら言う、オリジナルの能力で作者が思い出し（ゴホンゴホン）・・・魔法のことばのようなものを。

「さあ、検索を始めよう」

《恥ずかし！》

「じゃあ言わせるな！」

フエイトside

今日、上条当麻という人に会った。

最初は、邪魔をしてくるのかと思ったけど、違うみたいだった。

なんだか変なのを倒すのを手伝ってと言われて手伝って、そして晩御飯と一緒に食べようって言われてずっと振り回されてたけど

「久しぶりに、楽しかったな・・・」

いつ振りだろう、ちゃんとしたご飯を食べたのは。

最近は、簡単に食べれる物しか食べてなっかたから余計おいしく感

じた。

「また一緒にご飯食べたいな」

そして、思い出したのは戦闘中に頭をなでられたこと。

「また、頭なでてくれるかな？」

なぜだか分からないけどものすごく嬉しかった。  
また一緒にご飯を食べたりするために・・・

「ジュエルシード集め、頑張ろうねアルフ」

「もちろん・・・だ・・・グウ」

寝ちゃった。・・・私も寝よう。また頑張るために。

## 第二十四話「少女（+α）と少年が交差するとき2」（後書き）

あとがきコーナ

当「コーナーとは言えないけどな」

作「言っちゃだめだよ」

当「てか、シャドウ弱いな普通の人にも倒せるじゃねえか」

作「今はね、それにフェイトが普通ならこの世はおかしくなってるよ」

当「おかしくなるから、俺が来たんだけどな」

作「まあ、それは置いといて。メタルイーターM5にF2000R・  
・さらに

なんか懐かしいの使ったね」

当「ちょっと確かめたいことがあってな。それじゃあ

龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました」

作「それではまた次回！」

第二十五話「危機（笑い）と少年が交差するとき」（前書き）

これから週一更新めざします！

「いつまで続くかな？」

・・・さあ

「・・・続けろ、さもないと俺が殺す」

・・・頑張ります

第二十五話「危機（笑い）と少年が交差するとき」

当麻 side

いま俺、上条当麻は・・・眠い。

「眠い・・・寝かせて・・・」

「だめ！話聞いてよ！」

「勘弁してください・・・」

「どうしたの、当麻君？」

「あんだ、いったいなんでそんな眠そうなのよ？」

なんでてねー、そう簡単に言えることじゃないですし・・・あ

「女の子と遊んでた」

「「「ブハッ!?」」」

「「「誰!?」」」

あれゝ話したから興味をなくすかと思いきや詰め寄って来ちゃったよ。

まったく、女の子は色恋沙汰が好きだねゝ。恋なんかないけど。

士郎さんたち、大人はなんか吹き出してるし。なんでだ？

こんな俺たちは今、車に乗って温泉に行ってる。

俺はね、来たくなかったんだよ、でもなんか気づいたら捕獲されて車に乗せられていたんですよ。

「ねえねえ当麻君。その・・・なにしたのかな？」

美由紀さん、あなたまで聞いてきますか。  
さて、どう誤魔化すか・・・

「・・・アゝンなことや・・・」

「「「「アゝンなことや？」「」「」

「・・・コゝンなこと・・・」

「「「「コゝンなこと？」「」「」

・・・心なしか墓穴を掘った気がする。まあいいや

「人に言えないこと、あとはご想像にお任せします」

そう言って俺は毛布（持参）を被る。  
嘘ついてないよ。だって女の子と一緒に変なの倒したなんて言えな  
いしね。  
そして俺は眠りについた。

うむ、バッチリすつきり目が覚めた。  
知らない間に旅館に着いたらしい。  
そんじゃ俺も降りて・・・寝るかな。

『《またですか》』

『いいだろ別に。減るもんなんて何もないし』

『《時間とか無駄になると思いますが》』

『まあ、気にしなさんな』

『《なのはさんたちと、温泉にでも入ったらどうです？》』

『馬鹿言いなさんな。捕まっちまう』

『《見た目は子供ですよ》』

『中身は（おそらく）大人だ』

でも確かに、なのはたちと一緒にいてやったほうがいいかな？  
とりあえず、なのはのところにゴー。

「取りあえず、この二日間なのはも年相応にお子様らしく、めい  
っぱい遊んでしまおうと思います」

・・・何がしたいのこの子？  
てかさ

「年相応にとか言ってる時点で年不相応だよな」

「にゃ！？当麻君！？」

おっと、声に出たか。てか俺に気づいてなかったなか？

「ねえ当麻君、その・・・」

「ん、なんだ？」

なのはが恥ずかしそうにこちらを見ている。

『《仲間にしますか?》』

『なんのだよ?』

そしてなのはが告げる、人によっては望み、今の俺は全く望まないことを。

「一緒にお風呂・・・はいろ」

「・・・」

「・・・当麻君?」

「戦略的撤退!」

「当麻君!?!」

逃げました。いやもう逃げないとまずいでしょ。

さて、何とか逃げ切って今あてがわれた部屋にいる。え、ユーノ？  
しらねそんなの。

俺もどうせなら普通に風呂に入りたいんだが入りたくない。  
いやね、男湯に恭弥さんがいるですよ。入れるわけないだろ。  
そうになると、必然的に暇になってくるわけで・・・

「そう言うわけで・ザ・改造タイム！」

《どういづことですか！？》

今、両手に工具類を持ってスタンバツてる。

「最近思っわけよ、俺一人じゃ戦うのきつくないかって。なら人数を増やしてしまえってな」

《それと、私と、その工具に何の関係性があるのでしょうか？》

「ぶっちゃけると・・・お前を改造！そして、肉体を持たせたい！」

《どうやってですか・・・？》

「えーとな、?????をして、そして?????を・・・」

《もうやめて！そんなおぞましいことしないで！！》

失礼な。ただ対象年齢が高すぎることを言っただけなのに。  
その後、他のプランも話したが全部没にされた。  
そうこうしてる内にそれなりの時間がたった。  
そろそろ、なのはたちが風呂から上がったかなと思い探しに出てみ  
た。  
すると

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンチョに見える  
んだけどな」

「なのは、お知り合い？」

「う、ううん」

と、聞き覚えがある声が聞こえた。  
近寄ってみるとそこには・・・

「・・・何やってんだアルフ」

「あれ、当麻じゃないかい」

「何よ当麻。この人あんたの知り合い？」

「ああ、ちよつとな」

そう言ってアルフを引っ張って離れる。  
そして、距離が離れたところにしゃべりかける。

「なあ、アルフ。何やってんだ？」

「何って、牽制ってやつかね」

「ああ、なるほど。確かに邪魔されないようにしないとな」

「そうなんだよねー。ってなに知った風なこと言ってるんだい？」

「気にするな。それよりフェイトもいるのか？」

「ああ、森の中にいるはずだよ」

「分かった」

取りあえずフェイトに挨拶でもしに行くか。

フェイト side

私は木の上でアルフと念話をしていた。  
そして話もひと区切りついたから念話を切った瞬間。

「ふむ、そうかジュエルシードを見つけたのかよかったな」

「だ、誰!？」

周りには誰もいないはずなのに声が聞こえ警戒していると

「忘れちゃったのかい、子猫ちゃ・・・おえ・・・」

《自分で言って気持ち悪くなるくらいなら言わなきゃいいのに》

「その声・・・当麻？」

よく聞いてみると聞き覚えがある声だったので訊いてみた。すると

「大当た・・・」

私がいた木の上から飛び降りてきた。

「り〜〜〜」 (上から下へ)

《あ〜あ》 (上に同じく)

そしてそのまま下へ・・・え!？

ガン！

「当麻！？」

大きな音がして心配になったから私も降りてみると

「~~~~~」 （声にならない悲鳴）

《あゝあ》

後頭部を押さえながら転がりまわる当麻がいた。

「どうしてこんなところにいるの？」

「ん」

当麻が落ち着いたところで訊いてみる。

ここは、海鳴市からそれなりに離れているから普通は会わないと思うけど・・・

「ああ、それは（温泉に来たら居たから）会いに来たんだよ」

「え！？わざわざ会いに！？」

《こうやって、真実は間違った方向に行くんですね》

わざわざ、私に会いに来てくれるなんて・・・でも

「私がここに居るって、言っただけよね？」

「苦労したぜ、（森の中を）探すのは」

「探してくれたの！？」

《もう何も言いません》

私に会うためにここまで探してきてくれたなんて！

「ハッ！殺気？そろそろ帰らなくては！じゃあな！」

「え、あ、うん。またね、当麻」

・・・今度は私から会いに行こうかな？

当麻 side

はい皆さん、今俺こと上条当麻（偽名）はフェイトのそこから帰ってきて・・・

「デイベイン・・・」

死の危険に直面してる。

っておい！まだ俺記憶喪失で自分の名前すら知らねえよ！

これから俺活躍して敵倒して記憶取り戻してみたいな展開があるんじゃないの！？

そんな事を考えてる間にも死へのカウントダウンは続く

「バス・・・」

「ストップ！なぜそんなに怒っていらっしゃるの！？」

ここが分からない。帰ってきた途端になのはに拉致られこんな始末。いつたい俺が何をしたって言うんだ！

「・・・さっきのお姉さん誰？今までどこに行ってたの？」

「そ、それは・・・」

ここで正直に話すのはなんとなく不味い気がする。

だってさ、自分の敵と友達が知り合いだったらどう思うよ。  
そんなの俺だったら嫌なため隠そうとするが

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

思いつくか！こんな魔王みたいな殺気を放たれたら嘘ついてもらえ  
そうだと！

「今悪口言わなかった？」

「考え読まれた！？」

「今、言ってくれたら許してあげる」

こっぴどくなら！

「ヒミツ」

「ディバイン……」

そうなっちゃいますよね。  
もう自棄だ！

「この鬼！悪魔！ま、おう！？バインド！？」

「バスター！」

そのまま、俺は気絶した。

「生き返った」

《シャレになりませんよ》

あれから俺は夜まで気絶してた。  
誰も起こしてくれないってどうよ。

そこで、子供たちは寝て大人は談笑してたから抜け出して風呂に入  
って帰ってきたところなんだど・・・

「なあ、ミサカ」

《はい？》

「なんか、変な気配がするんだけど」

《シャドウですね》

「うわ・・・働き者だな」

《じゃあ、頑張って働いてきてください》

「へいへい」

そして、俺は出ていく。

この後驚愕の真実が待っているとも知らずに《

「ミサカ止めて！当たったたらどつするの！？」

《さあ？》

「無責任！」

第二十五話「危機（笑い）」と少年が交差するとき（後書き）

あとがきコーナー

当「なあ、俺何した？」

作「非リア充にケンカ売った」

当「？」

作「憎い！」

当「龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました」

作「春樹も当麻も嫌われてるな」

当「どうだろう?。」

作当「「それではまた次回!!」」

作「次回、当麻壊れます。軽くですが」

第二十六話「驚愕の真実（笑）」と少年が交差するとき（前書き）

当「うわゝ（笑）てなんだよ」

いやね、驚愕っちゃ驚愕なんだけど・・・

当「要するに戦闘じゃない？」

いや戦闘なんだけど・・・

当「ハッキリしろ！」

お前の戦闘描写まともに書けねえよ！

当「？いつもの事だろ」

そうなんだけどさ・・・

当「では本編へどうぞ」

## 第二十六話「驚愕の真実（笑）」と少年が交差するとき

当麻 side

さてさて、前回ミサカが驚愕の真実がなんて言ってたが・・・

「何も本当に出さなくったて!!」

《なんだかすいません・・・》

目の前には人型のシャドウが居る、居るのだが・・・

「H S P S - 15だっけか？」

《ラージウェポン、簡単に言つとパワードスーツ駆動鎧ですネ》

そう、なぜかパワードスーツ駆動鎧の姿をしている。

そして、その手には、リボルバー式のショットガンが握られている。

「・・・こいつ等が非殺傷設定なんてお利口なもん持ってるわけないか」

《だとすると、なのはさんたちと戦わせるのはまずいですね》

「じゃあここで、潰す！」

そのまま突っ込もうとしたとき一体の駆動鎧から声が響いた。

「まあ、待て。話を聞いてからでもいいだろう」

「・・・誰だ？」

「これは失礼、先日君の前に出てきた敵だが」

「あゝ、あの時の人を馬鹿に知っていた奴」

「また馬鹿にされたいかね」

「もう慣れたわ！」

「それは置いといて、今回は真面目だ」

そこで、律儀に隣に置く動作をする敵（パワードスーツ）。なんて言うか・・・

「ふざけてる様にしか見えない」

「気にしないでくれ、それで本題だ・・・そこを退いてくれないか

ね  
」

「なぜ？」

「私があるのは君ではない・・・この世界の住人だ」

そして勝手に語りだす敵。

「この世界の住人を殺せば、この世界は変わる。パーツを失った機械のように空回りし続けるだろう。そして連鎖的に多数の次元世界のバランスが狂いそして・・・」

「だから？」

「ようするにそこを退いてもらえたらお前は死ななくて済むというわけだ」

「なるほど」

・・・ヤバい、俺たぶん笑ってる。

「ようするに死にたくないんでどうか私たちを逃がしてくださいと、言うことかな？」

「・・・退いてはくれないのか」

「さてさて、読者のみなさん俺がそんな奴に見えますかな？見える  
と思ったやつは『超電磁砲<sup>レールガン</sup>な」

《何言ってるんですか？》

「なら仕方ない・・・殺させてもらうがその前に・・・貴様なぜ魔  
術を使わない」

「・・・・・・・・」

あゝ、ヤバいたぶん笑みが引きつった

「今まですべてと言っていいくらい超能力もしくは道具などで戦っ  
ている。これについて仮説を立てるとすれば二つ。一つ目は手加減  
をしてる場合だ。おそらくシャドウは・・・もともとは人間とでも  
考えてるんじゃないか？それは当たりだ。人の体や魂を使い作って  
ある。これが最も力を少なくそれでいて大量のシャドウが作れるか  
らな」

確かにそういう考え方もできなくはない。だが

「しかし、それだとなぜ超能力などはよくて魔術はダメとなるのか  
が分からない。そこで考えたのが二つ目だ」

俺の顔も見ずに話し続ける。

「君は魔術を使えないのじゃないかね？超能力が使えるから、  
または生命力が足りないなど・・・」

そつだ、その生命力が問題だ・・・

「ようするに、君は超能力やほかの道具でしか戦えないということだ」

頭がピリピリする。AIMジャマーでも使ってるのか・・・

「まあ、この推理は今から試させてもらおう」

なんでだろ・・・

「やれ」

周りに指示を出してる。  
なんで・・・

「さて・・・何分持つかな？」

こつも“思った通り”になるかな。

「な!？」

三人称 side

敵が驚いてる。他のも知性があるのか驚いたように止まってる。  
その視線の先にあるのは・・・

「ククク・・・」

当麻の口が裂けそうなくらいの笑み。  
そして

「やっぱり、とことん持ち上げて最後に突き落とすのは面白いよな」

「な、なぜ!？」

「いや、その顔を、見るために今まで笑うの我慢してたんだぜ」

「なぜ、魔術が・・・」

『イノケンティウス魔女狩りの王』がいる。

もつとも、それは巨大で首を上げねば全容は確認きないだろう。

「しかも無詠唱だと!？」

「お!気づいてくれた?あの時驚いた振りするの大変だったぜ、それにこうでもしないとデカくなるからな・・・まったく俺生マナ命力多すぎだろ。あと後ろ見てみな」

そこで、後ろを向く敵。もう全く余裕がない。

「・・・まさか!？」

「全部倒したぜ、超能力でな」

本当に真つ黒な笑顔でそれを告げる。

数十対居たであろう駆動鎧のほとんどが無残な姿になっていた。そして、そこには蠢く砂鉄がある。

「そんな!?! AIMジャマーが・・・」

「どの能力を邪魔したわけ？」

「まさか・・・」

「意外と電気系能力はあるんだぜ」

結論を言えば当麻はA I M ジャマーで邪魔されている能力以外を使  
って砂鉄をあやつった。

「似た能力はあっても同じ能力はないしな」

「ウソだ・・・だが！」

「なのは達の所のシャドウなら知ってるぞ。」

「な！？」

「だからさ・・・結局お前は無駄なわけ。お分かり？」

「・・・だが！」

「お前は本体じゃないんだろ。知ってるさ、ついでは言えばお前は  
知性を持たされたただのシャドウだったのも、お前はあの時の神じ  
やないってのも、さっきのシャドウの話が全部ウソってことも」

「なぜそこまで！？やれ！早く奴を・・・」

「お前はここで消えるってことも」

自分を神と偽っていたシャドウがほかのシャドウに指令を出す。  
しかしその前に当麻が左腕を振るう。

その動きに従うように砂鉄の剣が動く、『イノケンティウス魔女狩りの王』が剣をふるう。

その二つの攻撃によってシャドウ達はちりも残さず一気に消滅させられる。

しかし、当麻はそれを見ていない。まったく違う方向そこには・・・

「・・・無事でいろよ。なのは、フェイト」

違う戦いが繰り広げられていた。

なのはside

私はジュエルシードが発動したのを感じてここに来ただけ・・・

「あゝら、あらあらあら」

「あなたは！」

「子供はいい子でって言わなかったっけか？」

「・・・？」

言われたのかな？聞いた覚えがないんだけど・・・

「あ！当麻に会ったから言いそこなっただんだ！」

「・・・」

「・・・アルフ」

・・・この前会った女の子がちょっと怒ったようにアルフ？っていう女の人を見てる。  
それより今確か・・・

「当麻って言った？」

「なんだい、知り合い・・・そういえば一緒に居たね」

「・・・アルフ」

今度は残念な子を見るような目でアルフ？って言う人を女の子が見つめている。

・・・思ったより怖くはなさそうだ。  
ってそうじゃなくて！

「当麻君の事どんな風に思ってるの!」

《マスターそれも違うと思います・・・》

レイジングハートそれは違うの!これにも立派な考えがあるんだよ!  
決して、当麻君の周りの女の子のことを知って有利になるうなんて・  
・

すると、目の前の女の子は見るからに赤くなって・・・

「と、当麻の事は・・・／／／」

「おやフェイト、顔が真っ赤だよ。どうしたんだい」

「うるさいうるさいうるさい!!／／／」

・・・なんか可愛らしいの。

これは強敵なんて思っている

「うわ・・・なんか場違い・・・」

「誰!？」

「ほへ？」

男の子の声が聞こえてそつちを見る私と女の子。  
そこには・・・

「・・・誰？」

黒いフードつきのマントで身を隠した私の知らない男の子がいた。  
女の子の方を見ても警戒してることから知らない相手なのだろう。

「知らないのも無理はない。上条当麻が隠していたからな。高町なのは、フェイト・テストアロツサ」

「！？なんで名前を！」

「え〜と、初対面ですよね？」

「ああ、初対面さ。そして・・・」

マントの中から手を出す。そこには

「もう会う事は無いだろう」

黒光りする大きな拳銃が握られていた。  
そして、そのまま引き金を引こうとする。

「『『『な!?!』』」

全員が驚き避けようとする。

けれど私は間に合わなくて撃たれる・・・そう思ったけど、

「・・・駄目だな」

そう呟いたと思うといきなり身をひるがえす。  
するとさっきまで、男の子が居た場所に

「キャア!」

「これは・・・魔法?」

火柱が立ち上がる。それはまるで男の子を追うように次々と出てくる。

けれど男の子は全部軽やかに倒していく。

「さてと、ために攻めてみたが、彼は君たちを殺されたくないらしい・・・」

すると、火柱の形がまた変わった。  
今度は大きな剣を持った炎の怪物が現れた。

「だからさようなら」

そう言った瞬間男の子は炎の怪物に飲み込まれた。  
後に残ったのは炎の怪物だけだった。

「あれは・・・いったい？」

「分からないね。でも強そうなのと今は襲ってこなそうなのは確かだよ」

「・・・帰ろうアルフ」

「そうだね。私たちまでやられたら敵わないしね」

そう言って帰ろうとする女の子たち。

「待つて！貴方たちは・・・」

「なんでジュエルシードを集めてるの？」

忘れそうになったけど、もともとここに来たのはジュエルシードの反応がしたから。

けど無いということは、この二人が持つてるかもしれないということだ……

「言えない」

「じゃあ名前だけでも教えて！」

「フェイト、フェイト・テストロッサ」

「あの、私は……」

「いい、私の前に現れないならそれで」

そう言っ飛ぶフェイトと名乗った女の子。

それに続いてアルフという女の人も飛んでいく。

二人とどんどん距離が離れていく。

それでも私はフェイトと名乗った女の子の深くてきれいな瞳が頭から離れなかった。

フェイト side

なぜだろう、あの子を見てるとつい話しそうになる。  
純真無垢な何も知らない瞳。

当麻もそうだ。  
けど・・・

「駄目なんだ・・・」

私は、頑張らないと。  
お母さんのために、お母さんが喜んでくれるように。  
そのためには、

「・・・当麻も裏切らないといけないのかな」

たとえそうでも、

「頑張らなくちゃ」

お母さんのために。

当麻 side

はあ・・・

「大丈夫だといいな」

《大丈夫ですよ》

何がつてそりゃ・・・

「イノケンティウス魔女狩りの王があゝ」

おそらく今頃、なのはとフェイトたちが居る場所にいるだろう。  
なんで知ってるかって？  
そりゃあ

「俺が出したしなあゝ」

《当たってません》

・  
「ここら辺の地形を思いだし無理やり『レポート空間転移』で送り込んだが・・・

「問題はなのはたちの場所だよなあゝ」

《下手したら直撃ですしね》

「まあよけてると思うけど」

設定は自動操縦だし何らかの攻撃行動をとってなければ大丈夫なはずだけど・・・

「それより問題は」

《なのはさんたちが狙われたことですね》

敵の狙いはなんだかわからないが用は・・・

「本気で頑張るしかないかな・・・」

《あるいはアイアン・・・春樹さん特製スーツを》

「・・・それはパス」

まあ、なんでもいいけど・・・

「そろそろ、探すか」

《何をですか？》

決まってる。

「ここで言ったらネタバレだ」

《分かりました、いい医者ですね》

「頭はおかしくなってるねえよ！」

《え！？》

「そんな驚かれても困るんだが・・・」

第二十六話「驚愕の真実（笑）」と少年が交差するとき（後書き）

あとがきコーナ―

当「無理やりだな」

作「分かってる。けど私じゃこの程度が限界」

当「しかし、俺今まで魔術使って無かったんだな、忘れてたぜ」

作「聖人の力なら少し使ったけどね」

当「でなのはとフェイトを襲ったやつだが・・・」

作「あっちが本体」

当「ふん」

作「龍賀さん感想ありがとうございました」

当「次回俺探し物するらしいけど？」

作「当麻は出ません」

当「へえ、まあいいや」

作「それではまた次回！」



第二十七話「敵と少女たちが交差するとき」(前書き)

当「はいやってきました、主人公の俺が出ない回」

まさか怒って・・・

当「やったー！サボれる！」

ないね。

当「平和が一番だ」

・・・本編へどうぞ。

## 第二十七話「敵と少女たちが交差するとき」

なのはside

この前、みんなで温泉に行った日から・・・当麻君が消えたの。  
表向きは家族との旅行らしいけど、あの当麻君が私に何も告げずに  
行くのはおかしい。  
それに・・・

「ミサ力を置いていくなんて」

《どうしましたなのはさん？》

「・・・うつん」

いつの間にか私の部屋に置いてあったの。

そこには当麻君の字で「ミサ力を頼む、心配するな」って書き置き  
が残ってた。

心配だけ・・・

「心配するなって書いてあるしね・・・」

《マスターは信じて待っていていればいいと私は思います》

《まあ、心配するなって方が無理でしょうけど》

レイジングハートの言うとおりだ。  
信じて待とう。

きつとそのうち・・・

「帰ってくるよね」

《さあ》

《そこは肯定するべきでは？》

《マスターは優柔不断ですからね》

否定は・・・

「出来ないかも」

フエイトside

今私は家の自分の部屋にいる。

思い出すのは・・・

「当麻・・・」

いつの間にか分からないけど書き置きがあった。

それには「俺は遠出する、黒いマントの奴に気負つけろ」と書いてあった。

黒いマントの奴とは、十中八九この前のだろう。

ちゃんと戦っていないからわからないがあの人・・・

「強い」

予備動作もなく動いた上に瞬間的には私のスピードと同じくらいだった。

なら負けるか、それは分からない。

あくまで瞬間的であつてずっとではない。

それに私にはアルフがいる。

すると・・・

「フエイトー、ご飯だよー」

「うん」

当麻が置いて行ったのは書き置きだけじゃなかった。

それは・・・

「今日は、カレーだよ!」

「うん」

数日分のご飯だった。

電子レンジでチンすればすぐに食べれるようになっていた。  
そのおかげで簡単に食べれてとてもありがたい。

「今夜もジュエルシードを探しに行くのかい？」

「・・・うん、お母さんとの約束だし」

「まあアタシはフエイトが行くところに行くんだけどね」

・・・当麻の料理も、アルフの気遣いもホントにありがたい。

「アルフ、ありがとう」

けど、ここでやめれない。  
お母さんのために・・・

「頑張らなくちゃ」

三人称 side

場面、時間、すべてが変わり今は夜。

ジュエルシードを取り合う少女たちがそこにいた。

「こないだは自己紹介できなかったけど、私はなのは、高町なのは」

なのはは自分の名前を相手に伝えるも返ってきたのは・・・

《サイスフォーム》

戦いを始めようとする音だった。

そして、フェイトがなのはに飛びかかる、が

「な!？」

「あなたは!」

二人の間に飛び込んできた黒いマントを着た人、おそらく前回二人に襲いかかってきたのと同じ人物がそれをさせなかった。

「残念、ジュエルシードは私のだ」

そう言いながらマントから手を出そうとする。  
すると、

「距離をとらなくちゃ!」

「至近距離に入れば!」

前回のようには銃器を出さなかった二人。

なのはは距離をとって避けようと、フェイトは接近して撃たれる前に倒そうとした。

だが

「考えて行動するんだな、そうでないと・・・」

出てきたのは銃器ではなく

「死ぬぞ」

真赤な剣でつた。

「！」

「フェイトちゃん！」

思惑が外れ止まった体を剣が狙うが間一髪避ける。だが

「射程距離」

「！？」

《プロテクション》

振られた跡にそうように放たれた攻撃。

それはほとんど奇跡としか言えないタイミングでバルディッシュがプロテクションを張る。

「デイベインバスター！」

そこでなのはの砲撃が飛び両者は引き離される。  
なのはの横まで後退するフェイト。

「・・・なんで助けたの」

「理由なんている？私が助けたかったから助けた、それだけだよ」

「・・・」

「ジュエルシードを集める理由もそう。ユーノ君が、町の人困るから、だから助けたいそう思ったから集めてるの」

「私は・・・」

「いいよ、今は言わなくても言えるときになったら教えて、それに」

そこでマントの人物を見るなのは、

「今は一緒にあの人を倒そう」

「・・・うん」

「話は済んだか」

そしてまた振るわれる剣、しかし今度は斬撃を距離があつたため余裕を持ってかわす。

「さて、貴様らはどこまで楽しませてくれる？」

「貴方は！」

「私たちが倒す！」

そして、フェイトが前、なのはが後ろに下がる。

「それでいいのか」

「レイジングハート！」

《ディバインシューター》

なのはが四発の魔力弾を打ち出す。

「だがこれは囷、本命は後ろの一発か？」

しかし、前方から来た魔力弾は斬り落とし、死角の背後から来た魔力

弾も避ける。

「で、この後はどうするんだ？」

余裕の声音で言う謎の人物、しかし

「あなたの相手は私だけじゃないよ」

「そう言う事か・・・」

なのはの言葉と同時にフェイトが真下から攻撃を仕掛ける。  
しかし、その攻撃すら避ける。

「さて、裏をかいだつもりかもしれないが本命の攻撃は避けさせてもらったぞ」

「あなたの相手は私たち」

「デイベイン・・・」

なのはの誘導弾、その死角からの攻撃、さらにフェイトの攻撃。  
もしそれらがすべて<sup>④</sup>だったら・・・

「バスター!!」

完全に攻撃が終わったと思ったところからの一撃。

普通の相手なら避けきれないだろう、謎の人物も避けなかった、いや

「ゼロにする」

避けなかった。

そのまま、魔力の本流に巻き込まれた。そして出てきたのは・・・

「ウソ・・・」

「無傷なんて・・・」

汚れひとつない謎の人物だった。

会心に一撃だったのに避けられた、その驚きで二人が固まっていると・・・

「予想以上だ。初めて組んだ相手とここまで出来るとは・・・今回はこれで終了だ」

そしてまたマントの中に手を入れ出す、その手には

「ジュエルシード!？」

「確かあそこに・・・」

「いい物をやる。先ほどの一個と私が手に入れた一個、これを二人に渡そう」

「え？」

「あなたもジュエルシードを狙ってたんじゃ・・・」

「一言も私は言って・・・たか。まあいい、今日はもう帰ったが身のためだ。まだ取り合うというなら・・・私が本気で相手になつてやる」

そう言つとジュエルシードを二人へ投げ渡し、そして

「上条当麻によろしく伝えておいてくれ」

消えた。

そしてジュエルシードを受け取ったフェイトは踵を返す。

「フェイトちゃん!」

「今日は、もう帰る。けど次会ったら・・・」

「ジュエルシードを貰う？」

「うん」

「・・・私もただじゃ渡さないから」

「行くよアルフ」

「ちょっと待ってくれよフェイト！」

下の方には縛られたアルフとユーノ。  
動けなかったために戦闘に未介入だったのだろう。

「じゃあね、フェイトちゃん」

「・・・バイバイ」

そう言って帰るフェイトとアルフ。後に残ったのは

「よし」

決意の表情をしたのはと

「助けてなのは！」

縛られたフェレットだった。

??? side

「二組の搜索者の戦闘停止しました」

「ただし再度衝突する可能性は高いですね」

確か魔法ではない、違う力を観測したと聞いたけど・・・

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと」

「分かってますよ艦長」

リンディさんたちが話してる。

確か地球にはあの子たちが居た筈だ・・・楽しみだな。

「あなたもお願いね・・・さん」

「はい！」

「ずいぶん機嫌がいいな」

「色々ありまして・・・」

だって、久しぶりに帰れるし、それに・・・

「友達に会えるしね」

「ふん」

早く着かないかな。

第二十七話「敵と少女たちが交差するとき」(後書き)

あとがきコーナー

当「おい」

はい

当「平和じゃないぞ！」

平和って言って無いぞ！

春「また出たねあの敵」

能力は当麻と同じ感じっぽいね

当「・・・・・・・・」

春「どうした？」

当「いや『超電磁砲』撃ってから『一方通行』の反射をお互いしたらどうなるかなって」

何考えてんだか

春「最後にまた変な人でたね」

正体は次々回

当「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました」

当麻、終わったら春樹から離れないと

当「そうだな」

春「え、なに？」

お前の判断力のせいだから

春「僕の馬鹿！」

当「この作品にオリキャラは三人もいらねえ」

春「本編からも消えるの！？」

当作「「ではまた次回！」」

春「ウソだー！」

第二十八話「少女たちと敵と管理局が交差するとき」(前書き)

最初に言っておく、当麻はかゝなり運が悪い。

当「・・・言っな

では本編へどうぞ。

## 第二十八話「少女たちと敵と管理局が交差するとき」

フエイトside

「たったの四つ・・・」

今目の前にプレシア・テストロツサ、私のお母さんがいる。

アルフと母さんの所に来てジュエルシードを渡したところだけど・

・

「これは・・・あまりにも酷いわ」

「はい・・・」

「けど、仕方ないわ。イレギュラーが多かったもの。確かおかしな力を使う人がいるとか」

「当麻の事ですか？」

「そうね、だからこちらも・・・」

そう言って自分の後ろが見えるように体を動かす母さん。そこには

「やあ、しぎげんよう」

「あなたは！」

「おっと、最初に会ったときは謝るよ。今は君に危害は加えないから」

マントを被った謎の人物がいた。

「これからは彼にも手伝ってもらおう」

「えっ、母さんこの人は・・・」

「フェイト、二度は言わないわよ」

そう言って私を見つめる母さん。  
けどその眼は

何も映っていないかった。

何かあったのかと尋ねる前にさっきの謎の人物が

「さてフェイト・テストロツサ、ジュエルシード集めに協力したいかどうかすればいい？」

と尋ねてきた。

しかし、前回目の前の人物はあの女の子にもジュエルシードを渡したを思い出した。

「・・・あの女の子に渡した分を取り返してきてください」

自分がいいようにあしらわれた八つ当たりだったのかもしれない。しかし

「私はジュエルシードなど集めたことはない」

そう返ってきた。

「え、そんな・・・この前確かに・・・」

「・・・ハッハッハ！嵌められたな。なるほど目的は知らないが悪い手じゃないな」

「なんのことですか・・・？」

「気にするな、では退散させてもらおう。わが名は・・・スプリング、春先にはちょうどいい名前度だろう」

そう言って忽然と姿を消す謎の人物・・・スプリング。  
彼はいったい何者だろう・・・

強者が弱者か、味方が敵か、善人が悪人か  
それを知るすべは今の私にはなかった。

三人称 s i d e

今現在、一人は母のため、一人は相手に自分の気持ちを知ってもら  
うため戦いが始まるうとしていた。  
そして始まる戦い、お互いがぶつかり合う、その時

「ストップだ！」

その間に割って入るように出てきた人影、それにお互いのデバイス  
の動きを阻まれ動きが止まった。

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオ  
ンだ。

背丈はなのはたちと変わらぬ少年が言い放つ。

「詳しい事情を聴かせてもらおうか」

緊迫した空気、誰も動けなかった。

「まずは二人とも武器をひくんだ」

そう少年・・・クロノは言い、二人のデバイスを持ったまま地上に降りようとする。  
だが

「それは聞けないな」

「な!?!」

いつの間にか現れたマントを身に着けたスプリングらしき人物がクロノの上に突如出現する。

「一体どうやって!」

自分の気づかないうちに接近されたことに驚き、声を荒げるが

「答える義理などない」

そう言いながらマントから手を出そうとするスプリング。  
しかし、クロノもそれに気づく。

「何をする気が知らないが！」

スプリングに自分のデバイスを向け魔力弾を打つ、が

「ゼロにする」

前回と同様の言葉をつぶやき、そして魔力弾を受けるうける。  
攻撃によって起きた煙の向こう側には

「まだ何もしていない相手に魔法を使う。それが管理局とやらのやり方か」

無傷の状態で言うスプリングがいた。

「く・・・」

クロノも痛いところわつかれたといわんばかりに顔をしかめる。

「それにだ、聞いた話によるとここは管理外世界。そんなところで管理局とやらの威光を見せ付けられるのがおかしいんじゃないか？」

「確かにそうだが・・・」

「ジュエルシードは危険だから放っておけないと言っても言う気か？その心意気は買う。だがそんな言葉は私より強いことを証明してから言うんだな」

「なら・・・」

そう言ってデバイスを向けるクロノ。  
手を向けるスプリング。

先に動いたのは・・・どちらでもなかった。  
スプリングの体にバインドがまかれる。

「バインド？だがこんなもの」とまぐくん！！」その声グベラバ  
！！」

「「「・・・え！？」」」

「・・・遅いぞ夏実<sup>なつみ</sup>」

一瞬と言っていい出来事だった。  
バインドに気づいたスプリングが行動を起こそうとした所にまた謎

の、今度は女の子が突入してきた。

スプリングの脇腹に

それだけで驚きというものだが、次の事にはさらに驚いた。  
横腹を打たれた衝撃でマントが外れる。そこには、

「当麻君!？」「当麻!？」

上条当麻がいた。

《まったく、マスターに変装は向いていませんね》

驚くのはたちを置いてミサカが話しかけるが・・・

「ちょっと・・・まって・・・ヤバイ」

《・・・何をしてるんですか夏実さん》

「え、あ、ワザとじゃないんです!」

《じゃあ仕方ないですね》

「そっなんですかね?」

「ハアハア・・・覚えてろ」

いい感じで入ったのか、当麻は息も絶え絶えな様子。  
そんな当麻を無視し話を進めるクロノ。

「その君たち、大人しく着いてくるんだ」

「フェイト逃げるよ!」

「アルフ!」

自分たちが不利なことに気づいたのかフェイトとアルフが逃げようとする。

「させると思つて「悪いがさせてもらう」チツ、夏実止める!」

「はい、分かりました!」

それを止めようとしたクロノを当麻が止めようとするが、それも夏実と呼ばれた少女にバインドで止められる。だが

「悪いフェイト、『ムーブポイント座標移動』!」

「え!?!」

超能力を使いフェイトを逃がす。

「・・・やってくれたな」

「じゃあ代わりに俺を案内してもらおうか、お前の上官の所に」

「犯罪者を会わせるわけ」「いいですよ」・・・夏実、話の腰を折るな」

「でも、リンディさんが良いって」

「じゃあ、案内頼む」

「うん」

「・・・艦長はいつたい何を考えてるんだ」

やることが決まった当麻達、だが

「当麻君、私は？」

話について来れなかったなのはが指示を求める。

「ついてこないのか？」

「行く！」

「じゃあ行くぞ」

こうして四人は艦長という人物がいる次元航行艦【アースラ】に乗り込むのであった。

「僕は!？」

・・・失礼、四人と一匹でした。

第二十八話「少女たちと敵と管理局が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー

当「最近思っんだ・・・俺って変装する能力が低いのかな？」

作ミ夏「《「今更ですか？」》」

当「グレテやる！」

作「どうぞ」

ミ《夕飯までには帰るんですよ》

夏「お土産はいいですからね」

当「うわー！！」（逃走）

作「・・・やり過ぎた？」

夏「ですかね？」

ミ《さあ、夏実さんの紹介でもしますか》

夏作「「罪悪感の欠片もなし！？」」

ミ《マスターの事は何でも分かりますからね。そのうち帰ってきてますよ・・・血だらけで》

夏作「「何があつた！？（んですか！？）」」

ミ《夏実さんの容姿は金髪で少し青っぽい瞳です》

ミ《龍賀さん、天照大神さん感想ありがとうございました》

作「龍賀さんがコラボを書いてくださいました！」「テンプレな転生  
強き信念持ちし者」をぜひチェックです！！」

作ミ「《ではまた次回！》」

第二十九話「少年たちと管理局が交差するとき」(前書き)

ホントタイトルって難しい。

当「全部一緒にしか見えないもんな」

他の作者さんはスゴイな。

当「当然だな」

では本編へどうぞ

## 第二十九話「少年たちと管理局が交差するとき」

当麻 side

現在俺は【アースラ】とやらに乗り込んでる。  
そんで

「君の能力は一体何なんだ？」

「超能力」

「・・・信じる信じないは別として、他にも種類はあるのか？」

「色々な、見るか？」

「ぜひ頼む」

クロノと仲良くしてた。仲良きことは美しきかな。

・・・え、前回あんなことがあったのになんでかって？  
それは

『生で会つのは初めてだな』

『さっきは助かった。演技ご苦労さん』

『気にするな。それより約束は?』

『ちゃんと守る』

これだけ言っても分からないだろう。

簡単に言々と俺とクロノは知り合いで、交換条件を出してフェイトの逃走を手助けしてもらった。  
なぜ知り合いか、それは

「エヘヘ!」

「夏実さん、人の頭に薄いむイタイ!俺は本当のことを「明日は何ごみの日でしたっけ?」すみませんでした!」

「世の中には言っちゃいけないこともあるんですよ」

「人の頭を抱きしめて潰すのはやっちゃいけないことだと思っんですが・・・」

「そうですね」

この夏実さんのおかげだ。夏実さん実は名字が吉井、これで分かるかな。そう春樹の姉なのだ。

なんかよく知らないけどアースラにいるらしいと聞いたから連絡とって協力要請。

ついでにクロノとも知り合った。そんなかんじである。

そうこうしている内に艦長さんがいる部屋に着く。・・・ユーノッ

て人間みたいになれたんだ。

「じゃあ私はここで」

ここで、夏実さん退場。

「艦長、来てもらいました」

そして部屋を覗くのだが・・・

「うわ・・・」

「スゴイ・・・」

どこの日本庭園だ！と言いたくなる装い。・・・何がしたいんだ？  
この後あった話はユーノへのアメと鞭？とロストログアの説明、それと

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権をもちます」

「「えっ？」」

「君たちは今回の事を忘れて、それぞれの世界へ戻って元通りに暮らすといい」

「でも、そんな・・・」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

「でも！」

「まあ急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩、ゆっくり帰って考えて三人で話し合って、それから改めてお話しよ」

うーん、折角だしここは・・・なのはの意見を尊重するか。

『なのは、お前はどうしたい？』

『え、当麻君？』

『ここで止めるか、フェイトと・・・』

『お話ししたい！』

よし、それなら

「リンディさん、クロノ」

「はい？」 「なんだ？」

「あなたたちに俺たちは協力します」

「ですから、一回帰ってゆつくりと・・・」

「喜ぶべきと思いますよ。魔力の多い子に結界などが得意な子、さらに特殊な『希少技能』<sup>レアスキル</sup>持ちが戦力として使えるんですからね」

「・・・」

「？」

リンディさんは困ったような見破られたかと残念がるような顔。クロノは少しだけバツが悪そうな顔。

なのはとユーノは何のことか分からないといった顔をしている。

「自分を責める必要はありません。俺たちは進んで協力しようとしてるんですから」

「お見通しみたいね」

「悪気はないということも」

簡単な話だ。普通偉い組織が事件にかかわらせたくないなら、関わ

るなど言ってしまうえば済むことだ。

それをリンディさんは、あたかも協力したいと頼めばさせてくれそうない方をした。

民間人に介入してもらうレベルの話ではないのだ。  
ということとは

『戦力が欲しい・・・人材不足ですか？』

『まあ、概ね当たりです』

リンディさんが念話で正解と言ってくる。

『もちろん危険な目に合わせないように・・・』

『大丈夫ですよ。俺もなのはもそのくらいじゃ止めませんから』

『・・・ならお願いできますか？』

『交渉成立のようで』

『クロノ、そちらの方達を送ってさしあげて』

『分かりました艦長』

『え？』

何だなのは？どうしてそんないつの間にみたいな顔を・・・念話で話したから内容が分からないのか。

「なのは、安心しろ。お前は正式にこの事件の協力者だ」

「え、あ、うん」

「俺はもう少し用があるから帰れないが帰って「当麻君」・・・ん？」

「あの、その」

何だ？歯切れが悪いぞ。少し怖がつてるし。

「どうした？」

「え〜と・・・何で私とフェイトちゃんを攻撃したの？」

「あ」

忘れてた。そりゃあオドオドするな。

「・・・なに、簡単なお節介だよ」

「どういう事？」

怯えたような、不安そうな顔で言うてくる。

「なのはとフェイトが同じ敵を持って仲良くなるようにな」

俺は、敵対した相手と簡単に仲良くなれるとは思わない。

しかしなのははフェイトと仲良くしたい。

なら共通の敵をもたせて協力すればいい、そう考えた。

「ただ、そんな事しなくてもなのはがフェイトと仲良くなろうと思えば、フェイトと仲良くなれるさ」

それに・・・

目の前には友達に攻撃され裏切られたかと思っていたであろう少女。こんな顔されるくらいなら・・・

「土下座でもして仲良くなってもらうさ」

「？」

「今は気にするな」

「うん」

そう言つて、安心して笑ってくれるのは。  
その頭を撫でてやる。

「君達、準備が整つたらしい」

クロノが呼びに来る。

だから手を放そうとすると、その手を掴まれた。

「ん？」

「ねえ当麻君」

まだ不安なのかと思っていると

グギユウウウ

「・・・なのはサン？腕がすごく痛いんですが」

「あの女の人是谁かな・・・」

「え、女の人？」

「さっき抱き着いてきてた人だよ・・・」

「・・・友達イイイいつてえ！」

「本当に・・・？」

「ほ、ホントホント！」

「そう、ならじゃあね、当麻君！」

さつきまでの剣幕が嘘のように笑顔で手を振るのは。

「・・・女性というのは恐ろしいんだな」

「ああ」

クロノと事実を再確認するのであった。

「さてと、苦勞してもこんなもんか」

そこは【アースラ】の普段ならだれも使わない部屋。しかし今は一人の客を迎えていた。

「もうちょっと深く探るか？」

《とりあえずはこれでいいのではないでしょうか》

そう言う当麻の手に有ったのは小型の端末。  
言葉からおそらく何かを探していたのだろう。

「このデータと」

《マスターの力が鍵ですね》

「ああ」

何を話しているのかは分からない。  
ただ言えるのは

「もう寝ていい？」

《ちゃんと宿題してから寝なさいって言ったでしょう！》

「どこの親だよ！」

そこまで切羽詰まっていないうことだろうか？

第二十九話「少年たちと管理局が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー？

当「なぜに疑問？」

さあ

当「今回は大した事は何もなかったな」

なのはに怒られるのは大したことじゃないんだ。

当「まあ、そこまでは・・・」

あ、なのは。

当「『アクセラレータ一方通行』『ダークマター未元物質』発動！」

そこまでやること！？

当「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました！」

ではまた次回！・・・そろそろバトルさせたい。

当「平和が一番」



第三十話「能力と少年が交差するとき」(前書き)

作「正直言います、見なくていいです!」

当「じゃあなぜ書いた!？」

作「・・・若さゆえの過ち？」

当「・・・・・・・・」

作「・・・ホントなんで書いたんだろう？」

当「知るか」

### 第三十話「能力と少年が交差するとき」

当麻 side

次の日になるのは、ユーノをよんでアースラのメンバーに自己紹介した。

それで、これからの方針をリンディさん、夏実さんと一緒に考えてたんだが・・・

『ヤバい吐きそう!』

『当麻頑張って!』

『・・・夏実さんは何とも思わないんですか?』

『もう慣れちゃった』

お茶に砂糖って・・・。なのはと夏実さんは仲良くなったようで何よりだ。

『ミルクまで!?!』

『私も駄目かも・・・』

『当麻君、なのはちゃん頑張つて!』

誰かリンディさんを止める!

「この黒い服の子、フェイトって言ったけ?」

「そうそう、フェイト、フェイト・テストロッサ」

「かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

今はディスプレイの前に俺、クロノ、エイミィさんでいる。  
探してるのはフェイトの情報。

普通は教えるべきじゃないんだろうが・・・

「そして・・・亡くなった娘そっくりだ」

「・・・どういうことだ?」

「ここから先は契約してくれないとな」

「・・・分かっている」

もともと俺は一人でジュエルシードを探してもよかった。だがしなかった。それは

「フエイト・テストロッサの身柄の安全、並びに罪を軽くする。これが契約の内容でいいか？」

「・・・まあいいさ。破ったら殺すからな」

「・・・勘弁してくれ」

フエイトの罪だ。いくら母親のためとはいえ、今回の事は罪に問われるだろう。

もちろん最大限の擁護はするが無理な場面もあるだろう。

だから、情報の提供並びに戦力の提供で少しでも罪を軽くさせようとした。

もし無理だったら・・・この船沈めて何もなかったことにするか？

「今サラツと怖い事を言われた気がするんだが」

「気のせい気のせい」

自分の目的を再確認していると

「うーん、やっぱりテストロッサの情報はあんまり出てこないな」

「なぜ？」

「たぶん本局で観れないようにしてあるんだと思うけど」

エイミイさんが困った声を出していた。

「ならちよつと駄目な方法で」

そう言っただけはどこからともなく自分の端末を取り出しつなぐ。そして・・・

「びりつとな」

電気を流す、さらに、

「ミサカ、今まで仕入れた情報を」

《分かりました》

次々と今まで色々な方法で集めた情報をだし、  
チャッカリハッキングした本局のデータベースからの物も出す。  
結果

「わっ、スゴイ！これどうやって手に入れたの？」

「企業秘密です」

「・・・本当に何者なんだ君は？」

続々探していたデータを見つけて喜ぶエイミーさん。  
俺を疑うクロノ。

俺が何者か？それは・・・

「さあ、何者なんだろうね？」

「さあって・・・」

俺って記憶喪失だもん。最近は気にしてないけど。

「あれ？ここおかしくない？」

エイミーさんが見つけたのは意図的に隠した情報。目ざといな。

「これは・・・あんまし言いたくないんだけどな」

「大丈夫だ。僕もエイミイも口は堅い。言ってくれて構わない」

「えっ、何？そんな重大なことなの？」

「じゃあ最初に言っておく・・・俺は管理局を信用しない」

二人が驚いた顔をしてる。

「ちょっと待て！なんでだ！なんで——」

「だがクロノ・ハラオン、エイミイ・リミエッタ、他にもこの艦の人たちは信用してる」

「・・・つまり管理局に問題が？」

「理解が早くて助かる。ミサカ『インデックス世界の目録』起動」

《合言葉は？》

「今はシリアスなんだが」

《・・・キーワードを入力してください》

この能力、利点はキーワードを詳しくすればするほど詳しくデータが出る。

俺はミサ力をきちんと掛けて開始する。

「キーワードはフェイト・テストロッサ、プレシア・テストロッサ、アリシア・テストロッサそして・・・」

二人の目には俺がただ突っ立って手を動かしてるだけに見えるだろうが、実は違う。

今も俺の目には様々なデータが載っている。そこから必要、不必要を分けている。

最後に入れるキーワードは・・・

「プロジェクトF・A・T・E」

そして

《検索終了》

「あゝ目がちかちかする。ミサ力、端末にデータを移動」

《分かりました》

俺がさっきまで見ていた端末にデータを送り二人に渡す。

「これは口外禁止だ」

そう言つて俺は通路に出る。そして

「今のでどうだった？」

《脳の記憶領域破損。現在『オートリパリス肉体再生』を用い破損部分再生中》  
「そうか・・・」

ミサカが真面目な話し方をしているのならそれはまじめな話だ。  
この俺の能力『インデックス世界の目録』は簡単に言えば無理やり記憶を呼び出す能力だ。

俺はこの世界に来る前にさまざまな情報を誰かに教えてもらつたらしい。

それが記憶として頭の中にあるから、  
ミサカを介して自分の探してる情報を見つける、思い出してるってわけだ。

要するに本棚ノウからみたい本を出してるってわけ。  
ただデメリットも大きいそれが脳の破損。

記憶領域の奥深くにある記憶を無理やり取り出そうとして・・・本棚から本を無理やり出して本棚が壊れるってわけだ。さらに・・・

《最終チェックです、私は誰でしょう》

「ミサカ」

《マスターの男友達は？》

「春樹」

《その親族の名は？》

「姉の夏実。それ以外の家族の本名は知らん」

《マスターの事が好きな人は？》

「いない」

《・・・間違ってるけど正解です》

「間違ってるってどゆこと？」

使用後はこの確認が必要になる。

手元に本を置いたらどんどん奥の本がとりづらくなる、それと同じで記憶が思い出しにくくなっている。

下手したら、

《神様の姿は？》

「・・・・・・・・」

《・・・ここが消えてしまってるようですね》

本を完全<sup>キオク</sup>に無くしてしまうかもしれない。  
正直神の記憶はもうほとんどなくなった。恰好、人相、性格など思  
い出せない。

《まあ、あの人の恰好はコロコロ変わるんで気にしないでいいです》

「・・・そうか」

それでも嫌だ。いつ誰の記憶が消えるかわかったもんじゃない。  
でも使わないと・・・

「データが見つからない・・・」

《管理局の隠蔽技術には恐れ入ります》

前探したら肝心なところが隠されていて、結局何も見つからなかつ  
た。

そこで『<sup>インデックス</sup>世界の目録』との併用でどうにかしてるといったところだ。  
だが・・・俺は次誰を忘れる？

なのは？フェイト？アリサ？すずか？アルフ？ユーノ？クロノ？エ  
イミイ？

他にも春樹、夏実さん、ミサカだって・・・

そこで俺の考えを読んだようにミサカが話しかけてくる。

《さすがマスター、悩んでらっしゃる。気にするなとは言いませんけど考えすぎても後がつらいですよ》

「そうだな・・・」

《貴方は世界を救わないといけないんですよ。小を捨て大を捨わないと》

「だから記憶や・・・あいつ等との思い出を捨て世界を拾えと？」

そんな事・・・と思っていたら

《いえ、それも拾いましょう》

「どうやってだよ」

《私が全部覚えておきます》

「・・・」

《貴方が忘れたことを私が覚えておいてもう1回・・・1回じゃだめなら10回、100回何度も聞かせてあげますから。それで思い出しましょう》

「・・・」

《消えたなら、音声、画像、映像あらゆる手段でまた同じことをし

てあげます》

「・・・・・・・・」

《何なら皆さんと一緒にもっと楽しい記憶を作りましょう》

「・・・・・・・・」

《・・・・・・・・私達の事を忘れたいんですか？》

「・・・・・・・・じょーだんよせ」

少し元気になった。

そうだ簡単な話だ。楽しい記憶を忘れたならもっと楽しい記憶を作ればいい。

それに、俺の周りはそんなことで俺を見捨てない。

「俺は誰も忘れない。お前のことだって」

《でもさっき神様の事忘れたって》

「・・・・・・・・それはそれ、これはこれだ」

《・・・・・・・・ハア》

馬鹿にされた・・・・・・・・けどこれが俺らしい。  
それにだ

「次会ったときに神様を倒せばいい」

《そうですね。頑張りましょう》

俺はそう思った。

だが俺は知らなかった。現実はその幻想など簡単に打ち碎くと。

### 第三十話「能力と少年が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー

作「たぶん記憶がどうこの話を書きたかったんだと思う」

当「何故？」

作「さあ？」

当「・・・まあいいや」

作「気にしたって始まらないし」

当「天照大神さん、A r i s h i aさん、龍賀さん感想ありがとうございます！  
ございました！」

作「ではまた次回！」

第三十一話「少年と敗北が交差するとき」(前書き)

はい、駄文来ます！

当「なんでそんなテンション？」

落ち込んでたら逆にハイになった。

当「・・・本編へどうぞ」

### 第三十一話「少年と敗北が交差するとき」

当麻 side

俺が神を倒す決意を新たにした数時間後

「おい、フェイトが出てきたってホントか!？」

「ああ、使い魔とマントの人物も一緒だ」

「じゃあ、行ってくる。なのは行くぞ！」

「うん！」

「待ってください！」

なのはとフェイトの所に行こうとしたらリンディさんに止められた。

「なんです？こっちは急いでるんですが」

「ハッキリ言ってここはあの子の自滅を待つべきです。そうでしょ  
クロノ執務官」

「・・・確かにそうです」

「それが分かっているがなぜ止めないんですか？」

「それは・・・」

確かにクロノが止めないなんておかしかったな。

クロノは普段規則や定石ど通りにやろうとしてるとおもったが。

『熱でもあるのか？』

『誰のせいだ、誰の』

『俺なんかしたっけ？』

『あんな物見せられて自滅を待てるわけないだろう！』

おそらくフェイトの出生を見て良心が助けてあげたいと言ってるんだろう。

結局のところクロノもいい奴なんだな。

『じゃあなんでリンディさんは止めるんだ？』

『見てないからだろう』

『・・・見せなかったのか？』

『口外禁止といったのは誰だ!』

・・・いい奴だな。

さてと、この展開はもともと読んでいた。なので

「そろそろどうだユーノ？」

「いいよ!」

もともとリンディさんの前にいたのは俺となのは。足りないユーノ  
はというと・・・

「ゲートの準備は出来てる!」

「良くやったユーノ」

言葉の通りゲートを用意させていた。

そして聞いた瞬間なのはを連れてダッシュ。

「リンディさん、定石とかは破るためにあるんですよ!」

「えっと、ごめんなさい!高町なのは、指示を無視して勝手な行動  
をとります!」

そう捨て台詞？を言いながらゲートに行く途中、走りながら後ろを向くと

「行つてらっしゃい」

「当麻君・・・」

「嵌められたか？」

ニコニコしながら手を振るリンディさんがいた。  
どうやらいい意味で嵌められたらしい。

「とにかく行くぞ！」

「うん！」

「あの子の結界の中へ、転送！」

そして俺たちはフェイトに会いに行った。

クロノ side

「艦長、なぜ彼らを行かせたんですか？」

確かにあのフェレットもどきが居たのを忘れていたけど、普段ならもう少し妨害があってもいい筈だ。  
なのに簡単に行けたことを怪しく思い母さんに聞いてみると。

「あらクロノ、あなたの母親は女の子が傷つく所を黙ってみてる人なのかしら？」

「そんな事・・・じゃあなぜ最初から行かせなかったんですか？」

自分の母親を少し尊敬しながら聞くと

「ただ行かせてもつまらないじゃない」

「・・・母さん」

「ほら、あなたは行かなくていいの？」

「・・・様子を見てから行きます」

自分の親が尊敬できる人物か疑問なクロノだった。

当麻 side

・・・行き成り空に飛ばされるのに慣れてしまつとは・・・なんか悲しい。  
隣でレイジングハートをなのはが起動しているが・・・待ってる暇がない。  
そこで

「『ダークマター未元物質』、『アクセラレータ一方通行』」

翼で加速しながら、空気抵抗などをすべて反射する。もちろん調節して息はできる。  
どんどん加速しながら降下するそして

「オラアアアアア!!!!」

「ウワッ!?!」

一気にマントの野郎を蹴り飛ばす。

それなりの勢いがあつたのか水中に突っ込んでいった。

「当麻！あんたもフェイトの邪魔を！？」

「違う！俺はフェイトの味方だ！」

「じゃあなんでこの前！」

どうやら俺の出来の悪い変装をしていた時のことを根に持ってるらしい。

「それよりなんでアイツがお前たちの手伝いをしている！？」

「スプリングの理由は……知らない」

どうやらアイツの名前はスプリングというらしい。どうせ嘘のだろうが。

「じゃあなんで一緒に居るんだ？」

「母さんがあの人に手伝ってもらえて……」

見ず知らずの奴に頼むなんて……プレシア・テストロッサはどこまで執着しているんだ？

「アイツに手伝わってもらうのは止めておけ。これは忠告じゃない警告だ」

「でも・・・」

「・・・仕方ない、俺が代わりに手伝わてやるから」

「・・・裏切らない？」

「信じろ」

「・・・分かった」

「よし、いい子だ。じゃあ行くぞ、なのは、ユーノ」

「うん」「ああ」

俺とフェイト達が話してる間に追いついたなのはとユーノとともに封印を始める。

と言っても俺はほとんど役に立たないけどな。

魔力欲しいな、今度誰かに相談するか？

そうこうしていると

「サンダー——」

「ディバイーン——」

「——レイジ!!」

「——バスター!!」

「……圧巻ですな。」

この上がない事を切に祈るが……無理だろうな。そうしてるとなのはとフェイトが何か話し始めた。そのとき俺は上と下から殺気を感じた。

下はおそらくマンントの男——スプリング。上が分からないが

「良いもんじゃ無い事ぐらい分かる!」

俺は上を見ながら全身に反射を適用する。

案の定上から雷、下からスプリングが飛び出してきた。

「ゼロにする!!」

俺は出てきたスプリングを無視しながら雷の攻撃力をなくす。そしてスプリングの攻撃、木原数多が使った格闘術を食らう。

「ウグッ!!」

腹に直撃して吐きそうになるのを耐えながら後ろに全力で下がる。

「逃げるのか？」

「あれ、逃がしてくれるのか？」

「馬鹿な」

案の定追いかけてくるスプリング。  
これでなのはが達が巻き込まれないと安心したのもつかの間。

「邪魔されるのは御免だからな」

「・・・チツ、女相手に何やってんだ」

「一人男が混じってるがそいつはいいのか？」

「いい」

「・・・それはどうかと思うが」

シャドウをなのはたちに差し向けやがった。

ユーノの事？俺はあいつを信じる・・・かもしれない。  
おそらくなのは達なら何とかなると思うが・・・

「人を気にしてる場合か？」

「人の考え読むなよ」

そうこうしてる内になのは達から十分離れた。  
ここなら殺れる。

「出会ってそう間もないが・・・そろそろ会つのも飽きてきたな」

「いいだろう、戦いというものを教えてやる」

三人称 side

当麻は行き成り突っ込んだ。

スプリングに向っかてつき出すのは『アクセラレータ一方通行』を発動させた必殺の左手。

しかし当のスプリングは全長40センチほどの剣、それを遊ぶように振り回しながら言う。

「貴様は能力を有効に活用している気かもしれないが実際は違う」

「ああそつかい！」

そのまま突っ込み一気に仕留めようとする当麻、だが

「あらゆる能力には欠点がある、このようにな」

あらゆる物を反射させる左手、それとは逆に振るった。  
そして

ザシュ

軽い音とともに斬れたのは当麻の左手。  
だが両者はそれを気にもかけずに戦う。

「『一方通行』、あらゆる物の向きを変えることが可能だが反射の  
範囲内で拳を引けば当てられる」  
ベクトル  
アクセラレータ

「チツ、解説ご苦労！」

そう言って振りかぶるのは右手、異能に対して必殺を誇る力。  
だがそれも

イマジンブレイカー

「『幻想殺し』、あらゆる異能を破壊可能だが異能でなければ破壊されない。これは普通の剣だぞ」

「分かってるさ！」

振りかぶった右手をあえて振らずに左手でスプリングの剣を握りしめる。

オートリパース

「『肉体再生』、観た限り文字どおり再生のようだな。欠点は特になし。あえて言うなら攻撃に転用不可か」

「そろそろ黙ってな！」

スプリングの空いている手も右手で押さえ、

「これでもくらっとけ！」

ダークマター

背中『未元物質』でスプリングを貫こうとするが

ダークマター

「『未元物質』、この世にない物質を作り出せる。欠点は・・・反射可能つといったところか」

そう言い迫り来る翼を無視しようとしたが、

「ところがどっこいってな！」

翼が一瞬だけ退く、そしてそれを反射してしまったスプリングは

「グフツ！」

翼に貫かれる。だがすぐに再生する。しかし突き刺さったままの翼がさらに傷口を作る。

「・・・それが主人公の戦い方か？」

「お行儀よく戦っても負けたら意味がないんでね」

「そのとおりだ」

そう言いながら下がって翼から逃れるスプリング。

ここまでお互い無視できないくらいの傷がある筈だが『オートリバース自動再生』によってすべて再生されている。

「そろそろあちらも終わったころだろう。いい加減に終わらせてくれる」

「デメエの死で——」

トントントン

「・・・普通話してる途中に攻撃するか？」

「戦っているという状況が普通じゃないがな」

当麻の腹部には数本の針、スプリングが転移させたのだろう。

「そろそろ、お終いだ」

「ハッ、ほとんど不死身の奴をどうやって殺す気だ？」

「こつだな」

そう言っ出て出したのは左手に普通の剣、右手に炎の剣、体中から雷撃だった。

「それが当たる——」

「喋る暇があるなら避けて見せろ」

当麻の正面から一気に転移、背後へスプリングは移動した。

「不意打ち上等ってか！」

当麻はすべて反射しようとしたが、それが間違いだった。

グシャツ！

三度反射の壁を越えられ右肩、左肩を切断される。雷撃だけでも防ぐことができたのは僥倖といふべきか。

「ヤバッ！」

そこで当麻がとった行動は右手の確保だった。  
両腕がないのでくわえるが

「必死に自分の腕を捕まえようとしてるところ悪いが・・・首が飛ぶぞ」

また剣を振るうスプリング、残された足で蹴りを放とうとする当麻。  
勝ったのは・・・スプリングだった。

「相手の行動を読もうと思うならしっかりやるんだな」

「・・・・・・・・」

どうやらまたスプリングが剣を引き戻すと思った当麻はあえて反射を切ったようだがそれが逆に仇となったようだ。

そして手に持っていた二本の剣を肩から脇腹に貫通するように刺される。

当麻は顔を苦痛に歪めるが、うめき声も上げない。

「・・・命乞いもしないとは見上げた根性だ。だが――」

新たに両手持ちの剣を手にとったスプリング。

「今度こそさよならだ」

『もう少し生きたかったな』

当麻が念話で呟く。それを聞いたスプリングの動きが一瞬だけ止まる。

しかしすぐに剣を両手持ちに変え全力を出そうとする。

そして無慈悲な一撃が両手両足を失った当麻に繰り出された。

第三十一話「少年と敗北が交差するとき」(後書き)

あとがきコーナー

当「四肢切断ってどうよ？」

作「痛そうだね」

当「いやショック死すると思う」

作「そこはほら・・・根性で」

当「お前は根性を何と勘違いしてるんだ？」

当「木原神拳ってやつ？」

作「みんなバンバン使うね」

当「『未元物質』でとか凶悪過ぎね？」

作「まあ行き当たりばったりだし」

当「A r i s h i sさん、天照大神さん、龍賀さん、そしてまた天照大神さんありがとうございます」

作「番外編は諸事情で消しました」

当「大したことじゃないですけどね」

当「ではまた次回」

作「・・・え？お前生きてるの？」

当「それは何とも。実際一度死んでもかもしれないし」

第三十二話「少年と敗北が交差するとき2」（前書き）

われらが主人公当麻は一体！？

気になる方はどうぞ本編へ。

ではどうぞ

## 第三十二話「少年と敗北が交差するとき2」

当麻 side

正直ここまで駄目とは思わなかった。

考えてることはすべてと言っていていいぐらい読まれ、攻撃は殆どが無  
力化された。

最後のあがきで色々してみたが駄目。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』が宿った右手は替えがきかな  
いので必死に拾ったが無駄だったらしい。

反射をしようにも四肢を切断された痛みで上手くいかない。

少しでも考える事が出来るがそれは落ちないようにするだけで精一  
杯だ。

ミサカは全能力を総動員して俺に『オートリパース自動再生』を発動させてるよう  
だが、間に合わない。

意地で声を上げなかった自分をほめてやりたい。

目の前で剣を大きく振りかぶるスプリング。

避ける方法はない。

けど・・・

（目標は達成、あとは神のみぞ知るってか？）

『もう少し、生きたいな』

口に手をくわえてるため、念話で言う。このセリフで死亡フラグが折れるかなと何となくやってみた。  
謎の既視感デジャブを感じたが・・・まあ考えても仕方ない。そう思っていたら

『諦めるな!』

『・・・ナイスタイミング』

一瞬間こえた声

「ハアっ!」

《ブレイズキャノン》

「な!？」

「無事か、当麻!」

『四肢が切断されて無事といえるなら』

そこにはクロノがいた。

クロノside

見つけたのは偶々だった。アースラでジュエルシードをいつでも奪取できるようになのは達の方を重点的に見ていて途中までは全く気が付いてなかった。

「ジュエルシードに異常はないか？」

「今のところは問題なしだよ」

「……当麻君の方は？」

最初に気が付いたのは夏実だった。当麻の方は確かに無警戒だったことを思い出した僕は

「エイミィ、当麻の方を見てくれ」

「はいはい、え〜と……え、何これ!？」

「どうした？」

「ク、クロノ君！急いで当麻君の所に行かないと!!」

「だからどうしたんだ？」

「体が！」

要領を得ない答えしか言わないエイミィ。仕方なく自分で確かめると

「な！？」

当麻が腕を切断されていた。

「ゲートを早く！」

僕は慌てて向かおうと命じたら

「準備できてるよ！」

いつの間にか夏実が準備を完了させていた。

「艦長！」

「いいから！早くいきなさい！」

「分かりました！夏実、帰りの準備も」

「分かってます！」

そうして転送された僕は当麻と対峙する人物の真上に来た。

（どうする？ 敵の能力は不明、攻撃方法も確認されているのは――）

僕は勝率を高めようと作戦を練ろうとしたが

『もう少し、生きたかったな』

その一言が聞こえた瞬間勝率などの考えが吹き飛んだ。

『諦めるな！』

『・・・ナイスタイミング』

一気に敵の真上に行き

「ハアッ！」

《ブレイズキャノン》

自分の出せる高威力の物を撃つ。

「な!？」

不意打ちのお陰が一瞬敵の気が逸れる。  
その間に当麻のそばまで一気による。

「無事か、当麻！」

『四肢が切断され無事といえるなら』

・・・無事ではないと思うのは僕だけだろうか？

当麻 side

さて、やることやったしもう帰りたいのだが・・・

「逃がすと思うか？」

「ですよ〜」

軽い調子で言うと、  
スプリングはどこからともなくショットガンを……こっちはまだ演算できるほど回復してませんが。

「クロノ、頼む」

「分かってる！」

クロノがプロテクションを張って数発防ぐ。  
けど

「他力本願もちよつとね〜」

「何をしてる!?!」

風力を調節しながらクロノの前に出る。右腕をくっつけ直すのも忘れずに。

「どうした命乞いか?」

「いやそんなんじゃないくて」

『クロノ、合図と同時に出来るだ

け遠くに引つ張ってくれ』

『分かった』

使える右手（左手は現在修復中）にありったけのルーンのカードを持つ。

クロノが俺の服の襟を持つ、首が苦しいが我慢だ。

「それが如何した？その距離では――」

「黙れ、両腕両足ぐらいで調子に乗るな。俺を殺したいなら『一掃』ぐらい用意しろ」

「・・・そんな体で何が出来る？現に脅ししか――」

「脅しかどうかは見てから言え」

それと同時に俺の爆発する魔術が発動する。  
それは俺の手にあるカードではなく

「な！？」

スプリングのマントの中からだ。  
俺はただ斬られたわけじゃない。スプリングの性能を確かめたかっただけだ。

その結果・・・スプリングはそこまで強いわけじゃない。  
おそらく奴は注意力が無い。だからこそ簡単にカードを仕込めた。  
そして爆炎で向こうが見えなくなる。  
あとは

「逃げるぞクロノ」

「ああ、なのはたちの所に行くか？」

「・・・まだあつてるのか？」

「まだな」

「じゃあレッツゴー」

「行かせるか！」

爆炎越しに銃を撃ってくるけがそれを両肩に刺さっている剣を引き  
抜きそれで弾く。

そして炎の剣は右手で触れ消し、普通の剣は・・・

「わざわざ研究材料をくれるとはラッキーだな」

「・・・傷は本当に大丈夫なのか？」

「ん？ミサカどうだ？ってまだ喋れないか？」

《いえ、全データ解析完了。全力を出せます》

「じゃ、『テレポート空間転移』」

《分かりました》

そして俺はクロノごとなのは達の所へ跳んだ。

跳んだ先にあつたのは・・・雷、この場所に最初に来た時と同じものだろう。

それが目の前に・・・

「ゼロにする！あつぶね」

咄嗟に威力を消したがまだたくさん残っている。  
それはもちろんのはやフェイトの所にも。

「やらせるかよー！」

クロノが驚くのも構わず『データマター未元物質』を発動。  
黒い翼をはためかせずぐになのは達の真上に行く。  
多数の雷、

それをどこぞの直球で自由なロボットに乗った青年よろしくマルチ  
ロック（ポイこと）しながら攻撃力を消していく。

「ゼロにする！ゼロにする！ゼロにする！ゼロにする！……メン  
ドクせえわあ！」

いや最初に俺は調整者じゃない……っては言つて無いか。

とにかくメンドクサイので『未元物質』の翼をなのは達を覆うくら  
い広げる。

翼で雷を受ける。そして

「逆算完了つてか」

《反射の対象に設定しました》

「ご苦労」

『未元物質』に落ちた雷がそのまま真上に飛んでいく。

「卑怯じゃないぞ。翼だって俺の体だ」

『誰に言い訳してるんですか？』

問題はここから、フェイトをどうするかだ。

この雷は何が目的で出されたのかだ。

俺が防がなければ完全にフェイトに雷が落ちていた。つまりフェイトの生還を二の次にしたってことだ。

とすると一番はやはりジュエルシードが怪しい。  
要するに

「プレシアの所にフェイトを帰していいのか？」

ハッキリ言って無理やりでも止めたいが・・・

《・・・婦女暴行？》

「ミサカ、シリアスにいこうぜ」

《私の考えとしてはやはり、本人の意思を尊重するべきだと》

「だよな」

ここで少しでも生存率を上げるには・・・

「ジュエルシードの確保か？」

「どうしたの当麻？」

いつの間にかフェイト達が集まってきた。  
ここは・・・

「なのは、ジュエルシードをフェイトに譲ってくれないか？」

「へ？別にいいよ」

「それでフェイト、今ジュエルシードを渡す代わりに今度はなのはとお話ししてくれないか？」

「・・・うん分かった」

さて、交渉成立。後は

「クゥロゥノ君」

「・・・君が考えている事は分かった。だがすべては駄目だ」

「となると1対5？」

「いや2対4だ」

・・・まあいいか。

「と言う訳だフェイト、4個で我慢してくれるか？」

「・・・うん」

「よし、いい子だ」

フェイトの頭を撫でてやる。サラサラの髪が気持ちいい。

「じゃあお開き？」

「いや待ってくれ。フェイト・テストロッサ、君の事情は分かっているつもりだ。

我々は君たちを保護する準備ができています。決して悪いようにはしないつもりだ」

少しフェイトが警戒してる。

「——というのは建前で、君の手伝いはしたいがこういう身分だ、頼るならその規格外に頼んでくれ」

「・・・へっ？」

「どういうことだい？」

うん、まあ行き成りだとそうなるな。

「要するに、自分たちは管理局員だから融通が利かない。  
だから管理局員ではない俺とかに頼れってことだ」

クロノも悪くなってきたなあ。

「まあ君と短時間でも一緒に居たらな」

クロノも失礼になったなあ。

「ほら分かったら、親御さんの雷がまた落ちる前に帰りな」

「うん」

「助かったよ、ありがとね」

いつの間にか雷が止まっていたので急いで帰らせる。  
仕掛けも忘れずにしたし。これで安心。

「じゃあね当麻」

「おう」

「管理局の人もありがとうございました」

「い、いやこれは君のためにしたんじゃない／＼」

クロノが照れてやがる。なのはと会ったときもだし・・・案外惚れっぽい？

そんで無言で見つめあうフェイトとなのは。

「・・・フェイト、なのはに言いたいことあるのか？」

「・・・名前なんでしたっけ？」

「にゃ!？」

・・・フェイトってドジ？

「よし、じゃあ今度自己紹介ってわけで」

「そ、そんな！私もフェイトちゃんに名前を——」

「あゝあ命令違反でリンディさん怒ってるだろうな」

「今すぐ帰ります!」

そして俺たちは帰った。

「ミサカ、解析結果は？」

《形状、質どれをとっても——と同じです》

「よし・・・これでスプリングの能力が見えてきた」

勝利に少しずつ近づきながら《

「最近のナレーション担当お前？」

《ほかに春樹さん、夏実さんなどもやっていますよ》

「あっそ」

ホントしまらねえな。

第三十二話「少年と敗北が交差するとき2」（後書き）

あとがきコーナー

当「ってなわけで俺は死にませんでした」

作「しぶといね。で何調べてたの？」

当「スプリングをそろそろどうするか決めないと」

作「その為に何か調べてたの？」

当「そんなところだ」

作「四肢を斬られてあんな啖呵をきれるのは凄いよ」

当「いざとなれば奥の手その一を使ってたけどな」

作「そうなんだ」

当「龍賀さん、感想ありがとうございました」

作「もし死んでたらさらに殺されるところだったんだよ」

当「それは遠慮したいな」

作「それでは次回！」



第三十三話「心情と何者かが交差するとき」(前書き)

はいはい短いのです。

当「いつも通り駄文ですので」

・・・言い返せない。

当「それでもいい方はどうぞ」

第三十三話「心情と何者かが交差するとき」

当麻 side

今現在の俺の状況は

「当麻君無事なの!？」

「動くな! 飛びついてきたら俺の命が本格的にヤバイ!」

「当麻君!」

「聞こえてないのか!？」

《まだ、針抜いてませんからね》

必死に格闘してる。いやなのは運動神経悪くて助かった。

「君は・・・本当に人間か？」

「じゃなかったら？」

「・・・まあ別に今更だな」

「それって結構バカにしてる？」

「ああ」

クロノの親を見てみたい。

「呼んだかしら？」

「読みましたな」

人の考えを。

「それで事件の大本について何か心当りは？」

「だってさクロノ」「だそうだ当麻」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」(無言でガンのくれあい)

「・・・・・・・・話が進まないのだけれど」

誰が好き好んで人様の過去を勝手に話さなきゃならんだ。

「・・・エイミー、モニターに」

はいはい

どうやらクロノが説明してくれるらしい。  
さて、俺は知ってるでしょうか。

《そろそろ針を抜かないと不味いのでは？》

「そうだな」

いくらあり得ないほどの回復力をもっているとしても体内の異物は取り出せないし。

ついでに考え事でもしよう。

まずスプリングだが、あれは本気でかかれば倒せる。  
背後からの奇襲、もしくは強襲なら余裕。

正面からの攻撃つても時間はかかるだろうがいける。

次はプレシア・テストロッサ。

まずは彼女を許すかどうか。

ここはフェイトの判断任せよう。

それでもし許すとしたらどうするか。

まあ遠くに逃げるのが最適だろう。

次はアリシア・テストロッサ。

記録では死んだとなっているが・・・生き返らせるか？

幸い当てはある。まあこれもフエイトに決めてもらおう。

さてと

「ほとんど他人任せだなあ」

《この事件に関わってる人ほとんどが他人でしたから》

「まあな」

向こうも終わったみたいだ。  
さてこれからどうするか。

「一時帰宅を許可します」

「当麻君！」

・・・俺に自由は無いのか？

《ないですね》

「ないだろうね」

「ないな」

「ないと思うよ」

「行つてらっしゃい」

四人から無い、一人から行つてらっしゃい、いただきました。

スプリング side

目の前でフェイト・テストロッサがプレシア・テストロッサに体罰というものを受けている。

理由はジュエルシードを4つしか持つて来れなかったから。

しかし、普通4つで十分だろう。2対4で帰つてこれたことで十分だ。

そこまで考えて自分の思考を笑つてしまう。

なぜフェイト・テストロッサは十分やったと、擁護しているのだろうか。

實際何の関わりもない、利用しあう関係だ。  
まあそう考えても

「もつやり過ぎじゃないのか」

口出ししてしまう自分がいるのだが。

「・・・・・・・・何かしら？」

「自分の娘を傷つけて楽しいのか？もう止めておかないと死んでしまっぞ」

「こんなもの娘じゃないわ」

・・・・・・・・虫唾が走るな。

「じゃあ言い方を変えよう。これ以上叩くと、その道具が使い物にならなくなるぞ」

「・・・・・・・・仕方ないわね。確かにそうなると困るわ」

そう言いながら立ち去っていくプレシア・テストロッサ。  
とりあえずフェイト・テストロッサをどうにか・・・

「あんた！フェイトに何したんだい！？」

・・・・面倒なの came。

「私は何もしていない」

「ホントかい？でも、じゃあなんでフェイトが」

「そいつを人形呼ばわりするクス——」

・・・感情を出すのは不味い。

「もとい、母親に聞くんだな」

「やっぱりアイツか！」

今にもプレシア・テストロッサを追いかけるようなアルフ。

余計なお節介は今後一切しない。

・・・今後はない。

「おい、貴様らには頼りになる人間がいるんじゃないのか？」

「何を言って——」

「貴様が行ってもどうせやられるだけだ。なら誰かに頼るんだな」

「じゃあアンタが——」

「断る。私にそういうのは性に合わない」

「・・・まあいいや。フェイトを頼むよ！」

「だから――」

人の話も聞かずに転送魔法を発動するアルフ。

「・・・性に合わないといったのだが」

つくづくこの世界の人間は甘いと思う。

つい先日、殺そうとした人間に殺されそうだった人間を預けるか？

「・・・やっぱりこの考え方も、この喋り方も合わない」

けど仕方ない。自分は全知全能のすべての人を救えるような神様では無いのだから。  
出来ることは

「必死に働く事だけってね」

第三十三話「心情と何者かが交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー

作「意外とスプリングの正体が分かってきましたね」

ス「・・・何故私が呼ばれた」

作「当麻は飽きたから」

ス「・・・・・・・・」

作「ズバリスプリングさん。あなたは何を考えてフェイトを助けようとしたんですか？」

ス「・・・・・・・・ただの同情さ」

作「利害関係が一致しただけなのに？」

ス「・・・・・・・・」

作「本当はどうなんですかそここのところ！」

ス「・・・少し思い出したただけだ」

作「？」

ス「気にするな」

作「まあいいか」

作「天照大神さん、龍賀さん、感想ありがとうございます！」

ス「私の明確な正体は・・・その内な」

作「ではまた次回！」

ス「感想、待っている」

第三十四話「少年と苦悩が交差するとき」(前書き)

・・・前書き何書こう？

何かないか大募集です。

### 第三十四話「少年と苦悩が交差するとき」

当麻 side

はい、自由は無いと多数の人に言われた上条さんですよ！  
……ヤケクソです。  
今現在何をしているかと聞かれれば

「——とそんな感じの十日ほどだったんですよ」

「あら、そうなんですか」

嘘ついてます。ああ心が痛い。嘘だけど。

『リンディさん、見事な誤魔化しというか、真っ赤なウソというか』

『スゴイね』

『だからと言って人を——』

『仕方ないじゃない。本当の事は言えないんですから』

いや家族に心配かけないとか言うのは分かるけど……

「ねえ当麻」

「う、うん母さん」

この言葉で分かるだろう俺が

『なぜ子供役をしなければならなんだ？』

『初めて会った人でもその親族に知り合いがいれば親しくなりやすいんです』

そう言うもんなのか？

まあ今更なので特に何も言わないが。

話は変わるがリンディさんはスゴイ。

名前がおかしい事も指摘されたけどそれを「養子なんです」の一言で押し切った。

いや「こんなこと聞いてすみません」てなっって結構心に響いた。これは本当。

「アリサもすずかちゃんも心配してたぞ」

「さっきメールを出しといた」

恭弥さんとなのはがO H A N A・・・じゃなくてお話ししてる。

今日恭弥さんに会った時の第一声が「当麻・・・なのはを任せた」  
って言うのは驚いた。  
何を任せられたんだろうか？

高町家からの帰り道。

「・・・犬？」

「オオカミじゃないかしら？」

リンディさんと俺の家（一部メンバー泊まり込み中）に帰る途中に  
犬（もしくはオオカミ）が現れた。

●アルフが現れた。どうする？

1、飼う

2、倒す

3、売る

4、無視する

「じゃあ3番を・・・」

《幾らでしょうね？》

「アンタ等は何をしようとしてるんだい!？」

「《金儲け》」

「勘弁しておくれ!」

「あなたは・・・確か使い魔の」

「アンタ管理局の人かい・・・ええい!知ったことか!」

「・・・何があつたか話せアルフ」

焦っているアルフを見て何かあつたことに気付いた俺はアルフも家に連れ帰りながら話を聞いた。

内容は・・・虐待。知っていてもやはり辛いものがある。

そしてフェイトに任せると決めた事が正しいのか分からなくなる。

本当にプレシア・テストロッサを許していいのか？

本当にプレシア・テストロッサを許す事が出来るのか？

その二つの考えがずっと俺の中を渦巻いていた。  
いや、あえて言うならあと二つ

スプリングはこのことを聞いて手伝っているのか？

俺は・・・どうしたらいい？

それだけを考えていた。

翌日なのはがアリサの家に行くのにもついて行かなかった。

俺はどうすればいい？

俺はフェイトを助けたい。

フェイトが望むのはなんだ？

プレシア・テストロッサの望み

プレシア・テストロッサが望むのはなんだ？

アリシアの蘇生

フェイトの幸せを考えているか？

考えていない

許せるか？

許せない

じゃあ俺はどうしたい？

そんな自問自答の繰り返し。答えが見当たらない。  
こんな時思っ、もしだ、もしもフェイトを助けるのをあきらめた場  
合・・・

「・・・それは無いな」

「何が無いんですか？」

「へ？」

思わず言った独り言。それに返ってき言葉。  
その方向を見ると

「夏実さんと春樹？」

「暇そうなので呼びました」

「暇って・・・」

「春樹も喜んで来ましたよ」

「・・・」

・・・喜んで聞いたが・・・はて、夏実さんに引きずられた泡を吹いてる物体が喜んで来た春樹だろうか？

「・・・春樹・・・生きてるか？」

「・・・」(ピク、ピク)

「生きてますよ・・・運が良ければ」

「アンタは何をしたんだ!？」

「なにつて味見をちよつと・・・」

ああ、それが原因だろう。この人の料理は料理と書いてダークマターとよむ。

「して貰おうと出したら倒れて・・・」

「匂いか！？匂いでこれか！？」

なんだと・・・レベルがアップしてやがる。これじゃいくら強靱な俺の胃でも・・・

「まだ、袋から出してもいなかったんですけどね」

「見ただけ！？味も匂いもなしの見た目でこれ！！？」

こうなったら。

「春樹！起きろ春樹！死ぬなら一緒に！」

「ああ・・・幻覚が見える・・・」

「くそ、もう手遅れなのか！」

「当麻が・・・考え事してる」

「止めは俺がさしてやる」

俺だっけるわ。

春樹は・・・蹴ったら復活した。  
それで夏実さんはまた仕事とか言ってどっかいった。

「・・・なあ春樹」

「ん何？」

「こんな時お前ならどうする？」

何となく春樹にフェイトの話を少し誤魔化しながら話した。  
すると返ってきた答えは

「まあ、ハッキリ言って関係ないね」

「まあ、そうだけどさ」

少し残念、と思ったら。

「まず、前提としておかしいもん」

「どういうことだ？」

「その人・・・ていうか当麻はその女の子を救いたいんだよね」

「まあそうだな」

「けどその女の子の願いを叶えてあげるのが、その子の救いになる  
とは限らない」

「なんでだ？」

「僕の予想だと・・・一種の洗脳に近いかな」

「なにが？」

「その女の子とお母さん。女の子はおそらく孤独なんじゃないかな。  
それで唯一知っている母親を――」

「自分の事を見してくれる唯一の人物と考えた？」

「そして自分を見てもらうために、必死に言うことを聞くんだ」

「なるほど。でどうしたらいい？」

「分かってるだろ。無理やりにも友達でもなんでもなつて孤独か  
ら解放してやるんだ」

「だな」

ここら辺はなのはの領分だな。で

「母親はこの場合どうするべきだと思う?。」

「その女の子が母親のもとを離れて改めてその子の大切さに気付くかな」

「気付かなかつたら?。」

「それこそ関係ない。警察、管理局に突き出せばいい」

「……殆どばれてるな。」

「まあこれも一例で他にも女の子が母親から離れない可能性もあるけど」

「そうだった場合は?。」

「君の得意なお節介でもすればいい。母親を更正させるとか、まあその女の子のそばに居るだけでもありかな?。」

「……ああ、分かった」

「じゃあ帰るね」

「死ぬなよ」

「なんでだよ」

「夏実さんの手料理で」

「……また会えることを祈っててくれ」

玄関に行く春樹、それを礼儀として見送る俺

「ああそうだ」

「どうした？」

「悩みすぎもよくないから簡単に言つとね」

笑いながらこつちを見てくる春樹。

「これは全部僕が考えた話。本当の答えは――」

『本当の答えは――』

「フェイト、お前に聞くべきだな」

今いるのは海にほど近い場所。

そこになるのは、アルフ、ユーノ、そしてフェイトという。  
ジュエルシードをかけた戦い、それを行う直前。

「お前は、俺たちに、どうしてほしい？」

俺はフェイトにそう問いかけた。

「私は――」

第三十四話「少年と苦悩が交差するとき」(後書き)

あとがきコーナー

当「中途半端」

作「いや色々ありまして」

当「まあいいや。てか春樹の答え反則だろ」

春「いいじゃん。答えを本人に聞いたって」

作「ここは性格が現れるね」

当「まあ何にしたっていいけど」

作「まあ違和感があっても大目に見ていただけるとありがたいです」

当「天照大神さん、龍賀さん感想ありがとうございました」

春「スプリングて何!？」

作「ほら白状しろ!カツ丼食いたいだろ?」

当「うな重でもいいぞ」(ライト当てつつ)

春「何この昭和な感じのやつ!？」

当作春「」ではまた次回！「」

第三十五話「憶測とだいたいの真実が交差するとき」(前書き)

ちよつと遅れましたかな？

当「アウト！」

ミ《スリーアウト、チェンジ！》

作「ぬわ！？く、どこへ連れていく気だ！？」ズルズル

春「・・・何したいんだか」

### 第三十五話「憶測とだいたいの真実が交差するとき」

当麻 side

海岸沿いのとある場所。

そこになのはたちと来た。理由はフェイトに会うため。

そしてフェイトは現れた。

アルフがプレシアの言うことを聞くのを止めようというがそれを拒否。

それでもあの人の娘だからか・・・感動的だな。

そんなフェイトを手助けしたいと思ったから俺は

「お前は、俺たちに、どうしてほしい？」

今、フェイトにどうしてほしいかを訊いている。

もしフェイトが助けてというなら救おう。

もしフェイトが消えてというなら消えよう。

もしフェイトが手伝ってというなら手伝おう。

もしフェイトが母を手伝ってと言ったら・・・不本意だが手伝おう。

もしフェイトが何も言わなければ・・・言うまで待とう。

とにかく、フェイトが望むことをするのは決定だ。  
まあ例外なんかはあるが

「私は――」

皆がその答えを聞こうと黙りきっていた。  
そのとき

『フェイト、あなたは私のためにジュエルシードを集めなさい』

と言う声がきこえた。

その言葉をきいたフェイトは寂しそうな顔で

「はい、母さん」

と答えた。

「……まったくんだ母親だ。

こうなった場合俺はどうするべきか考えていると

「貴様の相手は私だ」

スプリング登場。出来ればもう少し後が良かったが……まあいい

「来たか。まったく、俺は忙しいんだぞ」

「ああ……分かっている」

「『一掃』は用意してきたのか？」

「……意地が悪いぞ。気づいているのだろ？」

「まあな」

スプリングは特に何もするでもなく……まるで何もしないことをアピールするかのように手をだしながら近寄ってきた。そして俺の横までくる。  
当然全員警戒するが……

「あゝ気にしないでいいぞ。邪魔はしてこないから」

「当麻、そいつは信用できるのかい？」

「大丈夫だって。俺が如何にかするから」

「……………」

まあとりあえず今は何もしないだろう。  
そう思い俺は地面に座る。  
するとスプリングはも隣に座る。

そんな俺たちに構う様子もなくなのはとフェイトは話し続けている。

「きっかけはジュエルシード、だからかけよう。お互いが持つてる全部のジュエルシードを」

そしてレイジングハートとバルディッシュがジュエルシードを出す。

「それからだよ、全部それから」

お互いがデバイスを構える。

「私たちの全てはまだ始まってもない。だから、本当の自分を始めるために」

そして

「始めよう、最初で最後の本気の勝負！」

宣言どおり始まった戦い。

まあこれを大人しく見てる暇はないんだが。

「スプリング、そろそろ本題に入ったらどうだ？」

「・・・・・・・・」

「言わないなら言ってやるよ。神様……にこき使われる哀れな転生者くん」

「やはり、気づいていたか」

ここまで色々おかしいことがあった。

わざわざ俺に合わせるように超能力を使ってくる。

最初の一回を除いて何故かなのはとフェイトを狙わない。

何故かフェイトを殺すはずなのに手伝いをした。

他にも色々あったが極めつけは『一掃』。

ただ俺に合わせて超能力などを使ってくるならこれは使わず。

だが使ってこなかった。

考えられる理由は二つ。使わないか使えないかだ。

しかし前回あれだけ馬鹿にしたんだから使わないってのは無い筈だ。俺だったら絶対使ってる。

そして残った可能性だとした場合、『一掃』は天使にも扱えるのに

神が扱えないかという結論になって

「まあ転生者みたいなのが妥当かなと思ったわけだ」

「……半分合っているといったところだ」

「どこまで合っている？」

「残念ながら今回それを言いに来たんじゃない」

「だろうな。で本題はやっぱり？」

「言わせる気か？」

「言ってくれよ」

「……フェイト・テストロッサを助けてやれ」

「やっぱり」

スプリングがフェイトの手助けをしたそうなのはアルフに聞いた。  
ここまでやってることの辻褄が合わないとなると・・・

「弱みか？」

「まあそんなところだ」

さてと・・・おそらくこいつはそこまで悪い転生者じゃないな。

「その評価は当てにできないな。私が善人なわけ——」

「まあ善人じゃなくても悪い奴じゃないってことで」

「・・・お前たちは甘い。私が今お前を殺そうとしたらどうする  
気だ？」

「殺られる前に殺る」

「試してみるか？」

そう言って何処からともなく剣を出してくるが・・・

「こっちは時間がない。くだらない真似はやめろ」

その剣を弾き飛ばすように地面から炎が噴き出す。

「・・・どうやった？」

「デメエには理解できねえ。理解できるように言えばデメエは俺に殺される直前ってことだ」

何も完全に信用しているわけじゃない。  
だから罠を張って、完全に術中に嵌めた。

「前言撤回だ。貴様は甘くない」

「下らねえ。お前は何が目的だ？答える」

「・・・・・・・・」

「黙ってるならこの場で一生黙っとかせてやるつか？」

「私は神の操り人形だ。だから同じような境遇のフェイト・テスト  
ロッサを同情したくなった」

「・・・・・・・・」

「とにかく、私を倒して彼女を救え。そしてらお前に損は無い」

「・・・・・・・・いいだろう。真意は見えないが見る気はない」

なのはたちの戦いもう佳境に入っている。  
こっちもそろそろ終わらせないとな。

「ついでだ訊いておこう。お前の能力はコピーで合っているか？」

「……言って私に得は「ない」……なら言つ必要も「ない」。  
」

「だがそうなった場合俺はフェイトを救わないかもしれないぞ」

「……嘘、だと分かるがいちお言っておく。半分ほど正解だ」

「あと半分は？」

「言つわけにはいかない」

「……」

「どうした？怖くなつたか？」

「……別にどんな困難があろうと俺は——」

なのはの魔砲撃を喰らい落ちていくフェイト、それを追いかけるなのは。

「突き進むだけだ」

二人の下付近に転移し翼をだす。  
そして

「お疲れさん」

二人を抱きしめるように捕まえる。  
一瞬二人は驚いたが安心したような表情になる。

「勝者はなのは、異論はないな」

「……うん」

《プットアウト》

フェイトが肯定するとバルディッシュがジュエルシードを出して  
くる。

・・・場違いだが

「素直そうなデバイスで羨ましい」

《喧嘩を売ってますね》

「・・・ほら」

《同意を求めないでください》

そのやり取りで二人は苦笑。まあ笑ってればなんでもいいや。

『よし、フェイト・テストロッサの身を守りつつジュエルシードを

』――』

『悪いが無理そうだ!』

まるで油断した一瞬を狙ったかのように落雷が来る。  
がだ

「俺がここに居る限りそんなもんは当てさせねえ!」

『そうでなくては任せた意味が、なに!?!後ろだ!』

「な!?!グッ!」

スプリングとの念話の最中に後ろから襲ってきたシャドウ。  
それによって二人から離される。

そして雷がフェイトに落ちる。

苦痛に顔を歪めるフェイト。壊れるバルディッシュ。

さっきの反応からしてスプリングは違う。

だが考えをまとめる前に第二派が来る。

正面は銃を構えたシャドウ。上には雷。後ろには傷ついたフェイト  
を支えているのは。

どうする? いや決まってる。

「こうする！」

上に『イマジンプレーカー幻想殺し』を向け避雷針に。

自分の体に『アクセラレータ一方通行』を纏わせなのはたちの盾に。

背中の『ダークマター未元物質』をさらに伸ばし、増やし他にも対処できるようにする。

そして雷が右手に落ち消える。

体に銃弾が当たるまえに反射されシャドウを貫く。

再び背後に現れたシャドウを翼で貫く。

こうして一瞬の戦闘は終わった。

後に残ったのは傷ついたフェイト。

心配するなのは。

俺だけになった。

スプリングは消えた。

さっきまで普通に話したが、次会うときは

「まあ叩き潰すか」

後はフェイトの求める行為をして

フェイトが普通の生活を送っていけるよう手配する。

この下らねえ事件は終わりだ。

いやもし次の戦いで神が出てきたら倒してハッピーエンドだ。

その為の切り札を何個か用意して・・・

まったくやることが目白押しだな。

「楽しいね」

これで全部片付いたらもう自由だ。

神が出てこなくても正体不明のやつが輪郭ぐらい出てくるだろう。

この事件の延長線上には必ず俺の敵がいる。

まったく

「目的があるっていうのは、本当に楽しい」

第三十五話「憶測とだいたいの真実が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー

作「最後のセリフは意外と気に入ってる」

当「ハア・・・結局守りきれなかった・・・」

ミ《ドンマイですマスター》

当「カッコよくいきたかったのに・・・」

春「誰にでも失敗はある」

当「・・・前回反響が大きかったポイズンクッキング（仮）を食って死ぬか？」

作春「止めて！思い出させないで！！」

ミ《・・・この時ばかりは我が身がデバイスであることに感謝です》

作「天照大神さん、龍賀さん、時空の旅人さん、感想ありがとうございます」

当「良ければこれどうぞー!」↑ポイズンクッキング投擲

ミ《どこに飛んで行っ たんでしょっ?》

作「毒物が行ったー!?!」

春「……………」(ピクピク)

作「春樹は逝ったー!?!」

当「……………アーメン」

ミ《ではまた次回!?!》

第三十六話「少年と少女の絶望が交差するとき」（前書き）

上条&当麻&ユーノ&青髪ピアス

上条「主人公の方がいいんだろ！？脇役なんかで満足してんじゃねえ！」

当麻「だってさ」

ユーノ「僕たちだって主役になりたいけど！」

青髪「出番がないんよ！これどいう事なん！？カミヤんズー！」

当麻「ええい纏めるなー！」

上条「えーと・・・上条さんには難しすぎてわかりません」

### 第三十六話「少年と少女の絶望が交差するとき」

当麻 side

攻撃が終わった後、傷ついたフェイトもつれてアースラに帰ってきた。

「お疲れ様。それから、フェイトさん。初めまして」

しかしフェイトはそれを聞いてないかのように手の中にあるバルディッシュを見つめる。

『母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をほかの部屋に』

『は、はい』

「どうやら遅かったみたいだぞ」

リンディさんが気を利かせたのだろうが何分遅かった。  
もう武装局員が玉座の間へたどり着いてしまった。  
そして条文を読み上げ見つけてしまう。

「えっ？」

ポッドに入ったフェイトと同じ姿をした少女を。

そして局員たちを吹き飛ばすプレシア・テストロッサ。  
負傷した局員を戻すように指示するリンディさん。  
その間もフェイト達は啞然としていた。  
そして語り始めるプレシア・テストロッサ。

フェイトが必死に集めたジュエルシードをあざ笑う。

フェイトを人形とあざ笑う。

フェイトは偽物とあざ笑う。

フェイトはいらないとあざ笑う。

フェイトを大嫌いとおざ笑う。

ついに耐え切れなくなったフェイトが倒れそうになる、が

「大丈夫、じゃなさそうだな」

俺が支える。・・・重症だな。案外春樹が言ってた洗脳は当たりかもしれない。  
その倒れたフェイトをアルフとなのはに任せ俺は一直線にリンディさんの所へ向かう。

「リンディさん」

「なにかしら？フェイトさんについて行かなくていいの？」

「武装局員は全員負傷、クロノ一人では荷が重いと思われるため俺も行っていないですか？」

どうせプレシア・テストロッサがやることは分かってる。  
フェイトが集めたジュエルシードを使つてのア、ア・・・ア何

とかに行く気だろう。

その為の兵も出してきただろうから俺も行く。

「フェイトさんを置いて？」

「手伝いはします。そこから本人が立ち上がるか泣き続けるかは関係ありません」

「……いや本当の事言ったら絶対フェイト救うけど。その前にやる事が……」

「……いいでしょう。許可します」

「ありがとうございます」

「……何でこの前のように勝手に行かなかったのかしら？」

「ああ、それは——」

簡単なことだ。さっきのくそつたれな台詞を聞いて

「何でもいいから行動を制限しないと、あそこに勝手に突っ込んで、  
暴れまわりそうだからです」

「……暴れたらどうなるの？」

「無残な生ゴミができます」

「……それは遠慮してほしいわね」

「まあ冗談ですよ」

「……本当は何も残らないけどな。」

そして俺は許可を貰った後、フェイトが居るはずの部屋に行った。

理由は……下らぬ幻想を殺すため？ いやただの戯言です。

部屋には……居た。

焦点が定まっていないフェイトに俺の思いを伝える。

「確かにお前はあの人にとってアリシアの偽物かもしれない」

「当麻!？」

アルフがどなる。いやもう少し聞けって。

「けどお前は俺たちにとってフェイトなんだ」

「・・・え？」

「あの人は勘違いしてるだけなんだ。お前がアリシアだと。」

「・・・」

「俺たちは先に行っておく。お前は考えておけ。自分は何をどうしたいのか」

「・・・うん」

・・・今度は大丈夫そうだ。

俺の月並みな言葉に励まされたなら何よりだ。

じゃ俺は次の目標に行かないとな。

確か艦内放送で次元震が起きたと言ってたから・・・ヤバいな。急ぐか。

途中であつたなのは、ユーノ、クロノも行く気満々だ。

夏実さんも行きたそうにしてたがあの入、実は非戦闘員だそうだ。だから残されてた。

そして敵の本拠地『時の庭園』へたどり着く。  
そこには

「いっぱい居るね」

「確かにいっぱいだな」

まだ入口なのに傀儡兵とやらと・・・シャドウが所狭しと居る。

「当麻くん、この子たち・・・」

「ん？ああ、こいつ等——」

喋りながら近くにあつた瓦礫を拾う。  
そして

「人じゃないから本気で大丈夫だ」

『アクセラレータ 一方通行』でベクトルを操作して瓦礫を投げつける。  
それによつて起こされたソニックウェーブが敵のど真ん中に当たり  
数十対が吹き飛ばされる。  
それだけに留まらず奥の壁の一部まで破壊する。

「・・・本気でやつてもそんな風にならないのは私だけ？」

「いや、僕もあんな風には出来ない」

「というか普通の人が出来ることじゃない」

・・・加減を間違えたか？  
まあ気にしないで進む。俺を先頭にクロノが二番手、ユーノとアル

フは援護でなのはとっておきだ。

左からきた傀儡兵にただの拳を撃ち込む。それで吹き飛ばす。

右から来たシャドウに雷撃の槍を撃ち、吹き飛ばす。

シャドウからの銃撃が来たらそれを反射する。

なのは達を狙ってきたら翼を広げて邪魔してそのまま翼で貫く。

殆どの敵を片付けながら歩き続ける。残ったやつはクロノラヘンがとどめを刺す。

そして途中有った穴に落ちないように進んできて……

「たのもう!!」

ドアを蹴りあける。そこには……さっきの倍ほどの敵。

「……やっぱ遠慮しときます」

ドアを丁寧に閉める。

ドゴオオオオオオオン!!!

向こうさんが蹴り破ってきた。

「マジですか!?!」

敵の一撃、それを避け……

「——る必要ないだろ君は」

後ろに居たクロノの前に出るように押される。……えっ?  
そのまま真つ二つに……。はならなかった。

「てかなってたまるか!?!」

咄嗟に反射、何とか助かる。  
そしてすぐに

「クロノ殺す！」

「悪かった。冗談だ」

「冗談で済むかボケ！こっちは死んじまうぞ！！」

「死ぬのか？」

「いやそんな真顔で聞かれても・・・」

「アハハハハハ・・・」

なのは、笑いごとじゃない。

「なのは、ここで二手に分かれるぞ」

「・・・隙は俺たち担当？」

「ああ、頼むぞ」

「はいはい」

目の前に居る敵の大群に向けて右手と左手を向ける。  
右手にはルーンのカード、左にはメダルを握っている。

「時間は稼いでやる」

《スナイプショット》

クロノが時間をくれるらしい。じゃあ・・・電力を溜めて溜めて溜めて・・・

「『レールガン超電磁砲』、フルパワーってな」

撃ち出す。単純だが強力な攻撃。それで道を開く。  
だがそれじゃ終わらない

「『アクセラレータ一方通行』で風を操作」

風を完全に操りそれにルーンのカードを乗せる。

「そして魔術を発動」

- ・ 複数のルーンのカードが発火する。『イノケンティウス魔女狩りの王』のようだが・

「それは違う。言うならば――」

ルーンのカードが一枚一枚バラバラに行動を起こす。

「広域殲滅型魔術」

まるで鳥のような形をした炎が風に乗りながら敵を包み燃やし尽くす。

的が小さく敵もあまり反撃をできないているが、その内数匹が攻撃にあい切り落とされるが……

「『不死身の炎鳥』ってな」  
フェニックス

まるで何事もなかったかのように敵を襲う。

「完全オリジナル、特殊な魔術」

切られたとしても不完全な分を他のカードで補うことでまるで不死鳥のように戦う。

完全に風を計算、敵の攻撃などで起こるあらゆる誤差を計算に入れる必要があるため

使い勝手は悪いけどな。風ないと使えないし。  
しかしこれによって道は開いた。

「行け！なのは！」

「うん！」

なのはがユーノを抱えて飛ぶ。  
俺とクロノは残りを倒そうと構えるが。

「・・・居ないな」

「予想外の結果だな。いい意味で」

さっきの魔術ですべて倒せた。  
・・・ぶつつけ本番だったんだけどな。

第三十六話「少年と少女の絶望が交差するとき」（後書き）

あとがきコーナー

当「おいこら作者、前書きなんだよ」

作「・・・何なんだろ？」

当「聞くなよ」

作「時々やるかもしれませんが。もし邪魔だ！こんなの書くな！って言われたら止めます」

当「新魔術披露」

作「原理は？」

当「カードの欠けた部分をを補い合わせながら攻撃する事でまさに不死鳥のごとく斬られても復活する・・・実験中でまだあんまし威力ないけど」

作「龍賀さん、時空の旅人さん、天照大神さん、Arisshiaさん感想ありがとうございます」

当「それではまた次回！」

作「の前にちよつとお話が

これでも私受験生で・・・まあ受験勉強があるわけです。  
なので更新はすると思いますが・・・頻度は週一よりかなり減りま  
す」

当「どうか見捨てないでもらえると俺も作者も泣きながら感謝しま  
す」

作「それでは」

第三十七話「少女の思いと母が交差するとき」(前書き)

予想以上に遅くなてしまいました！皆さんすいません！

当「何してたんだ？」

テスト勉強と展開決め。

当「ああ・・・これ行き当たりばったりだもんな」

それでは本編どうぞ。

### 第三十七話「少女の思いと母が交差するとき」

フエイトside

私が生きていたと思ったのは、母さんの役に立ちたい、そう思ったからだ。

なのに実際は偽物と、大嫌いと言われた。

とっても辛かった。泣きたかった。

今まで頑張ってきたのは母さんの為だったのに、母さんにありがとうと言って欲しかったから頑張ったのに。

そのくらい母さんは、母さんだけが私の中心にいた。

私に事を思ってくれてる人は母さんだけだと思ってた。

けど今は違う。

真っ白な女の子。

——何度も私の名前を呼んでくれた。

今もそばに居るアルフ。

——我が儘を言ってもついてきてくれた。

そして当麻。

———  
ずっと私を気にかけてくれた。

そうだ、私には彼らが居た。

確かに母さんにとって、私はアリシアの偽物かもしれない。  
けどきつと彼らにとって私は・・・

「フェイトだよね」

じゃあ私、フェイト・テストロッサは・・・

「当麻達の所に行こうかな。まだ私は諦めたくないから」

やることは決まった。後は実行に移すだけ。

「バルディッシュも手伝ってくれる？」

《お任せを》

「ありがとう、バルディッシュ」

当麻は母さんが勘違いしてると言ってた。

そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。  
けど私は母さんに伝えたい。

私はあなたの娘のフェイトだと。

当麻 side

結局俺はクロノと別れなのは後を追いかけて追いついた。

しかしそこも敵の数が多く途中合流したアルフを合わせても苦戦していたところに上からの雷の攻撃。

これは・・・フェイトか！

「当麻！」

「フェイト！答えは決まったか？」

「私は母さんと話がしたい!!」

「よし、その為の道は俺が作ってやる!!」

周りにいるのは雑魚がたくさん。それと大型の盾持ちか。取りあえず前に出る。

何を使うか・・・おっ、そうだ。

近くの瓦礫に近寄り特殊なオイルパステルを取り出す。

「――まずは原初に土・・・だったかな？」

《珍しく詠唱つばいのしたと思ったらうる覚えですか》

魔術は才能のない者が才能のあるものと対等になるためのもの。それには確かにルールがある。がしかし俺はそれに縛られない。生命力が多かったし、才能もあった、そして様々な裏技も知っている。

まあ要するに詠唱はとばしてもいい。

だが・・・何となく言ってみた。

「え」と神様は土より形を作り……以下略っ!!」

《断念早やつ!》

ゴーレムⅡ エリスを作り出す。

大きさは敵の約二倍程度だろう。

そいつを真正面から突っ込ませ、俺は……

「さてと……ちょっと休憩でもしますか」

《さてと……ちょっと能力を暴走させますか》

「すみませんでした!だからどうか許してください!」

《逝きたいんですか?》

「生きたいです!」

俺の中のラスボス（ミサカ）と戦っている間に大半が倒せた。  
残った大型のシールドつきはなのはとフェイトが倒した。

・・・仲間外れにされても悲しくないもん！

ここでさらに駆動炉とプレシアのところ、それともう一つに分かれる。

もう一つは・・・まあ俺の用事、スプリングの事だ。  
その為別れた。  
さてと

「どこに居るかな？」

《とりあえずまっすぐ進んでみればどうですか？》

「何そのアバウト？もつとちゃんとした方法でいこうぜ」

《どんなのですか？》

「棒を倒して——」

《熱源反応あり。とりあえずそちらに行ってみては？》

「……………うん」

なんか悲しくなったので大人しく言われた方に行くと

「……………」

「……………スプリングの能力を侮ってたな」

アクセラレータが居た。黒めの。  
確かにアクセラレータ本人をコピーしたと考えれば納得はできる。  
だが

「……………コ……………ロ……………ス……………」

「へえ、喋れるのか。出来るものならやってみやがれ」

突っ込んでくるアクセラレータ。

ベクトルを操る両腕が突き出されるが……

「格闘戦が出来ねえくせに近寄るんじゃない」

『イマジンプレーカー  
幻想殺し』で軽くないなし、顔面にジャブを叩きこむ。  
だがフラフラと立ち上がりまた刃向ってくる。

「……仕方ない。一気に決める」

今度は突っ込んできた黒アクセラレータの首を右手で握り

バキッ

骨を折る。いくら丈夫でも死ねば動かない。

そして黒アクセラレータを殺した後、さらに進むとするが……

「……うわぁ」

《1 2 3 4 5 6 7 . . . 何体居ますかね?》

黒アクセラレータがさらにいた。

・ . . . 反則じゃね?

しかし反則集団はこっちの事を考えるでもなく突っ込んでくる。

右手一本で捌くか?

木原神拳を活用し攻撃するか?

転移で一旦退くか?

一瞬にも満たない思考。

そこを突かれた

バンッ!

聞こえた音——それを銃声と認知する前に俺は頭に衝撃を受けた。

そして——

クロノside

当麻達と別れてなんとか最下層——プレシア・テストロッサが居るところまでたどり着いた。

「取り戻すの、こんな筈じゃなかった世界の全てを！」

壁を魔法で破って突っ込む。そして

「世界は、いつだって、こんなはずじゃ無い事ばかりだよ！

ずっと昔からいつだって誰だってそうなんだ

！！」

そう叫ぶ。僕だってそう思ったことだってある。

「こんな筈じゃない現実から、逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！」

プレシア・テストロッサは自分でその道を選んだ。そのことに文句は言えない。けど

「自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！」

フェイト・テストロッサを勝手に巻き込んでいい権利なんか持っていない！

その後、急にプレシア・テストロッサが血を吐き始めた。無理をしてきたツケが来たのだろう。

それをいつの間にか来たフェイト・テストロッサが心配して近寄るが、しかしまた拒絶する。

そこで僕はフェイト・テストロッサを心配したが、無用だったようだ。

「あなたに言いたい事があって来ました」

ハッキリと告げる。

「私は・・・」

誰もが静かに、続きを聞こうとしている。

「私は、アリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作ったただの人形かもしれません」

先ほどそう告げられて放心した時とは全く違っていた。

「だけど私は、フェイト・テストロッサは・・・」

あなたにうみだしてもらって、育ててもらった、あなたの娘です！」



そのまま手を伸ばすフェイト・テストロッサ。  
それに対してのプレシア・テストロッサの行動は・・・魔法陣を展開することだった。

それが原因なのだろう、揺れが急に酷くなった。  
エイミイが逃げると通信で言ってくる。

「了解した。フェイト・テストロッサ。・・・フェイト！」

呼びかけるがまるで聞こえないかのように動かない。

そんな中プレシア・テストロッサの足元に次元断層のひびが入る。  
そして落ちていくプレシア・テストロッサとアリシア・テストロッサ。

「母さん！」

「フェイト！」

そしてそれを追いかけようとするフェイト・テストロッサと止めようとするアルフ。

しかしそれでは終わらなかった。

ひびが二人の足元まで及んでしまった。

「二人とも逃げろ!!」

必死に叫ぶがもう遅い。

ひびが大きく開きそこに二人の体が落ちて行つた。  
全て諦めそうになったとき

「諦めんじゃねえ!!!」

という、あらゆる逆境を打ち破ってくれそうな声が聞こえた。

第三十七話「少女の思いと母が交差するとき」(後書き)

あとがきコゝナ

春「当麻無事だったね」

作「まあね。今は主人公だしね」

春「今は？そのうち代わるの？」

作「うゝん、そう言うのも面白いけどね」

当「本人の傍でそんな話するの止めてくれよ。なんかリストラされる人の気持ちが軽く分かったぞ」

作「時空の旅人さん、龍賀さん、天照大神さん、感想ありがとうございます！」「

当「今更ですが色々の贈り物ありがとうございます。おそらく本編で何個が使わせてもらいます」

春「ホント色々あったなゝ・・・何度死んだことか」

作「それではまた次回！」

第三十八話「少女の思いと母が交差するとき」(前書き)

作「今回ついにアイツの正体が!」

当「アイツか!」

作「あと最後はちょっと想像しにくいかもです」

当「では本編へどうぞ」

第三十八話「少女の思いと母が交差するとき2」

クロノ side

二人が落ちて行った。

もう帰ってこれない次元断層の中へ。

そう思い、絶望しかけたとき

「諦めんじゃねえ!!」

上から叫び声が聞こえた。この声は・・・

「当麻か!？」

そういつて両腕を全力で振る。

その手には細く光る紐のようなもの——ワイヤーが握ってあった。

そのワイヤーをたどった先には・・・次元断層。

「まさか!？」

「そこから先は通行止めつてな!!」

そう言い全力でワイヤーを引く当麻。  
その先には・・・

「・・・アタシは今度こそ駄目と思ったよ」

「当麻!」

フェイト・テストロッサとアルフ、そしてアリシア・テストロッサとプレシア・テストロッサも一緒だった。

当麻 side

スプリングを探してた最中、黒アクセラレータの集団に襲われ、撃たれた。

それを救ったのは……スプリングだった。

「避ける！」

「な!？」

頭に感じた衝撃は俺がスプリングに押されたからだった。

「な!？……よくのこのこ出てこれたな」

「何を手こずっている!？これぐらいで倒されては私が困るぞ！」

「こいつらを用意したのはデメエだろうが！」

「違う!」

「・・・へ?」

思わずすつとんきょんな声を上げてしまう。

「じゃあ誰が・・・?」

「それはどうでもいい! 急がないと貴様の仲間が大変な目に合うぞ  
!」

「なんだと!? フェイト達に何があるってんだ!？」

「いいから来い!!」

そう言って無理やり俺を引っ張り、飛び始めるスプリング。  
俺も翼をだし、並走する。

「何だってんだスプリング!？」

「何故貴様は反射を発動しなかった？油断か？慢心か？私が助けなければどうなっていたか」

「何の話だよ!？」

「黙って聞け!さっきは貴様が自分の力を過信して反射をしてないから殺されそうになったのだ!！」

「分かったよ!それで何が起こった!？」

「このままいけばフェイト達が次元断層に落ちる!」

「何だと!？本当か!？」

「だから私が出てきた!」

「じゃあゆったら飛んでる暇はねえ!！」

アクセラレータ

『一方通行』で一気に床を突き破る。  
そのまま最下層を目指し突き進むと

「二人とも逃げろ！」

切羽詰まったクロノの声が聞こえた。  
そしてたどり着いたと同時に

「諦めんじゃねえ！！」

ワイヤーを次元断層の中に片っ端からからめ捕る。

「そこから先は通行止めつてな！！」

そして引き上げる。そこにはフェイト達の他にプレシア達の姿があった。

「……ミサカ、ここから俺は説教しなきゃダメ？」

《……主人公はここで説教でしょう》

「クロノに放り投げるか？」

《流石マスター、シリアスなのにギャグに走る》

「いたって真面目なんだけどな」

一瞬の気の緩み、まるでそれを狙ったこのような背後への衝撃。  
そのまま空中から下へと蹴り飛ばされた。

「今度は何だよ……」

ワイヤーは奪われた。奪ったてことはまだ落とす気はない。  
そこまで考えてから落ちながら急回転。蹴った相手を見る。そこには

「・・・スプリング？」

「同じことは二度も言わないぞ」

「・・・油断ね」

「・・・まだ余裕があるか。だが・・・これでどうだ？」

スプリングは俺から奪い取ったワイヤーを見せつけるように出す。

「出来ねえよテメエには。わざわざ俺にフェイトを助けるなんて言う様な奴には」

「・・・プレシア・テストロッサはフェイトを道具のように扱った」

「・・・だから？」

「ハッキリ言っでやる！なんでお前はあの女を許せる！？なんであんな奴まで救う！？なんであんな奴まで救える！？罪のない者に罪を作らせるような奴を何故救えるんだ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何故……何でなんだよ」

「俺がプレシアを救う理由？……そりゃあ……」

「簡単だ。断言もできる。」

「フェイトがそれを望むからだ」

「何を言っで……」

「俺はプレシアの事を、大事な母親だと言ってるフェイトのために救ったんだ。」

「フェイトのその思いを伝える為に救っただけだ」

「そんなの屁理屈だ」

「それも立派な理屈さ」

「しかし・・・」

「テメエはなんでそこまで嫌う？理由ぐらい言ったらどうだ？」

「ここが重要。何のために怒ってるのかで対応を変えないと。  
だが次の言葉は予想外だった。」

「・・・分からない」

「分からない？」

「・・・何故か分からない。けれど許せないんだ」

「・・・困ったな」

話を聞こうにも分からないなんて言われちゃお終いだ。  
だがまあ

「プレシアを如何するか、それは俺たちが決めることじゃない。フ  
エイトが決めるんだ」

ある方向を見るよう促す。

そこには今にもプレシアに駆け寄っていきそうなフエイトが居る。

「そのために自分の意思を曲げるの？」

「これが俺の意思さ。フエイトを救う。それ以外はいらない」

俺は考えるのが嫌いだ。目的はシンプルに、一つ重大ながあれば  
十分だ。

「ならば高町なのはいいの？」

「……それは盲点だった」

《だからいつも言ってるでしょ！しっかり考えて行動しなさいって！》

「ゴメンミサカ！誰がシリアスにって言った！？」

《真面目にって言いました》

「屁理屈いうんじゃないねえ！」

《屁理屈も理屈です》

「人の台詞を勝手に使うんじゃないねえ！」

「よくもまあこの状況で漫才が出来るな」

「《凄いだろ／凄いでしょ》」

「…………ああ凄いよ」

俺の右手は幻想どころか空気まで壊す。

その名も『シリウスブレイカー真剣殺し』…………よし忘れよう。  
ん？

「チッ、早いな。おいスプリング、時間を稼げ」

「なぜ？何から？僕に何のメリットが？」

「あれ」

ビシッと指さす。その方向には黒アクセラレータの集団。

「メリットは…………喋り方直さなくていいのか？俺はばらしてもいいが」

「…………意地が悪い」

「ま、ガンバレ」

そう言うつとやれやれと言いながらも両手に剣を持ち突っ込む。  
俺は……主人公らしいことでもしますか。

プレシア side

私は確か次元断層の落ちた筈だけど意識が朦朧としてよく分からない。  
い。

目の前には金髪の少女が心配そうにこちらを見ている。

「アリ……シア？」

ついに私の念願が達成されたのかもしれない。  
そう期待していたがどうやら違うようだ。

「ううん、母さん。私はフェイトです」

「フェイ・・・ト」

あれだけ拒絶したのにまだ自分を心配してくれるなんて。

「心配・・・してくれるの？」

「だって私は母さんの子供だもん」

・・・この子は確かにアリシアとしては失敗作かもしれない。  
けどフェイトとしては成功作・・・

「水を差して悪いが作品じゃないぞ」

「あなたは確か・・・」

「当麻！」

「プレシア・テストロッサ、あなたにチャンスをやろう」

「チャンス？」

「たった一つ。どんな願いも叶えてやる。願いを言え」

「私の願い、それは……」

アリシアの蘇生。そう答えようとした。  
けれど……

「……私の代わりに、フェイトに、楽しい思い出を作っであげて」

「……本当にそれでいいんだな」

よく考えればフェイトはアリシアの記憶と、私に傷つけられた記憶しかないのかもしれない。

アリシアとの過去と未来を取り戻そうとした代わりにフェイトの今を奪ってしまった。

なら今度はフェイトに今をあげたい。

「母さん？何言ってるの？これから一緒に暮らして思い出を作ろうよ」

この子は私が重い病気にかかっていることを知らない。

「……ごめんなさいフェイト。今まで母親らしいことができなくて」

「母さん……」

「本当に、なんで気付かなかったのかしら」

何が人形よ。何ができそこないよ。

ここに居るのはもともとアリシアじゃなかった。  
ここに居るのはアリシアの妹のフェイト。

「これじゃアリシアに嫌われちゃう」

「嫌ってなんかないよ」

ただの眩き。それに返答したのはフェイトではなく。

「え？あなたは・・・」

「アリシア？」

「久しぶり母さん。初めましてフェイト」

薄く輝くアリシアだった。

当麻 side

「本当にこんなこととして良かったのか？」

「そんな事言われたってねえ」

近くに来たクロノに答える俺。

今二人が観ているであろうアリシアは俺が精神操作系の魔術で見せている幻だ。

・・・ということになってるが

『えっと・・・ごめんね、手伝わせちゃって』

『気にしなさんな。アリシア・テストロッサ』

『アリシアでいいよ』

『俺は当麻、上条当麻だ』

・・・まあそう言うことで本当は、本当にアリシアがしゃべってる感じです。

いや俺もビツクリ。最初はアリシアから何かが発せられてるのに気付いて『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>で一点に集中させたら・・・出てきた。

『人生何があるか分かりませんな』

『ほんとそうだね』

『《あなた達ほど特殊な人もいませんが》』

『いやー照れるなあ』』

『《褒めては無いですからね!》』

幽霊(?)とおしゃべりした挙句、まさか漫才みたいなことまで出来るとは・・・ビツクリだぜ。  
といっても俺にもやることがあるため・・・

「ここら限界か？よし、あいつらを連れて逃げろ」

「当麻君」

「なんだいつの間にかいたなのは？」

「にゃ！？ヒドイの！ー！」

「俺はまだ後片付けが残ってるからな」

上を指さすと黒アクセラレータ―数人とスプリングが渡り合っている。

上手く攻撃を避けきっていて致命傷を受けていないがそろそろつらそうだ。

『当麻、母さんが呼んでる』

『・・・分かった』

プレシアの方に行く」と

「ゴホッゴホッ……フェイトの事もアリシアの事もありがとう」

「ああ、どう致しまして」

「ほんと嬉しかったわ。またアリシアに会えて、それにフェイトともきちんと話せて」

「それは良かった」

「本当はまだ生きてかったけど……もう終わりみたい」

「……生きたいか？」

「ええ……でも、もうダメなのはわかるわ」

「……」

最後に1つ聞くことがある。

「アンタは二人の事が何よりも大切か？」

「ええ、当然よ……もう疲れたから眠るわ……」

「母さん！」

息は……してない。最近行った無理が祟ったのだろう。  
フェイトがプレシアに抱き着いて泣いている。  
その後すぐに転移して皆はアースラに帰っていった。  
俺は

「待たせたなスプリング!!」

「もう無理……しんどい」

すぐに飛びスプリングの傍による。  
てか

「素が出てるぞ」

「誰も居ないんだろ？ならいいよ」

「今までご苦労さん」

春樹「スプリング皆さんOK？」

《割と重大な真実が軽い！そして皆さんて誰ですか！？》

「最初からヒントは多かったよな」

「春とスプリングだしね」

そんなくだらない話をしてる最中も敵は襲ってくる。

右から来たのを『イマジンブレイカー幻想殺し』で弾く。

「お前の前世は？」

「それが覚えてないんだよ。子を疎かにする親」

左から来たのを木原神拳で顔面を潰す。

「・・・何で転生させられた？」

「・・・世界を救うため」

正面から来たアクセラレータアクセラレータの反射を俺の『一方通行』で反射し蹴り飛ばす。

「うわ・・・反射を反射って」

「『<sup>アクセラレータ</sup>一方通行』だって能力だ。反射ぐらいできる」

「なんか決め技無いの？」

「ある。お前は？」

「能力のコピーしか今は出来ない」

「……俺か」

「時間稼ぐからよろしく」

「……はいはい」

さてと

「自分の体で人体実験か」

《きつと成功しますよ》

「神……には祈りたくないな」

春樹 side

さつき何気ないように流したけど、問題が一つある。それは

当麻と僕の転生させられた理由が同じ

僕は転生者が暴れているから世界が壊れる。よってそいつを倒してほしいって聞いた。

で実際誰かと思ったら当麻だった。

もともと気づかずに親友になって、どんな奴か分かってたから、世界を壊すような奴じゃ無い事は知っていた。

けど間違いがあるかもしれないので色々やった結果……絶対当麻じゃないという結論が出た。

しかし他に居たのは……腐った脳みそを持ったような奴だけ。しかもそいつじゃなかったらしい。

「ごちゃごちゃしてきて分からなくなってきたが問題は一つ。

当麻と僕の神、どちらが善かだ。

だがその前に……

「ここを乗り切らないと」

時の庭園の天井が降ってくる。それを避けながら敵の一体に雷撃を  
まわせた拳を木原神拳でぶつける。  
両方から来たのを下がって避ける。

僕的能力は自由度がそこまで高くない。

誰かが使った技をコピーするだけ。

反射が出来るのは『一方通行』アクセラレータで反射している状態を真似ただけ。

雷が出せるのは『発電能力』エレクトロマスターで雷を出してる状態を真似たから。

ただ僕は当麻ほど魔力は少ないので

「バインド！」

魔法も使える。

ただ多勢に無勢、こっちはさっきから全力でやって疲れてる。さらに木原神拳も完全じゃないらしく手にダメージが溜まる。そんな中完全に避けきれぬわけもなく攻撃が掠め始める。そしてついに

「うわっ！」

軽くだが一発当たった。

それによつて吹き飛ばされる。

それで僕の人生は終わり……なんてなるわけもなく

「演算終了だ。お疲れ」

当麻が『<sup>ダークマター</sup>未元物質』で敵を吹き飛ばした。

《あとは全部マスターに任せておけば絶対、きっと、たぶん、おそらく……何とかありますよ》

「ミサカみたいに信用……いや信頼してないな!？」

「ハハ、漫才はいいから切り札見せてよ」

「……まだ完成してないからな。初チャレンジだ」

「それってどういう意味？」

僕の質問に答えるでもなく、ごく自然な動作で先ほど作り出した『  
ダイクマター  
未元物質』を

ゴクン

飲み込んだ。

「え？」

第三十八話「少女の思いと母が交差するとき2」（後書き）

作「はいスプリングは春樹でした」

当「じゃあ次の話」

春「いや待って！ここはもっと驚くところ！」

当作「……な、なんだってー」「」（棒読み）

春「もういい……」（涙目）

作「いやー禁書目録映画化、一体どんなのでしょうか？」

当「ここに持ってくるか」

作「楽しみだな……でも受験勉強で見れないんだろっな」

当「はいはい頑張れ」

春「てかさなんで羽なんか飲み込んだの？」

当「言っているのか？」

作「大したことじゃないよ」

当「……まあ次回でいいか」

当「さてと時空の旅人さん、龍賀さん、天照大神さん、感想ありがとうございました」

作「皆さん気長に次話を待ってもらえるとありがたいです！」

作当春「「それではまた次回！」「」

春「あれ、当麻なんで右手に手袋？」

当「ん、気にすんな」

第三十九話「親友と少年が交差するとき」(前書き)

さて前回の続きです。

春「当たり前だね」

当麻も居ないのでサクサク本編へ、どうぞ

### 第三十九話「親友と少年が交差するとき」

当麻 side

目の前で春樹が驚いてやがる。  
それもそのはず、目の前で羽を食ったのだから。

「ミサカ・・・身体に異常は？」

《まだ人間です》

「・・・まだね」

反射というのは厄介だ。

『イマジンプレーカー  
幻想殺し』で消せるが殴るしかできない。

『アクセラレータ  
一方通行』で反射できるが拳以外の能力は反射される。

結局どっちの攻撃も拳でしかできない。聖人の力を使おうにもまだ無理。

左手で下手に能力発動したら弾かれて俺がダメージ。  
ならその問題を解決するためにやるのは・・・

「体の強度を変化、硬質化させる」

『イマジンブレイカー 幻想殺し』は異能は消すが人体は消さない。

だから『ダークマター 未元物質』で人体を改造する。

この能力はこの世にない物質が作れる。

今作ったのは体の構成物質を変える事が出来るはずの物質だ。  
何が言いたいのかというと

「『ダークマター 未元物質』で人体を強化して、『イマジンブレイカー 幻想殺し』を騙す」

《簡単に言えばそうですね》

実際は危険だ。

『ダークマター 未元物質』を取り込んだ俺の体を異能と認識されたら俺は消える。  
念のために『アクセラレータ 一方通行』で右腕に全ての異能を寄せてみた。

そうすれば消えるのは右腕で済むだろうという俺の計算。結構痛手だが。

だがまあ賭けには・・・勝った。

こうしてる間も俺の体・・・『イマジンブレイカー 幻想殺し』が宿った両腕が変化する。

真っ赤に染まった・・・まるで血でが付いているかのような色。  
甲羅のような皮膚。短く黒い爪の様なもの。そして手の甲の中心に  
光る青白い何か。

「これは・・・人の手には見えないな」

《気にするのは後です》

「あとはお片付けだ。十分で終わらせてやる」

一気に周りの黒アクセラレータを薙ぎ払う。  
その時遠距離で何かしてこようとしたやつがいたが

「無駄だつてなあ！」

全力で右手を振るう。  
するとまるでその後を添うように出現した、赤黒く巨大で長い腕の  
幻影の様なものが弾き飛ばす。

「如何したよ！その程度か！？」

そのままの調子で右腕を振り続ける。

俺はたぶん……この腕を知っている、そう思いながら戦い続ける。  
そして

「オラッ！「クキッ」……あ、腕攣ったかも……」

《カッコ悪！》

「ヤバイヤバイヤバイ。いたたたた」

《我慢しましょうよ！》

まあそんなくだらない事をしている間に全部倒した。  
右腕？だんだん痛みを感じなくなった。

「カッコよく決まらないのが俺か・・・ほら春樹」

「う、うん」

何故か倒れている春樹に右手を伸ばす。  
だが春樹はそれを取るのをためらった。

まあ・・・見た目は赤黒くて・・・化け物にしか見えないからな。

そう思つて手を引つ込めようとすると・・・

普通に右手を掴み起き上がってくる。

・・・あれ？

「怖くないのか？」

「何が？」

「いやこの手。もう人じゃ無いじゃん？」

何となくを装つて聞いてみた。ここで怖いって言われたら・・・結構ショックだが事実だしな。

「えっ？今まで人だと思ってたの？」

「なるほど、お前に気づきはないのか」

「ない」

「……まあ確かに今更か。」

「何もしかして、そんな風になったから皆に嫌われるって？」

「……普通そうだろ？」

「ハッハッハ、大丈夫だって。恋は盲目って言っし」

「なぜその言葉が出てくるか知らねえけど……まあサンキュ」

「ハア……殺したいほど憎らしい」

「なんでだよ!？」

そう言いながら春樹に背を向け、転送してもらえよう連絡する。

そして・・・

春樹 side

なんて言うか凄いと思う。

黒いのを一気に薙ぎ払って終わり、僕の苦勞は?と問いたくなった。  
しかもあの手は・・・何だろう、変な感じがする。

そんな事考えていると当麻が手を出してきた。

「カッコよく決まらないのが俺か・・・ほら春樹」

「う、うん」

差し出された手を見た瞬間、やっぱり何か違和感、特に嫌な感じがあった。

体の中の何かが当麻の右手を拒絶するような・・・  
そのせいで言いよんどってしまったけど普通に右手を掴む。

「怖くないのか？」

「何が？」

「いやこの手。もう人じゃ無いじゃん」

つくづく当麻は気にし過ぎだと思う。

所詮見た目なんて今更、大事なものは中身ってことに。  
けどそれを面白く言う方法が思いつかないので・・・

「えっ？今まで人だと思ってたの？」

「なるほど、お前に気づかいは無いのか」

「ない」

とりあえず馬鹿にしてみる。気づかい？今更だろ。

「何もしかして、そんな風になったから皆に嫌われるって？」

「・・・普通そうじゃね？」

・・・普通じゃないからなあ。  
まあどんな姿になっても高町さんとテストロッサさんは気にしなそうだし

「ハッハッハ、大丈夫だって。恋は盲目って言っし」

「なぜその言葉が出てくるか知らねえけど・・・まあサンキュ」

・・・こいつはまだ気づかないのか？  
何だろう

「ハア・・・殺したいほど憎らしい」

「なぜに!？」

そう言いながら当麻は背を向ける。  
それに対して僕は

剣を突き出した

「え？」

自分でもよく分からない。  
勝手にいつの間にか剣を握り、それを当麻のに向けて突き出していった。

「と、当麻!？」

慌てた僕はすぐに当麻に呼びかける。  
しかし

「なっ、体が動かない!？」

「やっぱりか……」

「当麻、無事なの？」

血を出しながらも剣を引き抜き投げ捨てる当麻。

「お前……そんなに俺の事が嫌いかな？」

「え……い、いや!僕は!」

「冗談だ。……どうせお前は何か弄られてるんだろ。」

「そんな事・・・」

僕が否定しようとした瞬間また体が勝手に動き出した。

「ハッ、哀れな人形か？いや哀れなのは俺の前に出てくる勇気のない神様か？」

当麻 side

勘付いてはいたが・・・やっぱりやりづらい。

ハッキリ言って物凄く焦った。春樹は本気で俺の命を狙ってきたかと思った。

違ったようで安心したいのだが、しかし春樹・・・の体を乗っ取った何者か、いや神は気にせず攻撃してくる。

「よし春樹待て！」

「いや止まらないから！」

厄介なのは・・・超能力も魔術も効いてないところだ。

『メジャーハート心理定規』で心の距離を無理やり縮めても無理。

『フリススキャルプ北欧王座』を何発当てても倒れない。

やはり心は春樹のままか。体の自由を奪われているってところか？  
ダメージを溜めさせようにももうすぐこの場所は崩れるだろう。  
もしかしたらダメージを与えても止まらないかもしれない。  
・・・前言ったように殺すのは簡単だ。隙があり過ぎる。

だが殺しては駄目だ。

しかし何をして倒れない。

「もどかしいねえ！まるでアクセラレータ対ミサカワーストみたいだ」

《状況はもつと酷い気もしますが》

「ああもう止まれよ！」

春樹が必死に止めようとしているようだ……あいにく止まる気がしない。

さてどうしたもんかと考えていると……

「……もう嫌だ。殺して」

「本人の許可を貰ってもやりたくないかな！」

「いいんだよもう！早くしてくれ！」

《……本当に殺される気ですか？》

「俺はやらねえぞ！」

春樹の剣を両手で弾く。また新たな剣を作りだし斬りかかってくる。ハッキリ言っこのままじゃジリ貧だ。  
まあだからと言って諦める理由にはならないが。

「何が楽しくて親友殺さなきゃならんだ!」

「けどこのままだったら当麻まで!」

まるで泣きそうな顔で言ってくる。

「このままだったら二人とも死ぬんだよ!」

「ああそうかい!だからってお前を殺していい理由にはならないけどな」

「高町さんたちは!?!」

「アイツらは心配だが大丈夫だ」

「……プレシアと約束したフェイトの幸せは!?!」

「……だからって諦めきれるか!」

さてどうするか、ここで死ぬか、殺して生きるか。

・・・結局はどちらも俺にとって地獄・・・やることがサイテーだぜ神様。

そこで考え事をしてたのが災いしたのか隙が出来てしまった。

その隙を狙った攻撃、それが

「当麻！」

「ヤバッ！」

それが当たる事は無かった。

俺はそれを弾くことに成功した。

代わりに俺の左手が春樹の体を貫いた。

反射的な行動によって春樹を・・・

結局俺はとつさに自分を守り春樹を殺した。

自分の命惜しさに親友を殺した。

「……え？あ、嘘だろ？俺が春樹を……」

「ストップ当麻。そう言うのはいいんだよ……」

「……ゴメン」

「いいから……逃げてよ」

「……悪かった」

「いつまた敵が来るか分からないんだろ？……だったらさっさと帰るべきだろ」

「……」

「ああもつ！罪悪感感じてる暇あったらさっさと神様を倒してよ！」

爆発音が近くなってきた。……だが関係ない。

どんなに気丈に振る舞おうとしてもできそうにない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ハア・・・・・・・・よいしょっ！」

「な!？」

「・・・・・・・・頑張つてね」

行き成り春樹が俺を蹴り飛ばした。  
次の瞬間、春樹が居た場所には瓦礫が落ちてきた。

「おい・・・・・・・・春樹？」

《・・・・・・・・マスターもう諦めてください》

「おい・・・・・・・・春樹・・・・・・・・」

《ここでマスターが死んだら、なのはさんやフェイトさんはどうな  
ると思ってるんですか!!》

「…………くそ」

結局俺は何がしたかったんだ？

何が救いたかったんだ？

こんな力があるのに何故救えないんだ？

「くそ!!」

《マスター、アースラから転送ポートを開くそうです》

「…………ああ」

《…………なのはさんたちの前で泣いたら面倒ですよ》

「…………ああ」

《・・・頑張ってください》

「・・・ありがとう」

《・・・まだ、大丈夫ですね》（ボソ）

「ん？」

《いえいえ》

俺は涙を拭う。

余計な心配を誰にも掛けないため。

誰にも春樹の事を悟られないため。

この腹の底にあるドス黒い・・・敵意とも殺意とも取れない気持ち  
を隠すため。

「よっすただいま！」

「」「当麻（君）！」「」

アースラに戻った直後待っていたのはみんなの心配そうな声だった。

「え〜と、どうした皆？」

「君が死んだんじゃないかと思ったそうだ」

「お前は思っただけじゃなかったわけ？」

「今回は両腕両足が無事みただけだからな」

クロノは案外冷たい・・・それが逆にありがたい。  
・・・あれ？

「フェイトは？」

「彼女は・・・母親と一緒にだ」

「・・・どこ？」

「アッチだ」

「サンキュ」

クロノが指さしたほうへさっさと行く。  
するとフェイトがプレシアの遺体の前に居た。

「・・・当麻？」

「おつとも」

「無事だったんだ・・・良かった」

「心配かけたみたいだな」

周りを見渡す。目的の物は・・・あった。

「フェイト、悪いが部屋から出てくれるか？」

「うん」

フェイトに退出してもらい目的の物・・・アリシアが寝かされているベッドに近づく。

「ミサカ、連絡は？」

《ちょっと待ってください・・・よし、準備完了です》

「じゃあ頼む」

ミサカに連絡を取らせる相手。それが目の前に現れる。  
その相手は・・・

「デメエが神様か？」

そうですね。覚えてないんですか？

「・・・・・・・・」

知ってます。記憶が消えたんでしょ

俺が会ったらしい、名前も知らない、アレイスターの姿をした神様だ。

すぐにそちらに行きます。待っていてください

「ああ待っててやるよ……」

盛大な準備をしてな。

第三十九話「親友と少年が交差するとき」（後書き）

あとがき」」ナ」

なんて言うか……ここに居ていいの？

春「まあ暇なら働いてって神様に言われたし」

ほ、ほう。

春「それより当麻は？」

アツチの方でミサカに励まされながら体育座りしてる。

春「……まあ喜んでいいのかな？そんだけ悲しまれて」

良いと思うよ。

春「時空の旅人さん、天照大神さん、  
A r i s h i a さん感想ありがとうございました！」

それでは次回も気長にお待ちくださるとうれしいです！

第四十話「少年と神が交差するとき」(前書き)

いちおこれで無印は終わりにするんですね？

まあ細かい事はよく分かりませんが本編へどうぞ。

#### 第四十話「少年と神が交差するとき」

アースラの中の一つの部屋そこには二人の人物がいた。

一人は薄ら笑いを浮かべているアレイスターの姿を借りた神。

もう一人は今まで誰にも見せたことがないような目をした上条当麻の名を借りた人。

「用件は分かっています。死者の蘇生をしてほしいのでしょうか？」

「・・・・・・・・ああ」

「アリシア・テストロッサ、プレシア・テストロッサそして吉井春樹、その三名を生き返らせてほしいのでしょうか？」

「・・・・・・・・ああ」

「フフッ、必死に隠していますが何を考えているのかは分かりますよ」

「・・・・・・・・・・」

「目的はそれですが本当は……私を殺したいのでしょうか？」

ピクツと当麻が少し反応する。

「理由も私が言った方がいいですか？」

「……春樹も神様に世界を救うように言われたらしい」

「そうらしいですね」

「率直に言う、テメエは本当に世界を救う側なのか？」

「さて、どうなのでしょう」

「無駄口はいらない。さっさと聞かれたことだけ答えろ」

普段とは全く違う態度、しかしそんな当麻を見ても神は薄ら笑いを

止めない。

「おお怖いですね・・・その手にあるものをなおしたらどうです？」

神はそう言つが当麻は何も持っていない、いや持っていないように見える。  
しかし

「・・・気づいてたか」

そう呟いた直後当麻の右手に一本の日本刀が現れる。

「七天七刀・・・なるほど神殺しの術式『唯閃』ですか。後は・・・  
・刀は光を屈折させて隠していた」

「ああ・・・大当たりだよ」

用意していた術式、技術まで看破されたものの当麻の顔に焦りはない。  
しかし

「素直に降参してはどうです。策なんかないでしょ？」

「ほざいてる」

「……流石といったところですか、その諦めない所は。などと言ってる間に1つできましたか」

「……」

「どんなものか言えば諦めますか？」

「……いやいい。用件を言え」

神によると当麻はまだ策を思いついたようだが、それすらも見破ったという。

遂に観念したようだがまだ鋭い目つきを止めない当麻。  
そしてそれを見ながらも笑い続ける神。

「用件はあなたの望み通り・・・蘇生です」

「・・・誰のだ」

「疑り深いですね。まあ疑うべきですが。さてと・・・ここであな  
たに試練です」

そう言いながらどこからともなく光の球を出す神。  
それには・・・当麻が最初に求めていた者たちの姿が映っている。

525

「あなたはこの中から二人助ける事が出来ます」

「・・・」

「今すぐとは言いません。選んでください」

「・・・」

「誰を選ぼうと私は何も言いません」

フェイト プレシア アリシア  
仲間の母親と姉妹そして自分の親友。<sup>ハルキ</sup>

三人のうち二人だけ、それが簡単で、難しい。

普段通りの薄ら笑い。それが普段以上に忌々しく聞こえるのは気のせいだろうか。

「じゃあ・・・」

「はい」

右手に持った七天七刀が震えている。

それが辛い選択のせいか、はたまたそんな選択をさせる神への怒りのせいかは本人にしか分からない。

「俺は・・・」

遂に手から七天七刀が落ちる。

先ほどの質問に対して当麻は

当麻 side

「俺は………」

誰か二人……  
アリシアは救う、これは絶対だ。  
俺は春樹を救いたい、そしてフェイトはプレシアを救ってほしいだ  
ろう。

「俺は………」

……フェイトはもうプレシアを諦めてるんじゃないだろうか？  
なら春樹を……

「アイツを……………」

いや、だからって見捨てていいって訳じゃない。  
でも、それを言ったら春樹だって…………

「俺は……………」

何で二人だけだよ…………何で皆じゃないんだよ。  
何で……………なんで……………ナンデ

「俺は!!」

床に落ちた七天七刀の先端を一気に踏む。  
そして持ち上がった柄を握り、一気に抜き放ちながら神様へ突きつける。

「俺は全員救う！．．．絶対に．．．」

「．．．．．」

遂に神様は笑みを浮かべなくなった。  
そこにあるのは．．．完全な無表情。

「誰に何と言われようと．．．絶対に．．．」

「今度こそ、ですか．．．」

「今度こそ．．．えっ？」

今度こそ？なんで？俺は春樹たち以外は．．．

「今度こそ全員を救う、その為に私をそれで脅している。そういう認識でいいですかね」

「あ、ああ・・・」

自分でもわけがわからないが今はどうでもいい。  
とにかく神様を・・・

「・・・まだ甘いんですよ」

その言葉と同時に俺の体が崩れ落ちる。

「な!？」

痛みも苦しみも何も感じなかった。体も動かない。  
まるで神経がだめになったように。

「なに・・・を？」

「ご想像通りの事ですよ。実際あなたを殺すのは簡単。どんな異能も動けなければ意味がない」

神様が俺の傍に寄ってくる。

「油断をしたからこうなった。油断をしたから春樹さんは死んだ」

「だま・・・れ・・・!」

「・・・根性はそれなりですね。でもそんなものじゃ勝てません」

「・・・!？」

まだ何か言おうとしたが遂に口も動かなくなった。

「そして、油断をするから・・・なのはさん達を私に殺される」

「!？嘘・・・だ」

「疑っているならやって来ましょうか？追加もいいですよ。別に何人殺そうが構いませんし」

行き成り逆を向く。その先には・・・扉。  
まさか本気か！？

「私は本気です。止めたければ止めてください。止まるかはわかりませんが」

止める！！そう叫びたいが声が出ない。

唯一動く右腕、神様の奇跡をも打ち消す『イマジンプレーカー幻想殺し』が宿り、『ダ未元物質』で変質したおかしな腕で体を引きずる。

ここでアイツを倒せるとしたらそれはきつとこの腕だけ。

アイツらを生き返らりたい。だがそれで他のやつ等が死んだら意味がない。

だからここでアイツを殺す・・・絶対に。

三人称 side

見向きもせずには扉へ向かう神、それを必死に止めようと・・・殺そうとする当麻。

最初に会った時とは全く違う状況。

（とどけよ、とどけよ！！）

体を引きずるのを止め右手を神に向ける。

（さっきみたいにデカくなればいい！さっきと違ったっていい！なんでもいいから！）

必死に当麻が願う。

それに応えるように右手が淡く輝く。

そして先ほどよりも巨大な右手が現れる。

（一撃で決める！）

慎重かつ素早く狙いを定め一気に伸ばし一気に叩き潰す。

ズガンッ！！

床にひびが入るほどの力、しかし油断はできない。

（・・・やれたのか？）

巨大な腕のせいで上手くいったかが分からない当麻。

そしてその腕が粒子のようになって消える。

その腕があつた場所を見る当麻。

そこには・・・

春樹と謎の人物がいた。ちなみに神はその奥に居る。

それは見様によっては神が春樹になったようにも見える。

「・・・ハア、なんて間の悪い」

神様が春樹になった（勘違い）

親友にまた殺された（？）

なんか巻き込まれた（笑）

そんな三人の思いは同じだった。

「「「なんじゃこりやー！！？？」」」

「もう少しばかりシリアスが続いてほしかったんですが・・・」

《・・・ドンマイです》

当麻 side

「何事！？春樹が神様！？なんか変な人居るし！？あ、春樹の後ろに神様が・・・えっ春樹生き返った！？」

「えっなんで僕また貰かれた！？まだ生き返って十秒も経ってないよ！？」

「・・・俺何も関係ないよな！？何でとばっちりくらった！？」

「てかあんた誰！？」

「そこからか！てか春樹、お前には教えただろ！」

「・・・春樹なのか？本当に？」

そう尋ねられたらどれだけ楽だろうか。

自分が殺した相手に話しかける、そんな事が出来「——」あ、当麻元氣？」

「・・・」

「お前にとって勇氣は、何それ美味しいの？って感じの奴なのか！？」

「行き成りどうしたの!？」

・・・まあいいか。今更だが春樹は俺を恨んじやいない・・・多分。

そう考えると神様にキレたことが恥ずかしくなってくる。  
どうせなのはたちを殺そうとしたのも嘘だろう。  
体ももう動かし。

「あら、分かつちやいました？」

「まあな」

だつてなのはたち殺したらこの世界が滅びるとかなんとか言つてた  
気がするし。  
そんな事したら本末転倒だし。

「まああなたの本気に興味がありまして」

「神様ってのは皆サイテーなのか？」

「よくあるじゃないですか。仲間がやられそうなときに真の力を発揮する」

「どこの主人公だよ」

先ほどとは違い普通（？）の笑みを浮かべながら言ってくる。  
「……やればよかった。  
まあ悪いのは八つ当たりしようとして騙された俺なんだが。」

「まあそいつは許してやってくれよ」

「あんた誰だ？」

俺の前、春樹のすぐ傍にいる謎の男に訪ねる。

「俺はその奴と同じ神様だ。名前はゼウス。まあ気安くゼウス様とでも呼んでくれよ」

軽い調子で言ってくる。てか気安くないだろ。ん、ゼウス？確か最高神ゼウス……

「ゼウス様、急がないと時間が……」

「……本題に入るぞ」

時間？本題？いったい何のことを……

「それは今は気にしないでください。後で話しますから」

「……分かったよ」

用は神様がここに入れる時間は少ないってことだろ。黙って聞かないな。

「実はな・・・実際俺たちが神様って保証はない訳だ」

「・・・へ？」

こんなに異常な力を持っけていても？

「そう異常だ。だがそれはお前たちにとってだ」

「・・・あなるほど」

だいたい分かった。

普通の人から見た俺たちみたいなのか。

普通のなかの異常はそれが人であっても神格化されたりするからな。

「まあ神を名乗っちゃいるがな」

「てことはあんた等も——」

「この話はこれで終了。次はお前の力の話だ」

いいように誤魔化された気がしなくもないがまあいい。  
ようするにゼウスは最高神（笑）てことか……まあ精々（疑）か。  
まあそれは置いて。

「この一風変わった右手？」

真っ赤な血のような色、真っ黒い爪、甲羅のような肌、人とは思えない質感、そして甲の中心に光る青い何か。

「うわっ、キモチワル」

「……………」

「冗談だ、冗談だから右手を下ろせ。な、暴力なんていけないぞ」

言われた通り手を下ろす。別に、オコッテナンカナイヨ。

「そつちじゃない。普通の・・・普通つてのもおかしいが魔術に超能力の方だ」

「それが如何した？」

別に異常はないけど。

「ちょっと制限をつけようと思う。修行とでも思ってくれ」

「え・・・」

・・・いや別にいいか。滅多に使わないのもあるし。

「で、何をどうするんだ？」

「魔術と能力、その二つの併用をできなくしてみるとか考えてる」

・・・なんか違うのか？

「あゝお前が作った新技、あれってどっちかだけで出せるのか？」

「俺の新技あああ！」

出せるけど、出せるけど！いろいろ新しく演算とか術式の組み立てとかしなきゃならない。

「うっ、『イノケンティウス魔女狩りの王』と並べたかったのに・・・」

「はいはい、それと、なんだっけ？あの名前をパクったやつ」

「オマージュと言ってくださいゼウス様」

「あ、地球の本棚か」

「合ってるけど違う！」

「懐かしいな……メモリを作ろうとしてスイッチを作っちゃったんだよな」

「……話が進みませんね」

何かツツコミを入れないといけない気がしたが……？宇宙きた〜！

「あれも無しな。使わないみたいだし」

「いや、使いたいけど」

「……記憶消去は勘弁してほしい。」

「まあ大丈夫だ。お前が自分の能力を使いこなせたら必要ないから」

「は？」

「もう時間がないな。じゃあこれで俺たちは帰るからな」

「あ、ちょっと待って」

そう言つて春樹が寄ってくる。あれ、帰るつてなんで？

「なんでつて顔してるね。簡単に言つとやっぱ僕は色々洗脳的なことされてるからそれを解除しなきゃならないんだ」

「前、あなたの両腕両足を春樹さんは切り裂りさきましたよね。親友に普通そんな事しませんよね」

「……………ああ」

「悩んでるけど普通そうなんですよ。けど春樹さんはした。それで何か異常があるのかと調べたら案の定でした。まあ暗示とでもいう

んでしょうかね。色々有るんで解こうかと」

「……生き返らせるんだろっな？」

「そこはたぶん大丈夫だよ。まあ待っててよ」

などと言いながら春樹に小さな袋を渡される。  
何だこれ？

「んゝ僕の部屋の鍵。何かあるかもしれないからね。何でも使っていいからね代わりに姉さんに言い訳よろしく」

「ああわかった」

「あと最後にその右手を見せてください」

「なんで？」

「死者の蘇生も今回だけは許します。しかしそればかりは見逃せません」

・・・？ゼウス様は特に何も気にしてなかったんだけど。

「あの人は軽いんですよ。実際はその腕・・・危ないですよ」

「なにが？」

実際も何も『イマジンブレイカー幻想殺し』が堅くなっただけじゃないの？

「とにかく危険なんで没収です。右手を出してください」

「へいへい」

取りあえずおとなしく右手を出す。

すると神様はどこからか鋭利な刃物を出して・・・

「えいつと」

「ぎゃあああ!!」

「僕もやったけどグロテスク!!」

右腕をすっぱりやられた。

うっ……これ意外と痛いだよ。最初は気絶しちゃうくらい痛いのよ!

「そしてこの腕をくっ付けてオーケーです」

「……もう絶対あんなことしない」

腕斬られたくないから。

取りあえず渡された腕をくっ付ける。

「ああ後」

「ん？」

神様が耳元に顔を寄せる。

「仲間は信頼できる人じゃないとだめですよ」

「は？」

「そして私もあの人も信用できない。言ってる意味わかりますよね？」

「一体どういう意味だ？これって遠まわしに自分を信じるなって事だろ。」

ふつつ黙っとくもんじゃないのか？

「けど私はあなたの味方でいたいんです。ではでは、行きましょう春樹さん」

「うん」

そのままゼウス様の所に行く春樹と神様。  
そして

「じゃあね」

光とともに消えた。

・・・謎が増えた。

「ミサカ、疑問点を上げてみる」

《なぜ神様はゼウスと自分が疑われるようなことを言ったのか、なぜ必死にマスターの腕を元に戻そうとしたのか、というか彼らは何者なのか》

「あと春樹はなんでこんなものを渡したのかだな」

春樹に渡された袋の中には今まで皆で集め続けていた物、ジュエルシードが入っていた。

「……これは嫌な予感たつぷりだな」

《おや、アリシアさんたちが起きそうですよ》

「……考え事は後だな」

取りあえずジュエルシードを隠す。  
するとアリシアが起きてきた。

「おはよう眠り姫。体の調子はいかがかな？」

「ん……あと五分……ムニヤムニヤ」

「ホントに寝てたのか!？」

「いや、冗談だよ」

「ヨコッという感じで起きる。」

「・・・私生き返ったの？」

「そうらしいな。何が起ったかは聞いてくれるな」

「うん・・・でも」

「どうかしたか？」

折角生き返ったのに嬉しみなさそうな顔。なんだ？

「お母さんがいろんな人に迷惑かけちゃったな〜って」

「ああ・・・気にすんなよ」

どうせ俺が揉み消すし。

「でもフェイトに迷惑がかっちゃって・・・」

「ああ・・・だからフェイトに会わせる顔がないみたいな事か？」

「うん・・・私のせいでもあるし」

「何だそんな事が」

「そんな事って・・・」

扉に近づく。

そこにあるのは一枚のルーンのカード。それには人払いの力がある。

「フェイトがお前たちを恨んでる？そんな幻想——」

そのルーンのカードに右手を思いっきり叩きつける。

「俺が殺すまでもない」

人払いが壊れたことによって扉が開く。  
そこには

「な、フエイト」

「え、扉が！？あ、別に盗み聞きしようとしてたなんてないよ！」

「・・・してたのか」

良かった〜人払いしといて。

神だの聞かれたりしたら不味いしな。

「え、お姉ちゃん？・・・え？」

「……うん」

視線が軽く彷徨う。あ、アリシアを見つけた。

「なんで…….?」

「詳しい事は言えないな。だがお前の母親も無事だ」

「お母さんも。お姉ちゃんも……良かった……」

本当に、心の底から言うフエイト。

「なんで……そんな風に言ってくれるの?」

それに困惑したように言うアリシア。

「私のせいでフェイトは傷ついたのに・・・何でそんなこと言ってくれるの？」

「・・・教えて貰ったから」

「なにを？」

「家族って言うのは・・・何にも代えられない存在だから大切にしたい方がいいって」

「・・・」

「さっき金髪のお姉さんに教えて貰ったんだ」

金髪金髪金髪・・・？あ、なるほど。

「それに、どこかの誰かさんは私たちを許して助けてくれたんだよ。家族の私が許さないでどうするの？」

いい笑顔で言ってくる。……どこの誰かさんは知らないな。

「どうだアリシア。これでもフェイトはお前の事を恨んでるって思ってるのか？」

黙って首を横に振るアリシア。

「じゃあもういいな。後はプレシアの様子でも見守ってる」

「当麻は？」

「そんな事はどうでもいいだろ」

フェイトが訪ねてくるが適当に誤魔化す。  
あ、そうだ

「フェイト、さっき教えて貰ったって言うてた言葉あるだろ」

「え、あうん」

「俺も良い事教えてやる。大切な家族以外でもいい、親友や好きな人だっていい、大事なものはその大切なものを護っていこうという思いさ」

「じゃあ当麻はその・・・好きな人とか護ってるの？」

「残念、俺には居ないよ。家族も好きな人も」

正確には忘れちまったんだけだな。

「じゃあはい！私が大切な人になってあげる！」

「ん？」

「ええっ！？」

すると急にアリシアが元気になって話に乗り始めた。

「大切な人なあ」

「じゃ、じゃあ私も当麻の好きな人に！／＼／」

「・・・大胆だねフェイト、私は親友って意味で言ったのに」

「え、あ、う嘘！嘘じゃないけど嘘！！／＼／」

「そんな恥ずかしがっちゃって」

「やめてよ姉さん！／＼／」

「・・・何言ってるんだこいつ等？」

さてと・・・

「……春樹の事はどうしようか？」

「……とりあえずここから脱出するか。」

アリシア達が寝ていた部屋から出てすぐに目的の人は見つかった。

「ここに居ましたか夏実さん」

「……はい？」

金髪って言ったらこの人ぐらいしか思いつかない。あ、アリサとフ  
エイトもか。  
いやフエイトは絶対違うか。

「どうかしましたか？」

「フェイトに助言、ありがとうございました」

「……………」

小首をかしげる夏実さん。どうやら分かってないようだ。

「家族は何にも代えられない存在だって」

「ああ。……あの子、どうでした？上手く仲良くできましたか？」

「ええ……とつても」

「……そうですか。それは良かった」

「……………」

なんだか元気がないようだ？

「それじゃあ私、失礼しますね」

って春樹のこと言わないと。

胃が痛みそうだ。いったい理由なんてつける？

・・・真実を言っては駄目だけど・・・嘘をつくのも気が重い。  
けど仕方ない、ここは得意の行き当たりばったりで！

「あの、夏実さん——」

「春樹の事なら知ってますよ」

「なん・・・だと？」

俺って心配損？何故春樹は俺に言い訳を任せたんだろうか？

「確か世界一周して見せるとか言って家出て行きましたよ」

「それは完全に冗談だと思いましたが」

なるほど、信じるって思ってたのか。  
まあ無事伝えることも伝え終わったし・・・

「それじゃ引き留めてすいませんでした」

「これ位いつでもいいですよ」

そう言つて去つていく夏実さん。ううんなんか元気がやっぱりない気がする。

ちなみに機嫌が物凄くいいと頭をギョツとしてきます。

そのねえ、まあ女性なわけで・・・当たるんですよ。何がって？言わせんな恥ずかしい。

《それがなのはさんに気づかれたあかつきには》

「死ねます」

《ちなみに妹達シスターズのというかお姉様オリジナルの体でもうれしいんですか？》

「ハ？寝言は寝て言え」

《……お姉様オリジナルブチギれますね》

上条が言ったらな。なんて言いながらまた移動。  
次の目的地は……

「どうもリンディ艦長にクロノ」

「どうだった？って聞かなくてもどうせ丸く収まったから来たんだろ」

「そつなの当麻さん？」

「収まってないさ。あいつらの罪の話がまだだ」

「……騙すとしてどうするんだ？」

「クロノも悪くなったわね」

「母さん・・・」

確かにクロノの言つとおり騙す。方法は・・・

「俺をジュエルシードを集めようとした悪役にしよう。フェイトとなのはは民間協力者にして」

「・・・フウ、隠すだけならまだしも情報の偽造は有罪、なんて言ってもするんだろ？」

・・・そんな溜息つかなかったっていいだろ。

「それで・・・魔法とは違う何かを使つたとか流してみるか」

「それでどうなるんだ？」

「……………興味を持って追いかけてくると良いんだが」

『裏』が。俺という餌に食いついてくれれば俺が纏めて…………

「……………どうしたいんだろうか？」

「ん？」

「なんでもない」

……………んなことして俺に何の得があるんだろうか？  
俺がやる必要があるんだろうか？

「ん……………」

……………んなもん決まってる俺には何の得もない、ただ周りの奴に

は得になる。だからやる。

俺は誰かさんたちを許したどこかの誰かさんだしな。

「考え事終了。そんじゃそのうち映像作るから頼むぞ」

「ああ、分かった」

問題は大量積みだな。さてまずは……

「春樹の家漁りでもするかな」

「……犯罪でもする気か？」

「ごめんクロノ。冗談だからそのデバイスをおろすんだ」

まったくこの程度で警察沙汰なんて……こういう時身内が警察に居たら楽だな……あ

「……ヤバイ。良い事思いついた」

「ん、どうかしたのか？」

「なあクロノ頼みがあるんだけど」

「……嫌な予感がするんだが」

「最高に良い事さ」

俺的に。

「……ことによって考えよう」

「実はねクロノ君、——を——欲しいんだけど」

「——？——一体何する気だ？」

「いや心配するな。お前に損はない」

「……つまり上に損が行くと言うわけだな」

「……止めてもいいぞ」

「いいさ、もう真実を知ってしまったからな」

何の話かって？ヒミツ。

「あとは……」

……え〜と何か忘れてる気が……

「当麻君！」

「そつだなのは忘れてたんだ!!」

「行き成りヒドイの！」

え、だって事実だし・・・

「先に帰つとくから」

「私も一緒に帰るの！」

うっっん……まあいつか？どうせ春樹の家は明日行けばいいし。

「じゃあ帰るか」

「うん！」

「当麻！」

「ん？」

この声は……

「フエイト！」

元気になってくれたらしい。今廊下を駆け足で来ている。

「どうした？まさか……アリシアの体調が！？」

アリシアの体調が悪くなったのかと心配してみたら……

「大丈夫、姉さんはちょっと疲れただけで」

「なんだ……よかった」

「それでね……えっと……」

「ん？」

フェイトが下を見て何というか……もじもじしてる。

「その……ありがとう／＼／」

「お、おう／＼／」

なんて言うかこう正面から言われると恥ずかしいな……

「……………」

「ヒギユツ………にゃのひゃさん、いひゃいでしゅ」  
「訳」  
なのはさん、いたいです」

「……………自業自得なの」

「にゃんのきよと!?!」 訳)「なんの!?!」

行き成りなのはほっぺを引っ張られた。いったい何故だ?

「と、とりあえず帰るか」

「うん」

こうやって俺はひと時の平和を味わおうとしていたのかもしれない。

そう・・・ひと時の平和を……………

第四十話「少年と神が交差するとき」(後書き)

あとがきコーナー

当「俺復活!」

ミ《ずっと元気なかつたですもんね》

春「精々僕を生き返らせれるよう頑張ってくれたまえ」(〃、ー、)  
ノ ヨロシク

当ミ「《イラッ》」( ^ - - ^ # ) ムム

作「……まあ元気なのは良い事だ」

作「龍賀さん感想ありがとうございました!」

当「これからどうするんだ?」

作「番外編をいくつかしようかと思ってる訳だよ」

ミ《何するんですか?》

作「何するんでしょうね」

春「決まってないんだ……」

作「いい案募集中です！」

当春「『『それではまた次回！』』」

#### 第四十一話「数多の意思が交差するとき」

三人称 side

当麻の前から去ったあと春樹は神に連れられてとある部屋にやってきた。

「意外と普通な部屋なんですね」

「まああなたの為に用意したんですがね」

「それはどうも」

「何かあれば呼んでください」

「はい分かりました」

敬語を使いこやかに話す春樹、それはいたって普通に見える。

「それでは」

そう言つて去つていくアレイスター似の神。  
それを見送つた後の春樹は――

春樹side

神が去つていった後に近くにあつた椅子に座る。

「……やつとここまで来た」

思わず笑いがこぼれてくる。  
やつとここまで来たんだと実感する。

「全部当麻のおかげだ」

アイツが上手く手のひらで踊ってくれたからこつなつた。

「後は……」

上手くここにいる連中の裏をかくだけ。

本人たちが言っていたようにどうせ本物の神じゃないだろう。  
ならば裏をかくのは簡単、そして目標を達成して

「さっさと帰るだけ」

幸い時間は沢山あるし僕はゆっくり計画を立てよう。  
使える駒もたくさんあるしね。

三人称 s i d e

所変わってここはゼウスと名乗った神と名もなき神が居る場所。

「でだ、あいつはどうするんだ？」

「はい？」

疑問げに訪ねる名無しの神。

「吉井春樹、さっき連れてきた人間……あれをどうするんだ？」

「どうとは？」

「俺たちに得があるとは思えないな。少なくともあれに襲われる危険を考えると……」

「フン、そんな事ですか。アナタが気にするようなことですかね？」

心配……と言うよりは警戒したようにに尋ねるゼウス、それに対し  
て名無しの神はおどける様に肩をすくめ言う。

「まあな。ただ上の老人どもが煩いだよ」

「中間管理職はそんなもんですよ」

「他人事だな」

「他人事ですから」

まるで心の底からそう思ってるかのような言い方。

「でだ、これこれから俺たちはどうする？」

「静観か——」

「参戦か」

「……………」

考えるしぐさをする名無しの神。

「というか、蘇生が予定を入れて四人、それと能力を与えて私結構頑張ってるんですが」

「知るか」

「最低な上司ですね」

「選択権があるだけ喜べ」

「……………私は今無理したら消えそうなんで静観で」

詳しい事は分からないがどうやら当麻の手伝いをするかしないかの話らしい。

さらに名無しの神はこれ以上力を使うと消えるらしい。

「じゃあ参加な」

「私の意見は無視ですか」

「……静観かまあ妥当か」

「あなたの上の方にはあれにちよっかいを出すのはまだ早い、  
も言っておけばいいんじゃないですか？」

それを聞きゼウスはしぶしぶ承知といった様子で頷く。

「まあな。下手に触って爆弾でしたなんてなっても困る」

うんうんと頷きながら意見をまとめる。

「それで話は変わるんだが……」

「はい？」

「お前は俺の敵か？」

突如空気が凍る

「何を言っ——」

「隠す必要はない、ただ聞いてるだけさ」

「……………」

名無しの神が身構える。

それは事実を如実に語っている。  
だが

「まあそれならそれで頑張ってくれよ」

「……………何故？」

「簡単な話だよ」

意味が分からないと言わんばかりの顔をする名無しの神。  
それに対してゼウスは

「おもしろいだろ」

「……………」

「お前が奇策を出してくれたら俺の負け。それを打ち破ったら俺の勝ち」

「……………それで世界が終わったら？」

「どうせ捨てるほどあるんだ。一個ぐらい無くなってもいいだろ」

「……………狂ってる」

1つの世界当たりにもどれだけの人間が居るのかと聞かれればたくさんと答えるしかない。  
ただ今のゼウスの発言はそのたくさんの人間を見殺しにしているようなものだ。

「狂ってなんかいない。ただ楽しんでいるだけさ」

「人間を巻き込んで？」

「人間なんか気にするなよ。所詮ゲームみたいなもんだ」

「……………何を言っても意味がなさそうですが一つ言っておきます」

「なんだ？」

「残念ながら私はまだ何もしてません」

「……………そりゃいい、犯人を探すのは面白そうだ」

想定外といっても言いだろうこと聞かされたのにゼウスに焦りはない。

それすらも楽しみと言わんばかりに笑う。

それに対して吐き捨てるように名無しの神は言う。

「いいんですか油断して？あなたの敵は多いですよ」

「いいのかここに居て？お前の敵は強いぞ」

互いに不敵に微笑みながら言う。  
一時の沈黙そして

「フフ、まあ私は別の物も怖いですが」

「なにがだ？」

今までと違う名無しの神の感情がこもった笑いそれは……苦笑이었다。

「家族つてのは大切ですがね、あの子は家族の為ならやり過ぎますよ……色んな意味で」

??? side

「クシュンッ！」

今なんだか噂された気が……気のせいと思っておきますかね。  
そろそろ私も行動するべきですかね？  
それとも見守る……のはもう無理でしょう。  
生憎この世界の物語は簡単に進めれませんから。  
だからこそ

「そろそろ思い出してもらわなきゃですかね？」

自分がどこの誰で、何で、どんな者であり物なのか。  
そして全部終わらせて

「なんて都合よくいくはずもないですがね」

少なくとも今は何かしらのアクションが必要になってくる。  
さて何をどうやって如何するか……

「まあ何とかなるように神に……祈りたくないですね」

「何一人でぶつぶつ言ってるんですか？」

「何でもないですよ」

大切な仲間が声をかけてくる。  
とにかく今は出来ることをするだけ。  
それが

「あの人の為になると信じて」

数多の人が、意志が、何かが交差するときこの物語は加速していく。

あらゆるものが絡み合い新たな物語となつて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5086q/>

---

魔法少女リリカルなのは～魔法少女と異能少年が交差したとき～

2011年11月17日17時54分発行